

---

# 恋を感じるとき

柏木杏花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋を感じるとき

### 【Nコード】

N5436U

### 【作者名】

柏木杏花

### 【あらすじ】

柚希は、中学一年で性同一性障害と診断された。女として思春期を過ごし、二十歳になったら性転換手術を受けるつもりだった。なのに、初めて恋をした相手が女の子だった。碧に会いたい、顔を見たい。声を訊きたい。そして、触りたい。だけど、それから先が、わからない。女同士で恋人になりたいのか、男に戻りたいのか、霧がかかったように、判然としない。男女なのに、同性愛に悩んだり迷ったりする、ちょっと変な話になりました。切ないですが、ときどきコメディがちらちら入ります。性愛的な部分に踏み込んでます。

15歳以下の人は読まないでくださいね。最後はらぶらぶなハッピーエンドです。

## 第一話

### 新歓コンパ（前書き）

厳密にはガールズラブではないんですが、表現的には男女というよりそつちかな？ と判断しました。R15は迷いましたが、今後なにを書くかわからないので（笑）念のため入れました。苦手な方はご注意ください。

## 第一話 新歓コンパ

「では、ただいまより、M大写真部新入生歓迎コンパをはじめさせていただきます」

几帳面そうな眼鏡顔の、男子大学生が立ちあがった。

さっきまでコップにビールを注いだり、雑談していた部員たちは、部長の声に視線を向けた。

新入生は、緊張した面持ちで持たされたコップを、乾杯の音頭でかけて、口をつけた。いつせいになごやかな拍手が起こる。

居酒屋の二階は、写真部の貸切りだった。

新入生は三人。上級生は二十人ほど。上級生のわりに新入生が少ないのは、秋の学祭のあたりから、入部するひとが多いかららしい。新入生は最初に自己紹介をして、バラバラに配置される。大学生ともなれば、先輩後輩とはいえくだけた雰囲気、居心地は悪くない。

ざっと見たところ、男女の比率は半々だろうか。

瀬戸柚希せとゆきは、唇を離れたコップのふちに、口紅がついているのを見て、眉をひそめた。出がけに慌てていたので、ウォーターブルーフでない口紅を塗ってきてしまった。

上唇についたビールの泡を指でぬぐいながら、辺りを見廻した。

めあてのひとつは、松浦碧まつらあおいと記憶している。

去年、この大学を志望していた友人と一緒に来た学祭で、心に残った写真の撮影者の名前である。名前しかわからないので、男か女かも判断できない。

碧という名は、どちらの可能性が高いのだろう。

よく考えたら、学年もわからないのだ。もしかしたら、この春、卒業しているかもしれない。

「瀬戸さん、モデルでもしてんの？」

ふいに、隣に座っている上級生から話しかけられて、我に返った。串からはずした焼き鳥に箸をのびながら、華奢な肩の女子が小首を傾げている。鎖骨あたりの長さのボブは、天然のようなゆるいパーマがかかっていた。

上級生のはずなのに、高校生くらいにしか見えない。うっかりすると、中学生に見えてしまいそうだ。

着飾っていないとか、化粧つ気がないとか、そんな表面的なものだけではない気がしたが、表情には出さずに愛想よく微笑んだ。

「してませんよ」

「前にも？」

「はい。したことありません」

「へへ、なんか意外だな。街、歩いてるだけで、ガンガン、スカウトされそうな有り様じゃん」

「有り様って、なんかビミョーな表現なんですけど……」

「あるんだ？」

「スカウトですか？ ありましたよ。このウツクシサなんで」

茶化して肩を竦めて見せると、

「うっわ、いまだきの若者はズーズーしいなー」

可愛い顔でおばさんみたいなのをいうので、柚希はビールを吹き出しそうになった。

「先輩……って、先輩って、なに先輩ですか？」

「あ、ごめんごめん。あたし、自分の名前もいわないで絡んでたんだよね。松浦碧。文学部二年。一眼レフはキャノンだよ。よろしく」

「！ 松浦、さん？ 松浦さんって、あの松浦さん？ 『汚れたガラスの向こう側』の？」

「あの松浦さん……なのかな？ 汚れたガラスの向こう側はあたしの写真のタイトルだけだ」

柚希は、数か月前に見たあの写真を思い起こした。物憂げな雨上がりの街の一部分を切り取ったような風景だった。ガラスに反射し

た子どもの背中が、印象的な作品で、ずっと忘れられなかった。

あの写真の撮影者に、会いたいと思っていた。

会って、なにを話したいとか、なにを訊きたいとかは考えていなかった。

ただ、年齢も性別もわからないひとに、会ってみたいと、ずっと思っていた。

だからいま、目の前に松浦碧がいるのを、興奮しつつも不思議な気持ちになった。想像していたより幼いひとだったからだ。

「もしかして、去年の学祭、見に来てくれたんだ？」

「はい」

「今年と一緒にだせるね。カメラは？」

「…えっと、一緒です。キャノンの……」

とつさに、碧と同じメーカーだと口にしてしまった。

実はまだ、購入していないのだ。明日にでも販売店に足を運ばなくてはならないだろう。

「そうだ。副部长も松浦なの、苗字。だから、あたしのごときは『碧さんか碧先輩』で。ほかの新生にもいっつといて」

「わかりました」

そのあとは、碧も他の部員と話したり飲んだりして、喧噪のなかに紛れた。柚希も次々に話しかけられているうちに、時間が過ぎて、碧とゆっくり話をするにはできなかつた。

十時になると二十歳未満は帰らなければならぬ。

なんでも、十年くらい前に、新生が急性アルコール中毒で医学部に運ばれて以来、そういう決まりになっているのだそうだ。

そもそも、未成年なのだから、飲酒は法律違反のだけど、新歓コンパを二十歳過ぎてからすることもできず、ウーロン茶で飲み会もできない、といわけで、十時帰宅、一時会のみ、ということらしい。

現役組は二年生までが、帰宅することになる。

「碧、明日サッカー部、試合じゃなかつた？」

碧と懇意そうな女子が、帰り支度をしていた。このひと現役二年らしい。

「うーん、そういえば、そうだったかも……」

携帯を開いて指をせわしなく動かしている。どうやら碧はスケジュールを、手帳ではなく、携帯で管理するタイプのようだ。

「あー、ほんとだ。明日、試合って書いてる」

「彼氏の応援、行くんでしょ？」

「来てくれとはいわれなかったし、パス」

「横着していると、捨てられるよ」

「その程度で壊れるんなら、無理して引き延ばしてもさ……」

一、二年が上級生に挨拶をして店を出始めた。碧たちの会話を訊くともなしに訊きながら外に出ると、店の出入り口で、駅に向かう者、バス停に向かう者に別れていった。

柚希と碧は、駅に向かう数人のグループと一緒に歩いた。

歩道を歩くうちに、ほかの数人は、ずいぶん後方に行ってしまった。二人だけになっていた。

「彼氏、サッカー部なんですか？」

「うん、まーね」

「応援、来てほしくて、試合の日を伝えたんじゃないんですか？」

「そうかもしれないけど、そういうのを察して欲しいなのは、嫌じゃない？ 来てほしかったら、ちゃんと来て欲しいっていえばいいんだし」

なかなか男らしい考え方の持ち主だ。あっさり割り切ってくれるひとは、恋人にとって楽でもあり、物足りなくもあるだろう。

「彼氏の雄姿を撮りながら、ついでに応援するってのは？」

「絶対、無理」

「どうして？」

「サッカーのコートって、広いじゃない。で、やたら動くし、十数万円のでっかい望遠持ってなきゃ撮れないよ。だいたいあたし、人物は双子と妊婦しかそそられないんだ」

「へー、双子と妊婦」

おもしろい事をいうひとだと、柚希は嬉しい気分になった。

「でも、瀬戸さんはちょっとそそられる」

「え？」

「そのウツクシサだから」

柚希は「光荣です」と声をあげて笑った。

「あたし、前に妊婦さんのヌード写真の撮影に助手で入らせてもらったことがあるんだけど、すごく感動したんだ。でも、妊婦さんのヌード撮影は、本来、カメラマンも助手もみんな、出産経験者なんだって」

碧は憧れに思いを馳せる表情になった。繁華街の明かりに照らされたその横顔が、やけに大人びて見えた。

「瀬戸さんが将来、妊婦になったら、あたしにヌード、撮らせてよ」「えっ……と、でも……」

急に、冷水を浴びせられたような気分になった。とまどった柚希が言葉をつなげられずにいるうちに、駅に着いた。別々のホームに移動するため、短い挨拶をしてそこで別れた。

さっきの発言は、特に意味のないものだったのか、碧は返事の無いことを気にした様子はなかった。

碧の姿が見えなくなると、柚希は大きいため息をついた。

自分が将来、妊婦になることなどあり得ない。

柚希は、男だからだ。

## 第一話

### 新歓コンパ（後書き）

久しぶりに、小説書きました。この二人をどうにかハッピーエンドにしたいと思ってますが、どんな形で決着をつけるか、まだ決めてません。プロットも作らず書いてしまったので、どんどん変更してしまってます。いつまでも手元に置いておくと、書き直しばっかりしてぐちゃぐちゃになるので、見切り発車で投稿します。

## 第二話

### 量販店

翌日、柚希は電化製品の量販店に向いた。

売り場に着いてから、大学の写真部員がどんなカメラを使っているのか、昨夜のコンパでもっと詳しく訊いておけばよかったと思に至った。

昨日は、いろんなひとと話をしたのに、思い出すのは碧との会話ばかりだ。

碧と同じメーカーの一眼レフで、ある程度機能があるものを購入する。店員に事情を話して選んでもらったので、大きく外してはいないはずだ。

紙袋を受けとって、ふと顔を上げると柱の鏡に目が留まる。若い男が、柚希を凝視していた。鏡の中で目が合ったことに気づいて、慌てて男は視線を逸らした。

自分が綺麗な容姿をしていることは、自覚していた。だから、こんなことはよくある。

あなたが見惚れているのは、女装をしているオカマですよと教えたら、頬をそめたあの男は、どんな顔色になるのだろう。柚希はつい笑いそうになって、唇の端を引き締めた。

鏡に映る自分の姿を、女として認識したのは中学になったばかりのときだった。

性同一性障害。

母親にいくつもの病院に連れられて、最後の病院でそう告げられた。

可愛いものが好きだった。綺麗なものが好きだった。黒いランドセルが嫌だった。

病気なんだといわれても、あまりぴんとこなかった。中学一年からホルモン注射を定期的に打ち、身体が男っぽくなるのを抑えた。

いまも錠剤で服用している。

学校も周囲のひと、理解してくれていた方だと思う。

まったくいじめられなかったわけではないし、気持ち悪いといわれたこともある。興味本位な視線を向けられたり、露骨に身体に触ろうとした同級生もいた。

けれど、正義感の強い友人も周りにはいて、助けられた。

よく世間で訊くような、何度も自殺を考えるようなことはなかったのだから、恵まれた環境だったに違いない。

鏡に映った喉元に手のひらを押し当てた。見ただけではわかりにくいけれど、喉仏はある。上を向いて喉をさらし、唾液を飲み込めば、見た目にもわかるだろう。

男の声だと指摘されたことはなかった。成長期の途中から女性ホルモンを摂取していたからなのか、女だと思いついて訊けば女の声に聞こえるのか、これくらいの低音は女の子でも少なくないのか、まあ、そんなところだろうか。

歩きたびにブーツのかかどが、床に音を響かせる。

ぼんやりするたび、碧の言葉やしぐさを思い起こしてしまう。

碧のことばかり考えてしまうのは、気になっていた写真の撮影者だからだ。それ以外に心が動く理由が見つからない。

気になる、というのは、どうということなのだろう。

写真に興味を持ったことなど、それまでなかった。柚希が興味を持つ写真は、雑誌のファッションや化粧品、化粧方法を紹介しているページくらいで、それはあくまで、情報だった。芸術ではない。

写真は素人だけど、碧の作品が非凡とは思えなかった。だけど、柚希の心には強烈な印象を残した。

言動のすべてを思い起こしても、特別な出来事はなかった。今まで出会ったひとたちと同じように、碧は柚希の容姿を称賛し、あたりさわりのない会話をした。

妊娠したらヌードを撮らせて欲しいといわれたのは、多少驚いたけど。

座席に座っていたときは、碧を小柄なのかと思ったが、幼いイメ  
ージのわりには普通の身長だった。並んで歩くと、髪の毛が届い  
て胸が騒いだ。

「サッカー部の彼氏って、どんなひとなんだろう……」  
気になるといふ感情は、理屈じゃない。

## 第二話

### 量販店（後書き）

中学生でホルモン注射はできないそうです。勉強不足ですいません。ニューハーフの人の自叙伝かなにか読んだことがあればよかったです。そもそも、設定もかなり無理やりで、これからも不届きな事態がありそうな気がします。ごめんなさい。

### 第三話

#### 部室 あれ？ 亜衣ちゃん、写真部だっけ？

それから、一週間のあいだ、大学で碧には会えなかった。

学年も学部も違うのだから、見かけられなくても不思議ではない。講義が終わって部室に行ってみても、部長や副部長ら数人が、持ち込んだノートパソコンで画像の編集をしていたり、雑談をしていたりで、写真部の活動とは程遠い。

でも、副部長の松浦からは「そりゃ、そうだよ。学祭は秋だし、部室にいても撮りたい物が来てくれるでもないんだから。やる気のある奴は、外に被写体、探しに行ってるよ」と、明朗な回答をいただいてしまった。

「それ、柚希ちゃんの一服？」

松浦は、素朴な印象の好青年だ。面倒見のいい人柄が、表情ににじみ出ている。

だが、柚希を最初から『柚希ちゃん』扱いして、他の部員にも拡がりつつあるのには、苦笑せざるを得ない。女にしては背も高いし、よく近寄りがたいと評されることが多いのに、ちゃんづけはどうなんだろう。

「実は、買ったばかりで、まだ使い方がよくわからないんです」

両手でもずっしりと重さを感じるカメラを松浦に手渡した。

「へー、これ、去年秋に出たモデルじゃん。プロでも使えるレベルだよ」

「はあ、猫に小判にならないように、がんばります」

「ISO感度はわかる？」

「なんとか。露出の方がわからないんです」

「露出を上げれば明るくなる。下げれば暗くなる。シャッター速度もISO感度も関係してくるし、被写体や屋内屋外、天気にもよるからね。デジタルなんだし、最初はとにかくシャッター押して慣れ

ることかな」

液晶に表示を出しながら、松浦は指先でダイヤルを動かして説明してくれる。

もともと、あまりカメラに興味があつたわけでもなかつたのに、いざ、新しい機械をいじってみるのは思いがけず楽しい。せつかなので、使いこなしてみたかった。

カメラを受けとって、松浦がして見せてくれたように、ダイヤルを動かしてみた。爪が長すぎて引っかかる。左手の爪はなんともないけど、右手の爪は邪魔だった。

そういえば、碧の爪は、短くて無頓着で、そして可愛らしかった。袖希の携帯が鳴った。「すみません」と頭を下げ、通話ボタンを押した。

『袖希、いまだどこ?』

声の主は、表示されたのと同じ、外村亜衣そのむらあゐだった。中学からの友人で、袖希の性同一性障害のことも知っている。親友といつていい存在だった。同じ大学に入学できたが、亜衣は文学部なので、必修の講義でしか重ならない。

「写真部の部屋」

『一緒に帰れる?』

「うん、もうちょっとしたら帰るから」

「友達?」

「だいたいのが話が聞こえたのか、松浦が口をはさんできた。頷くと、

「部屋に来てもらったなら? コーヒー入れるとこだから。多いほうが嬉しいし」

「いいんですか? 部外者を入れて」

「大丈夫だよ。ここはそういうの、しょっちゅうだし」

袖希は亜衣に松浦の言葉を伝えて、部屋の場所を教えた。

五分くらいで亜衣は部屋に着いた。

「お邪魔します」

亜衣は遠慮がちに勧められた椅子に腰かけた。簡単な自己紹介をして、来客用のカップを受け取るころには、亜衣は部員になじんだ。人見知りはしない性格だ。

「なるほど。類は類を呼ぶってこういうことか」

「はい？」

柚希と亜衣を見比べて一人頷く松浦に、柚希は首をかしげた。

「亜衣ちゃんも被写体にしたくらい綺麗だから」

松浦という男は、だれかれ構わず「ちゃん」づけで呼ぶ癖があるらしい。

「でしよう、松浦さん。もっとそれ、大声でいってくださいよ。こんな派手な顔といつも一緒にいるから、わたしの美貌が目立たないんですよ」

こんな派手な顔と指差された柚希は、「だったら、一人で帰ればいいじゃん」とむっとして睨むと、部員がふき出した。

「いいコンビだね。結成何年目？」

「中学からなんで、七年目です」

お笑いコンビじゃないんだから、結成何年目ってなんなんだろう。躊躇なく返せる亜衣もたいしたものだ。

「亜衣ちゃん、柚希ちゃんは中学からこんな感じ？」

「そうですね。こんな感じですよ。あ、でも、中学の時はもっと地味でしたよ」

部員も柚希には興味があるが、近寄りがたいと思っている。亜衣の話には耳を傾けている様子がうかがえた。

「失礼します……あれ？ 結構、人いますね、今日は」

扉のノックの音と同時に入ってきたのは、碧だった。

ツインテールにジーンズの姿が可愛くて、ドキツとした。気まぐずい心地で、柚希は視線をそらす。

「碧ちゃん、いいとこに来た。俺の分も一緒にコーヒーおかわりいれて」

松浦にマグカップを渡されて、碧は「来ていきなり？」と頬を

膨らませながら、鞆をおろした。

「碧先輩、昨日はお疲れ様でした」

「あれ？ 亜衣ちゃん、写真部だっけ？」

「いえ、親友を迎えに来て、お邪魔してます」

「碧さんと亜衣つて、知り合いだったの？」

柚希の問いかけに亜衣が頷く。

「文学部は昨日が新歓コンパだったの。碧先輩とは席が近かったんだ。碧さん、いろいろ話ができて愉しかったです」

「あたしも愉しかったよ。今度一緒に飲みに行く？」

「ぜひ」

「親友つて、瀬戸さん？」

碧は、コーヒーを注いだマグカップを松浦に手渡して、空いている椅子に腰を落とした。

「はい」

「六年越しの関係らしいよ」

さつきはお笑いコンビみたいにいわれたのに、今度は恋人のように表現されてしまった。

涼しい顔をしてマグカップを傾げる松浦に、柚希はため息をつきたくなった。

「そうなの？」

「実は、そうなんです」

亜衣は調子よく頷いた。本当に、場に溶け込むのがうまい。

「いいな」。うらやましいかも」

柚希は、碧の言葉に反応しそうになった。なにに？ だれに？

馬鹿みたいだ。仲のいい友人が学内にいるのがうらやましいとか、そんな程度の意味に違いないのに。

「それでいま、柚希ちゃんの知られざる過去を、亜衣ちゃんから訊きだそうとしていたとこなんだよ」

「口説く突破口を探ってるんじゃないんですか？」

「ええ？ 松浦さん、そうなんですか？ 柚希は可能性ゼロですよ。」

無駄な努力はやめたほうがいいです」

「なんで？ 彼氏がいるから？」

「柚希は理想が高いんです。果てしなく、果てしなく、果てしなく、この言い訳は、高校の頃、亜衣が考えたものだ。」

下手に彼氏がいるとか、好きな人がいるといつてしまえば、だれだと訊かれてしまうし、だれかわからなければ、あきらめてもらえない。

理想が高い、とは、曖昧な理由だけど、柚希がいうと納得してもらえないのが不思議だった。とにかく、効き目はある。

「なるほど。やっぱりね」

松浦は腕を組んで何度も頷いている。べつに、本気で柚希を口説きたかったわけでもなかったに違いない。これまでの接触の中でも、ぎこちないものはなかったし、可能性がないと告げられたいまだって愉しそうだ。

「ところで、碧ちゃん、今日はなんかするつもりだった？」

「いえ、暗室、近いうちに使わせてもらいたいんです」

「現像すんの？ いいと思うよ。ねー部長、いいだろ？」

「ああ、いいぞー」

部室の奥で、写真を整理していた部長が声を投げる。

「俺のほうから、部員に一斉メールで、現像前のフィルム持ってる奴いたら、ここに持つてくるように連絡しとくよ」

松浦は立ち上がると、自分の机の引き出しからフィルムを二つ取り出して、油性ペンで「副」の字を書きこみ、よろしく、と碧に手渡した。

「いつする？」

「今週の金曜日がいいんですけど」

「わかった。一人だときついよな？ だれか頼んでる？」

「いえ」

カメラも今やデジタルの時代ではあるが、写真部の中にはモノクロフィルムのアナログな味わいを好んでいる者も多い。部室の一角

には、小さいながらも暗室があり、自分たちで現像もできるのだ。自分たちで現像した写真は、また味わい深さもひとしおだった。「どうせなら、一年から一人、手伝わせたいな。二年以上は一回はやってやり方覚えてたろうし」

暗室は狭いので、二人しか入れない。現像液やその他の材料を無駄なく使うなら、部員の分をかき集めてまとめてするのが、効率的だ。

だから、一人では時間もかかるし、重労働になってしまう。

「柚希ちゃん、金曜日どう？ 放課後、空いてる？」

「はい、大丈夫ですけど、他の子に声かけなくて、いいんですか？」

「暗室は同性で作業する決まりなんだよ。碧ちゃんとだから、きみならちよつどいい」

「あ、でも、それなら、やっぱり…」

「？」

「…いえ、なんでもありません。金曜日ですね。何時にここに来ればいいですか？」

「講義終わるの、何時？」

「今度は碧に尋ねられた。」

「四時半です」

「じゃ、五時に来てくれる？ なんかあったら連絡したいし、アドレス交換して」

「はい」

「赤外線、できる？」

「できます。受信すればいいですか？」

「そうして。こっちが送信するから」

二人で額を突き合わせて操作していると、柚希の携帯からメールの着信音が鳴った。確認すると、碧からの空メールだ。

「届きました」

碧と携帯がつながったんだな、嬉しくてぼんやりしていると、亜衣に袖を引っ張られた。

「今日ってまだ部活ある？ 長くなるなら、先に帰るけど」

「大丈夫。もう帰るから」

まだ、カメラをまともに触れない状態で、部活もない。もともと、部室に顔を出しているのも、碧が来ているかもと思うから、足が向いてしまっただけだった。

第三話

部室

あれ？

亜衣ちゃん、

写真部だったけ？

(後書き)

## 第四話

### 廊下 違うと思うけど、そうかもしれない。

部員に挨拶をして、部室を後にした。亜衣と一緒に廊下を歩く。校舎は静かだった。窓の外から歓声がかすかに届く。運動部がまだ残っているようだった。

「なんか、挙動不審だね」

亜衣の指摘に、柚希は俯いた。

「碧先輩が来てから」

「うん……、そうかも。わかりやすかった？」

「他の人は、気づいてないよ、きっと。碧先輩と暗室に入るの、躊躇ったでしょ」

「同性で入る決まりだっていわれたから」

「柚希は女だよ」

「そうだけど……」

相手が自分の状況を知っていて平気だといってくれば、問題はない。けれど、女だと思われるのに、騙しているみたいで心苦しかった。

「写真部の人たち、いい人ばかりじゃない。みんなが嫌なら、松浦さんと碧先輩だけにでも、本当のこと、告白したら？ なんがあったときフォローしてもらえて、楽になるよ」

「うん、そうだよね。でも……」

カミングアウトが怖いと思ったことは、今までなかった。気持ち悪いと思われても、軽蔑されてもしかたないと思っていたし、相手が自分をどう思おうと、気にしたこともなかった。軽蔑される自分のことも、どうでもよかった。

けれど、碧に本当のことを告げたら、どう思われるのか、怖くてもしかたがない。

いまは、顔の綺麗な後輩と認識されている。『瀬戸さんはちよっ

と、そそられる』程度には、興味を持ってもらえている。

柚希が女装をしていると知ったら、あの穏やかで優しい笑顔はどう変わってしまうのだろうか。

「ねえ、柚希……」

「なに？」

「薬、ちゃんと飲んでる？」

薬とは、女性ホルモン剤のことだ。

「飲んでるよ」

「いままで一度も、男に恋愛感情、持ったことない？」

「ないよ、知ってるでしょ」

「『あの後』も？」

「…ないよ」

「碧先輩のこと、意識してる？」

「……………うん、たぶん」

亜衣には、取り繕ったりごまかしたりできなかった。亜衣は特別な友人だった。亜衣に言葉を返していくうちに、自分の気持ちを整理する道筋を作れるような気がした。

「恋愛感情？」

「どうか。違うと思うけど、そうかもしれない。よくわからない」

正直な気持ちだった。

「ごめん」

突然亜衣に謝られて、柚希は顔をあげた。

「なにが？」

「『あの後』とかいって、嫌なこと思い出させて」

深刻な言葉のわりに、口調は穏やかだった。亜衣は、あの出来事を風化させることもなく、後悔することもなかったのだろう。女の子は強い生き物だ。

けれど、話を蒸し返した行為を詫びた亜衣に、柚希は不満だった。この親友は、どうしてそんなふうになるのだろうか。嫌な思いをしたのは、柚希より亜衣のはずなのに。いまからでも、恨み言のひと

つくらい、いえばいいのだ。

柚希は高校二年の夏、この親友と肌を重ねたことを思い出した。

## 第四話

廊下 違うと思うけど、そうかもしれない。(後書き)

ようやく、投稿の仕方がわかってきました。今頃？(笑)

以前、小説を書いていたときは、一太郎でした。wordはまだ慣れません。投稿した後で、ちょっとしたミスが見つかってしまいます。できるだけ、(改)をつけたくないんですが。

## 第五話

### 高校の回想

その日も、うだるような暑さだった。

柚希の部屋は、朝からエアコンをかけっぱなしで、寒いくらい涼しかった。

夏休みの課題が多い高校だった。ずっと一人でするより、友人と長期戦を交えたほうが、効率も上がるからと、亜衣が昼過ぎから来ていた。一緒に宿題をするつもりだったけど、やはり雑談が多くなる。

三時を過ぎて、柚希の母親が顔を覗かせた。

「柚希、仕事いつてくるね」

「いつてらっしゃい」

「亜衣ちゃん、よろしく。帰るとき、気を付けて」

「はい」

柚希の母は、銀座で店を二つ持っている。不景気をものともせず、立派に乗り切っていた。人気絶頂のカリスマホステスだった頃、結婚もしないで柚希を産んだ母である。

だから柚希は、自分の父親がだれなのかを知らなかった。小さかった頃は、知りたいと思っていたが、訊いてはいけない気がして、訊けずにいまに至る。訊いたところで、納得する答えをもらえらるも思ってなかったから、父の存在は諦めていた。

ずっと夜の仕事をしている母親とは、一緒に過ごす時間が少ない。だから、亜衣のような友人が家に来てくれるのは、母も歓迎していた。

「柚希、彼氏、いないの？」

この年齢の女子なら、一番気になる話題である。けれど、亜衣がこんな質問をしてきたのは、初めてだった。亜衣は、中学の時、柚希が性同一性障害と診断されて苦しかった頃、そばで支えてくれて

きた。その亜衣が、こんな質問をしてきたということは、自分も  
う、普通の女の子に近いのだろうと、柚希は思った。

「いないよ」

「片思いも？」

「うん。なんでかなって、自分でも思うけど、テレビでアイドルと  
か見てても、なんとも思わない。女の子の方が見てるかな。髪型と  
か、服装とか」

「クラスの男子は？」

「なんか、みんな苦手かも。話とかは普通にできるけど、できれば  
あんまり近づきたくない。熱っぽい視線で見られると、怖いってい  
うか、気持ち悪いっていうか……」

性同一性障害なら、好きになるのは男のはずだ。けれど柚希は、  
いままで、同性にときめいたことがなかった。

「なんでだろ。なんか生理的に無理な気がする。いつか、好きにな  
れる男の子が現れるとは、どうしても思えない」

開いたノートに頬杖をついて、柚希はずっと一人で悩んでいたこ  
とを吐露した。

「柚希って、ほんとに性同一性障害なのかな？」

亜衣の言葉に、柚希は驚いて顔をあげた。

「だって、生理的に受け付けなくて感覚は、年齢を重ねたってそ  
んなに変わらないんじゃないの？」

「……………」

「世の中には、結婚して子供もいるけどオネエなおじさんもいるし、  
彼女がいるけど女装が趣味って人もいるじゃない。柚希はそっちな  
んじゃないの？」

「そんなこと、思ってみたことない」

医者に診断されたから、そうだと思っていた。女の子の服装に身  
を包んでみたら、妙に落ち着いた。なのに、男に恋愛感情を抱いた  
ことは一度もない。でも、女の子に恋愛感情を持ったこともないの  
だ。

亜衣の言葉で、ますます自分をどこに位置付ければいいのか、わからなくなってきた。

ふいに亜衣が膝で移動してきた。二人でベッドを背もたれにして並んで座る。

亜衣は袖希の手を取ると、自分の胸に乗せた。

「どう?」

「亜衣? 急になに?」

「いいから、感想は? 気持ち悪い? 生理的に無理な感じ?」

「……………気持ち悪くないし、生理的に無理とかは思わない。柔らかいし、大きくなって思う」

「もうちょっと先まで、確かめる?」

正直に言えば、確かめてみたい。けれど、亜衣にとってこれから先の行為は不愉快なものになるだろう。もし、袖希が男としてまともだったら、亜衣は好きでもない男と初体験をしようわけだし、まともでなければ、自分の身体に反応してもらえなかった、魅力がなかったと自信を失ってしまうかもしれない。

「やめよ」

「なんで?」

「亜衣にはいいこと、なにもないじゃん。それに、大事な友達をなくしたくない」

「わたしは、こんなことで袖希の友達を降りたりしない。確かめることは袖希にとって大事なことから、わたしが役に立ちたい。他のひとに任せたくない」

亜衣の友情が胸に沁みだした。この先、だれかに恋をしてもしなくても、亜衣が友達でいて欲しいと思った。

「ありがとう、亜衣。ごめん…」

袖希は、ゆっくりと亜衣に顔を近づけた。

……………結論からいえば、袖希と亜衣の行為は、キス以上セックス未満で終了した。性を擦り合う行為は、不快感こそなかったが、

性的に興奮することはなく、柚希の男性器が勃起することはなかった。

ホルモン剤の摂取が影響しているのか、精神的な要因があるのかもはっきりしない、曖昧な決着だった。

ただ柚希は、この出来事に深く感謝した。亜衣には、この中途半端な情交を忘れてしまふくらい、かけがえのないひとに出会って、恋をして欲しいと願った。

第五話

高校の回想（後書き）

## 第六話

暗室 グロスって、キスしても取れないの？

暗室はレトロな空間だった。

赤い電球は頼りない明るさで、初めての柚希は戸惑うばかりだ。

「瀬戸さん、現像液、取って。棚の右上の白いポリ容器」

白いものが白くは見えない明かりの中で、なんとか指示される通りに動けた。洗ったり捨てたり容器に移したり、フィルムの数が多いので、それなりに大変だった。

「定着できたみたい。あとは水、流して十五分待つだけ。あ、乾かさなきゃいけないけど。手伝ってもらえて、助かった。ありがとう。あとは、一人でも大丈夫だし、帰ってくれてもいいよ」

「せっかくだから付き合います。最後の工程まで見ておきたいし」

「そう？ じゃあ、お願いしよーかな」

碧は嬉しそうに顔をほころばせた。

「大学、慣れた？」

水を流している暗室から外に出て、二人は缶コーヒーを飲みながら時間を潰していた。

「だいぶ。でも講義はちょっと難しいです」

「法学部だもんね」

「必修のほうが多いのありますよ」

「なに？」

「図学」

「あー、図学。あれ、五人に一人は単位落とすんだよ」

ただでさえ難しい内容なのに、図学の教諭は生徒に理解させようという気持ちがないのではないかと、柚希は疑っていた。だからと本を読みあげる口調はまるで子守唄だし、黒板に図式を書くスピードが、やたら速い。

「でも、あたしは図学、結構、好きだったな」

「えー、すごい。どこが好きなんですが？」

「教授の声が」

「声？」

「あの先生、低くて甘い声じゃない？ ああいう声、結構好み」

「はあ……」

図学の教諭は還暦をとうにすぎた老人の印象しかない。それほど美声だっただろうか、首をかしげた。

「でもイチオシは史学の小野寺先生だな。めちゃくちゃ、甘いのも、どうやら碧は声フェチらしい。そう指摘すると、「そういえばそうかも」と苦笑した。

明るい電球の下で碧を見つめれば、時折、年齢にふさわしい落ち着いた表情を見つけられる。そしてすぐに、屈託のない笑顔に変わるのだ。

幼いひと、というのが第一印象だったが、子どもっぽいのではなく、無邪気だったり素直だったり、そんな性格が前面に出ているのかもしれない。

このひとを、もっと知りたいと思った。

双子と妊婦にしか撮影意欲がわなくて、恋人に対して素っ気ないこと。声フェチなこと。

もっと、もっと知りたかった。

「ね、グロス、塗ってる？」

碧が柚希の唇を見つめていた。

「ええ」

「缶コーヒー飲んでるのに、あんまり取れないね」

「そうですか？ 朝、塗っただけなんですけど」

「グロスって、キスしても取れないの？」

「さあ、どうなのでしょう。ためしたことないから」

碧はいま、恋人のことを考えているのだろうか。胸を絞られるような思いがした。

新歓コンパの日、碧に恋人がいると訊いたとき、冷静でいられた。それから碧のことは気になってはいたけど、穏やかな好意だったと思う。

けれどいま、碧が恋人とのキスを想像しているのかと考えるだけで、悲痛な気持ちになった。

「ためしてみたい？」

「え？」

ふいに碧は椅子から立ち上がった。柚希の前で立ち止まり、腰がかがめた。

唇が触れ合うのを感じた。

流しっぱなしの水音が、やけに大きく聞こえた。唇から伝わる柔らかさを感じる前に、それは離れた。

「びっくりしたんですけど」

ひどく動揺しているのに、落ち着いた声だったので、自分でも驚いた。

「ごめんごめん」

反省している様子もなく、口元を覗き込んでくる。

「くつつくだけのキスじゃ、取れないみたいだね」

実験結果を確認するような口調に、柚希は腹が立つてきた。一人で動揺していることも悔しくて、恥ずかしかった。

「ちゃんとしたキスだったら、取れるかもしれませんよ」

挑発的なことをいつてみた。

「……してみたい？」

返事をする代わりに、手のひらを後頭部に差し込んで引き寄せた。一瞬、抗うように身体をかたくさせた碧だったが、すぐ合わせた唇を柚希にあずけた。

抵抗される気配がないのをいいことに、角度を変えて、口づけを深くした。舌をのばすと、碧も舌を絡めてきた。

あまりにも官能的なキスに、柚希は我を忘れた。

気になっているだけだと思っていた。

亜衣に、恋愛感情かと訊かれたときも、わからないと答えた。本当にわからなかったからだ。

なのに、碧がほかの男のことに気持ちを向けていると想像しただけで、辛くなった。

実際に触れてみて、好意の意味が明確になってしまった。

恋を感じた瞬間だった。

キスしながら、柚希は下腹部に血液が集まっていくような感覚を覚えた。異様な感覚に戸惑ったが、もつと碧に触れ合っていたくて、気持ちを集中した。

突然、携帯のタイマーがけたたましい音を発した。水で洗い流す作業が、終了したのだ。

碧は弾かれたように身体を離して、暗室に飛び込んだ。

夢を見ているような気分でのろのろと立ち上がった。キスをしていた時に、一瞬感じた下腹部の違和感を思い出す。経験のない不快感だった。

視線を自分の下半身に移した。レギンスとフリルのショートパンツに包まれた脚は、いつもと変わらない。身体を中心部分に触れてみる勇氣は、どうしてもなかった。

第六話

暗室　グロスって、キスしても取れないの？（後書き）

## 第七話

### 部室 あたし、レズの才能でもあったのかな

現像できた印画紙を吊るして、バットを片付けていく。

水の中から解放された写真は、撮影者の個性が出ていて、おもしろい。

「副部長の写真、いいなあ。この人、なんでも器用にこなすから」「あ、ほんと。松浦さんデジタルでもセンスいいの撮るし、すごいですよ」

「器用貧乏だって自分でいってたよ」

最初に吊るした写真から、ドライヤーで乾かしていった。

二台のドライヤーの音に救われている思いだった。気まずいような恥ずかしいような居心地の悪さだ。

あんなキスをした直後なのだから、お互いぎこちないのは当然だろう。けれど、女同士の戯れが、多少、度を過ぎたからといって、ふたりの距離は遠くも近くもならない。柚希の高校でも、女の子同士のキスが流行ったことがある。

同じ世代だし、碧にも同じことがあったのかもしれない。

「瀬戸さん、キス慣れてるね」

口づけのことは蒸し返さないと思っていたので、唐突に投げられた爆弾に柚希は心臓が波打った。

「そんなことないですよ」

「絶対、慣れてる」

「本当です。モテないんで」

嘘ではない。憧憬の思いを伝えられることは多かったが、交際を申し込まれることは、それほどなかった。

「そりゃ、その辺の男にはモテないでしょ。でも、とんでもないひとはモテるんじゃない？」

いつている意味がさっぱりわからない。

「とんでもないひとつって？」

「なんていうか、すごいひととか……」

「ますます、碧のいつている意味がわからない。こんなに脈絡のない話し方をする碧も珍しかった。」

「あたし、女同士でベロチューしたの、初めて」

「あからさまな表現に、柚希は顔から火が出る思いになった。」

「すみません。ついうっかり……」

引きつった頬に無理やり笑みを浮かべた。

「べつに、謝らなくていいよ。あたしが誘ったんだから」

「ドライヤーを動かしながら、碧は乾いた写真を重ねていく。」

「なんか、変かも」

「なにが変なんですか？」

「どうか、なりそうだったから」

息が止まりそうになった。鼓動の音がドライヤーの音より大きく感じる。鼓動の音を聞かれてしまいそうな気がした。ドライヤーを持つ手が震えた。

「おかしいなあ。あたし、レズの才能でもあったのかな」

「……………碧さん」

「なんか、あたし、変なことばかりいつてるよね。ごめん。ほんとに気にしないで」

「いま目の前にいるひとが、手の届くひとだと思ってしまいそうになる。」

指を伸ばしそうになったとき、碧の携帯が鳴った。

携帯を開いて、碧は耳に押し当てる。

「……………うん、うん、いま大丈夫だよ。月曜日、学食でいいの？ わかった。じゃあね」

鞆に携帯を放り込んで、碧が振り返った。

「早く片付けて帰ろう。おなか、空いてきちゃった」

柚希は、ほっとしたように頷いた。

片付けを終わらせて、部室から出たのは七時を過ぎていた。辺りはすでに暗くなっている。

「さっきの電話、彼氏からの」

碧の言葉で、柚希は碧に恋人がいたことを思い出した。

「彼氏っていつか、元彼っていつかだけど」

「別れたんですか？」

「うん。なんかお互い遠ざけてただけど、ちゃんと解散したんだろうね。まじめな性格だから。一応メールで友達に戻ろうって伝えただけどさ」

「悲しくないんですか？」

「ないなあ」

「喧嘩したんですか？」

「ううん。優しくかったよ。最後まで」

長い付き合いの末の、自然消滅ならば、別れもこんなにおだやかなのだろうか。

「付き合いってどれくらいですか？」

「三ヶ月ちよつとかな」

想像と違ってずいぶん短い付き合いだ。三ヶ月なら、一番楽しい時期のはずなのに。

「あたし、いつもこんな感じなの。優しいひとしか好きになれないのに、優しいひとに優しく抱かれても感じないんだ」

「……………」

「不感症なのにセックス依存症の女の子って、世の中にどれくらいいるのかなあ」

淡々と他人事のように話す碧が、とても痛々しいと思った。

このひとは自分を飾ることも、隠すこともしない、強いひとなんだと思った。

純粹で寂しがり屋で、精神的にも肉体的にも、辛いことをいくつも乗り越えたひとなんだと思った。

いまこの瞬間、抱きしめたい衝動に駆られた。そんなことを許さ

れる立場じゃないのがわかっていたから、かろうじて堪えた。

碧の悲痛な胸の内を訊いたのに、恋人と別れたことに安堵している自分が情けなかった。

「取れちゃったね。グロス」

「碧さんについてちゃってますよ」

口紅を分け合ったこの日の出来事が、これから先、どれくらい深く心に残るのだろう。柚希は泣きたい気持ちになった。

第七話

部室

あたし、レスの才能でもあったのかな（後書き）

## 第八話

### キャンパス わたしの最初は、柚希だし

それからしばらく、柚希は部室に顔を出さなかった。

碧に会って、うまく対応できるか自信がなかったし、もともと、高校の部活でもないから、毎日部室に日参する必要がないのだ。夏季休暇を過ぎれば学祭の準備も入ってくるが、それまでは、部室での作業はない。

この日の昼休み、柚希は亜衣とキャンパスの木陰で、学生生協で購入したサンドイッチをかじっていた。午後一番の必修が休講になったので、たまには気分転換しようとメールで待ち合わせたのだ。

昼食を終え、それぞれの学部の友人や、昨日のドラマの話に盛り上がった。

話をしながら、柚希はこのところ持ち歩いてるカメラをいじる。

「なんかいいの撮れた？」

「全然。まだ、使い方を探ってる状態だし」

そういいながら、木の根元に照準を合わせてシャッターを押してみる。

「うーん、暗いなあ。この木陰だと、露出をあげるのがいいのかな。フラッシュ出したくないし、シャッター速度を遅くしたほうがいいのかなあ。三脚ないからブレちゃうか。難しいなー」

カメラの液晶を睨みながら、柚希は考え込んだ。やがて、ペットボトルに口をつける亜衣にレンズを向けた。

「もー、また練習台？」

「いいじゃん、減るもんじゃないし、動くものも撮らないと練習にならないもん」

「モデル料ほしいよ」

「友情出演ってことにして」

最初こそ、おもしろがってモデルを務めてくれた亜衣だったが、

ピントも合わない、暗すぎる明るすぎるのひどいデキに辟易して、微笑んでみせることも、カメラに視線を合わせることもしなくなつた。

綺麗に撮ってくればいくらでも協力するのに、と不満顔の写真すらある。

今どきのデジカメはオート機能も充実しているので、いくらでも綺麗に撮れる。にもかかわらず、マニュアルで探りながらの撮影は、失敗続きだ。

カメラは奥が深い。

「袖希の短い爪も、見慣れてきたな」

「そう?」

カメラのシャッターを押しながら、言葉を返す。

「自分ではどうなの? 長い髪と長い爪じゃないと落ち着かないって、いつてたじゃない」

「慣れたよ。髪も洗いやすいし」

苦笑しながら、カメラのダイヤルをいじる。少しずつ露出をあげてためしていく。

「ねえ、亜衣」

「なに?」

「ちよつと、変なこと訊いていい?」

「どうぞ」

「好きなひととエッチしてるのに、感じないことってあった?」

「つて、ちよつと、なにそれ。法学部の学生がセクハラ発言だし」

亜衣は顔を赤らめて怒って見せた。その間も袖希はシャッターを押ししているので、怒った表情もカメラに収められている。

亜衣はげんなりした気分になった。

「親友が悩みを相談してるだけでしょ」

「もー、なんなのよ。ないよ、そんなの…、あ、一回あったかな」

「どなんだった?」

「具体的に訊きますか?」

「だって、私、そういうこと経験できないし、こんなこと訊けるの、亜衣だけだし」

一瞬、亜衣ははっと目を見開いた。そして、諦めたように息を吐いた。

「感じないっていうか、嫌だった、だけど？」

「うん、よかったら、教えて」

「前に付き合ってたひとが、縛ってしてみたい、っていったの。嫌だったけど、多少興味もあったし、その人のこと、好きだったから、結局してみたんだけど、全然よくなかった」

「ふー……ん？」

まともな性行為の経験も欲求もない柚希は、曖昧な頷き方をした。愛情があれば、多少の遊び心はあっても普通のような気がした。縛るくらいの行為は、遊び心の範囲内ではないのだろうか。

「とにかく、だんだん腕が痛くなるし、痛いのが気になって気持ちが悪くていくし、散々だった」

「へー……」

「とにかく、あたしはSMのケはないんだって思い知ったの。あーというのが好きな人もいるんだろうけど」

「優しくされて、嫌だったことは？」

「そんなの、あるわけないよ。なんで？」

「なんでって訊かれても困るけど、好きな人に優しくされて嫌なのは、どんな理由が考えられるのかなって」

「さあ、わからないなあ。本当は好きじゃないとか、他に好きな人がいるとか、なんとなく相性が悪いとか？」

「うーん、相性が」

写した写真を液晶に表示させて、確認する。何枚かは意図した場所にピントが合っている。暗さも数を打つ度、徐々に解消してきている。

「そつえば、この前、碧先輩と飲んだとき」

急に碧の名前が出てきたので、胸が波打った。不自然な態度にな

らないように液晶の表示に視線を落としたまま、ダイヤルを送ったり戻したりしてごまかした。

「碧先輩、結構、酔っぱらって、コイバナ訊かせてくれたの。最初に付き合っただひとが最悪なひとだったんだって。浮気されたり殴られたりもしたって。それでも、好きだったから、別れられなくて、辛くてしかたなかったみたい。いまは、そのひとのこと思い出すのも嫌で、吹っ切れてるみたいだけど」

ペットボトルのお茶を飲みほして、亜衣はため息をつく。

「最初のひとつで、女はいつまでも引きずっちゃうかもね。引きずらなくても、エッチの基準にはなるのかも」

「……亜衣もそうだった？」

「わたしの最初は、柚希だし」

ひとの悪い顔で舌を出されて、思わずカメラから顔を離す。

「あんなのカウントしちゃう？」

「突っ込むだけがエロじゃない」

「下品すぎる」

「そうかな」

「お嫁に行けなくなっても知らないよ」

「大丈夫。いざとなったら、柚希にもらってもらっちゃうから」

「来年には戸籍も女になっちゃうから、無理です」

こんな冗談を笑いながら交わせる親友の存在が、柚希にはありがたくて仕方がなかった。

ほんの少し、苦い思い出に触れてしまうことも、自分たちにはきつと必要なことなのだ。

第八話

キャンパス わたしの最初は、  
柚希だし（後書き）

## 第九話

### 柚希の部屋 碧だけが、柚希の心を揺さぶった

ひとり暮らしのマンションに帰ってくると、柚希はベッドに身体を投げ出した。

頭の中で、いろんなことがグルグル回って、混乱している。

碧のことを知りたいと思っていた。最近、少し知ることができた。知って、勝手に落ち込んでいる。

「恋愛って、難しい……」

碧のことを、すべて理解できたわけではない。けれど、彼女の胸に棘が刺さっていることは理解できた。その棘を抜く方法は見当もつかないけど。

わからないのは、自分のこともだ。

自分は碧と、どうなりたいのだろう。

性同一性障害と診断されて、女として生きてきた。なのに、どうしても男を好きになれなくて、自分は一生、だれにも心を動かすことがないのかと思っていた。

碧だけが、柚希の心を揺さぶった。

恋の対象が女の子だったことには、戸惑ったが安心もした。まともな感情もあつたと知ったからだ。

碧に会いたい、顔を見たい。声を聞きたい。そして、触りたい。だけど、それから先が、わからない。

女同士で恋人になりたいのか、男に戻りたいのか、霧がかかったように、判然としない。

二十歳まで、一年ちよつとしかない。二十歳になったら、性転換手術を受けるつもりだった。けれどいま、生まれた性別に未練を覚えていた。こんなことになるとは思わなかったから、ムシヤクシヤする。

懇意な後輩としてそばにいることは簡単だけど、碧に恋人ができ

るのを見ているのは、耐えられそうにない。ならば、自分は男に戻りたいと願っているのだろうか。

「考えられない……」

無理だと思った。

思春期の頃から薬を服用して成長期を終えた身体は、肩幅も背中もきつと広くはならない。春休みに亜衣と行ったエステで、脚も脇も永久脱毛をしてしまった。なにより、自分はED（性的不能）だ。初めて夢精をして、あまりの嫌悪感に吐いた。何日も食事ができずに、眠るのが怖くて、うつ状態になった。病院に連れて行かれて、性同一性障害と診断されたのだ。

それ以来、そこは一度も反応したことがない。亜衣の指で擦られたときですら。

……いや、一度だけ、碧とキスしたとき、違和感を覚えた。でもその感覚が性器の屹立の兆しであったかは、判断できなかった。

あまりにも中途半端だ。心も身体も。

うんざりして目を閉じると、鞆の中からメールの着信音が鳴った。腕を伸ばして携帯を確認する。松浦からのメールだった。

『最近来てないけど、カメラには慣れた？ もうすぐ就活で部屋にはあんまり顔を出せなくなるから、訊きたいことがあったら早めにおいで』

文字だけのシンプルなメールだ。

「面倒見いいいなあ。松浦さん」

写真部に入ってわかったことなのだが、写真部員でも一眼レフを持つ者は半分もいない。驚いたことに、携帯で写す人もいるくらいなのだ。

一眼レフを持つ上級生は、同じメーカーの後輩に指南する構図になっっているようだ。松浦が就活で席を外すようになれば、碧がその役を引き継いでくれるのだろうか。

現在、部長を筆頭に、別のメーカーの一眼レフを使う部員が多数

を占めていた。

『明日、部室に行かれますか？』

レスしてすぐ、着信音が鳴る。

『行くよ』

『じゃあ、明日撮った写真、見てください。パソコンに入れて持っていくます』

『了解』

柚希はベッドから起き上がって、ノートパソコンを立ち上げた。カードリーダーを接続して、メモリからデータを取り込む。

枚数があるので、結構、時間がかかった。取り込んだ画像を確認していくと、カメラの小さな液晶ではわからなかったミスが見えてきた。ほとんどがひどい写真だが、消さずに残しておくことにした。明日、松浦に見てもらったときに、原因がわかる方がいい。偶然、よく撮れた写真だけを持って行っても、次に繋がらない。

柚希は、キッチンに向かった。全部確認するのは、まだ時間がかかりそうだ。コーヒーを飲みながら、のんびり取りかかろうと伸びをする。

カップにインスタントのコーヒーを入れて、リビングに戻った。コーヒーの匂いに包まれていると、あの日のキスを思い出してしまふ。

缶コーヒーを飲んでもグロスが取れない、と指摘されたのをきっかけに、あんなことになってしまった。

あれから随分経つのに、合わせた唇の感触が消えない。絡めた舌の甘さが忘れられない。

パソコンの画面が止まっていた。止まった画面をぼーっと眺めていると、メールの着信音が聞こえて思考を戻された。また松浦からの連絡かと思つて携帯を開くと、発信者は碧だった。

驚いてメールを開く。

『昨日、お姉ちゃんの友達がうちに遊びにきたの。双子の子ども連れだよ。すごい可愛かった』

画像の添付が添えられていた。双子が画面から、はみ出しそうな勢いで近づいてくる写真だった。

短い文章を何度も読み直した。あのときのことには、なにも触れられていない文章だったのに、胸が高鳴った。

落ち着かない心地で返信しようとして、指を止めた。なにか、画像をつけたくなくなった。最近、携帯では写真をほとんど撮らないし、古い写真を付けても意味がない気がした。

結局、いま読んでいる文庫本をテーブルに乗せて、写真を撮った。近況報告くらいにはなると思うことにした。

『メール、ありがとうございました。双子ちゃん可愛いですね。ふたりとも、男の子ですか。さつき、松浦さんから連絡がありました。明日、いままでに撮った写真を見てもらうことになりました。あきられそうな写真ばかりですけど』

しばらくすると、レスが来た。

『あたしも行く。あたしも見たい』

ただ、それだけだった。レスしようとして携帯を見つめた。なんて書いていいかわからなかった。

久しぶりで嬉しい？ 楽しみにしてます？

あの出来事を、なかったことにはしたくなかった。でもなかったことにしなければ、そばにいられないなら、忘れたふりをした方がいいのだろうか。

あの出来事に触れない碧のメールには、そういう意図があるのだろうか。

結局柚希は、返信することができなかった。

第九話

柚希の部屋

碧だけが、

柚希の心を揺さぶった（後書き）

## 第十話

### 部室 被写体、亜衣ちゃんが多いです

翌日、講義が終わって部室に行くと、松浦や部長をはじめ、かなりの人数が来ていた。碧の姿もある。

「すみません。遅れました?」

「いや、学祭の大物のことで話があったから、早めに来てただけだよ」

松浦が手招きして、隣に来るように机を指差した。

「大物?」

「それはあとで話すよ。とりあえず、柚希ちゃんの写真、見せて」  
柚希はノートパソコンを開いた。最近撮った画像を表示させて、松浦に見せる。

「下手だなー」

開口一番、遠慮のない評価を下す松浦に、部員は吹き出した。

「初心者なんですよ。しょうがないでしょ」

「そりゃそーだよな。ま、下手はともかく、たとえばこの写真、ここをクリックすると、カメラの機種、モード、シャッター速度、露出、ISO感度と、いろいろ情報が出てくるんだよ」

「あ、ほんとだ。すごい」

「で、同じ場面で少しずつ露出を上げていってるのもわかるだろ」  
「はい」

「ISO感度は変えなかったんだね。なんで?」

「前に、ISO感度あげて写したとき、ノイズがひどかったんです。それからは、ISO感度はほとんど触ってなくて」

「いくつまであげた?」

「えっと、確か1600。あ、これです」

問題の写真を、クリックして見せた。

「室内で外からの光だけか。なるほど。実際にその場でしてみない

とわからないけど、露出やシャッター速度を工夫すれば、ISO800か600くらいでいけたと思うよ。きみのカメラは優秀だから」「うーん、800か600...」

「それに、ノイズをうまく利用してもおもしろいし。そういうのは碧ちゃんが得意だよ」

「そうなんですか?」

柚希は碧のほうを振り返った。碧は、松浦の背後から、パソコンの画面を興味深そうに覗き込んでいた。

「得意つてわけじゃないけど、砂ぶっかけたみたいな質感は、わりと好きだよ」

クリアに写すことばかり考えていた柚希は、目からうるこが落ちた思いがした。

「……あ、去年の学祭の?」

「あれもノイズ入ってたけど、あれはデジカメじゃなくてフィルムなの」

「へえ、そうだったんですか」

ずっと気になっていた写真のことが訊けて、嬉しかった。不思議な質感を感じさせる写真だったのだ。フィルムという、前身的な媒体からきたものだと言われて、妙に納得できた。

碧はぼんやりと、柚希のパソコンを眺めている。

思っていたよりずっと自然に接することができている自分に、ほっとした。

昨日のメールのことを口にしようかどうか迷う。他のひとに訊かれてまずいことなどないのに、なんとなくいいにくい。

「欠点も多いけど、技術的なことはどんどんよくなるし、この調子でやっていけばいいよ」

「わかりました。ありがとございました」

「碧ちゃん、どう思う?」

「構図が新鮮でカッコイイ」

「あー、碧ちゃんもそう思う? 部長、どうですか?」

「いいね。大胆に目線の上を切ったり、画面の半分を空けたりしてる。こういう構図は習ってできるようにはならない。初心者はたいがい日の丸になるよ。碧さんのノイズもそうだけど、持って生まれだ感性だしな」

日の丸とは画面の中央に写したいものを配置する構図のことだ。褒められれば素直に嬉しかった。自分では意識していなかったので、不思議なくすぐったさがある。

「碧ちゃん、ほかに気づいたことは？」

「被写体、亜衣ちゃんが多いです」

「確かに、人物はほとんど亜衣ちゃんだな」

松浦は碧の指摘に吹き出すように笑った。「よっぽど仲いいんだな」とからかうような口調で肩を叩かれた。

「はあ」

柚希は気の抜けた返事をした。よく一緒にいることが多いので、仲は確かにいいのだろう。…というより、被写体になってくれと、頼めるほどの友人が他にいないという方が正しい。

柚希がパソコンを片付けていると、部長が「ところで……」と、椅子に腰を掛けた。

「学祭の大物だが」

「パソコンで配置を指示するのは二年の佐々木がしてくれるんだよな」

松浦の問いかけに、佐々木は頷く。

「ええ、俺、そーゆーのは好きなんでやりますけど、肝心の名画が決まないと」

「だよな。ねー部長、今日、一、二年人数揃ってるし、決めちゃわない？」

「そうだな。全員で多数決するような性質のもんでもないしな。決めよう」

柚希たち一年には、話がさっぱり見えてこない。呆然としていると、松浦が説明を始めてくれた。

「学祭には、個人の作品以外に、写真部で壁一面使って大物を展示するんだよ。部員が携帯で撮った写真千枚以上をつなぎ合わせて、一枚の名画にするっていう面倒なもんでさ」

「あ、見ました、去年。確かダビンチの『最後の晩餐』でしたよね」  
柚希は去年の学祭を思い出した。

「正解。あれは、ほんとにやばかった」

「ハンパじゃなくやばかった」

「とんでもなくやばかった」

次々に部員が同意して頷くので、相当大変だったのだということ  
は、伝わった。

「張り合わせていくうちに、写真が足りなくて、本当に間に合わないかと思っただよ。なんとかギリギリ間に合ったけど、何人かは  
大学に泊まり込んだしね」

「すごいですね」

「で、今年は三、四年が多いし、就活に入るからほぼ戦力外と思っ  
てもらわないといけないんだ。だから、早めに取りかかることにし  
たってわけ」

なるほど、と一年生はようやく事態を飲み込めた。つまり、完成  
させる名画を今日、決めてしまおう、ということなのだ。つまり、  
この作業は実質、一、二年が受け持つことになる。千枚以上となれ  
ば一人最低、百枚近く写さなければならぬ。しかも、つなぎ合わ  
せて名画にするなら、指定された色味の写真を撮らなければいけな  
いのだ。

「で、名画選びだけど、だれが見てもわかる有名な名画で思いつく  
のは？ 作者でも作品でもいいからあげてみて、一、二年」

「モナリザ」

「んー、ルノアール」

「ゴッホのひまわり」

「フェルメールってどうですか？」

「種をまく人は？」

「ドガの踊り子とか」

「ビーナス誕生、ってポツティチェリだっけ？」

顔を見合わせながら、記憶をたどって絞りだしていく。

「モナリザは一昨年やったから、アウトだな。それ以外は…ひまわりか。インパクトはあるな」

「でもあれ、ほとんど黄色だろう。黄色の写真は、数揃えんの、きついぞ」

「そうだよな。まだ茶色のほうがやりやすいよな。じゃ、種をまく人？ 落ち葉拾いとかも同じ作家だっけ？」

「人物、小さいよりは大きいほうがいいかな。去年のことと思うと」

「肖像画みたいな構図の？」

「うん、モナリザ、やり易くなかった」

「最後の晚餐よりはかなり、やり易かったよな」

一昨年のこととなると、二年生でも話に入っていけない。

そのあと、かなり長い時間、いろいろと意見を出し合って、フェルメールの青いターバンの少女で、話は落ち着いた。佐々木がこの催し物の責任者になるので、携帯で連絡を取り合うことになる。

当面は大体の色味で撮った分を、佐々木のパソコンに転送するのだ。

できるだけ人物を入れること。服装の色と背景の色をできればそろえることが、注意点だった。

第十話

部室

被写体、

亜衣ちゃんが多いです

(後書き)

第十一話 帰り道 亜衣ちゃんって、普通の親友？

「お疲れ様でした」

次々に部室からひとが消えていく。柚希も荷物を持って、扉をあ  
とにした。

「碧さん、帰るんですか？」

扉の近くに、先に出た碧の姿があった。

「うん。帰りに本屋さんに寄るけど」

「じゃ、途中まで一緒に帰りませんか？」

「いいよ」

今日の碧はポニーテールに、白いシユシユをつけている。うなじ  
の産毛が、窓から差し込む夕日にあたって茶色く透けていた。

「名画制作、大変そうですね」

「うん。なにが大変って、被写体になってくれって頼むのが大変な  
んだよ」

「あ、それは確かにそうかも」

「写真部の学祭で展示するっていうと、断る子もいるし」

「うわーヤダな……」

それは困る。ただでさえ、被写体には不自由しているのに。

「でも面白がる子もいるよ。写真っていつても一枚一枚は証明写真  
みたいに小さいでしょ。だから、どこに自分の写真があるか、探し  
て盛り上がりたりするの。名画の集客率はなかなかのもんだよ」

「同じひとを何度も使えないんですよね？」

「そう。亜衣ちゃんにばかり頼めないね」

鋭い指摘のため息が出た。

「あ、昨日はメール、ありがとございました」

「ううん。内容もないメールじゃないでしょ。友達にもよく  
いわれるんだ」

坂道を下っていく。背中から夕陽を受けて長い影ができていた。

「赤ちゃんの写真って、お母さんが一番上手に撮るんだよね。カメラの性能とか、技術とか関係ないの。いつも一緒にいて、一番かわい瞬間を知ってるからなのかな」

「へー。でも、そういうの、あるかもしれませんね」

「亜衣ちゃんを一番上手に撮るのは、瀬戸さんかも」

「は？　じゃあ、私が亜衣のお母さんですか？」

「お母さんじゃないなら、恋人？」

「お母さんも恋人もありえませんか」

「そりゃそーだよ。でも、昨日、メールもらったとき、画像に文庫本あったでしょ。奥に立ち上げたパソコン写ってて、亜衣ちゃんかなって思った。それを確かめたくて今日きたの」

あの短いレスには、そういう理由があったのかと納得した。不自然な返信だとは思っていたのだ。

「亜衣ちゃんって、普通の親友？」

「普通の親友って、なんかよくわからないけど、亜衣は普通じゃない親友かもしれないです」

「ふーん…」

夕日が急激に薄暗くなってきた。日が落ちそうになっている。暗くなり始めた光の中で、碧の横顔が沈んで見えた。表情だけではない、顔色もあまりよくない気がしてきた。

「碧さん、なんか顔色悪くないですか？」

「そう？　ちよつと貧血してるのかな。生理中だし」

「あ、すいません……」

「なにが？」

「いえ…」

変に動揺していることが不自然なのはわかっていたが、言葉がうまく繋がらない。

こんな会話は、いままで何度も経験してきたはずなのに。柚希が本当は男だと知っていても、こんな話題をしてくる友人はたくさんいて、その内容に共感はできなくても、笑って聞き流すことは難し

くなかったのに。

碧にはうまく対応できなかった。まるで、痴漢にでもなったような気になる。

「…亜衣はナイチンゲールなんですよ」

「ナイチンゲール？」

「中一するとき、私パニック障害になったんですけど、そのときずっとそばにいてくれて、立ち直れたんです。いまでも、患者扱いしてくれてるのかも」

碧の言葉の端々に、亜衣を自分の恋愛対象ではないかと疑っている気配を感じた。

同性とキスをするような人間だから、亜衣が恋人ではないかと誤解されているかも、と不安になった。けれど、碧の気持ちが自分に向いていることを期待しているから、そんなふうに考えてしまうのかもしれない。

言い訳がましく聞こえていたら、不審に思われそうで気が滅入った。

「そっか……」

その頃の話をおぼろしく訊くでもなく、慰めるでもない。碧はただ静かに呟いた。

書店が見えてきた。

「また、メールしてもいい？」

「はい。私からもさせてください」

店に入っていく碧の背中を、引き止めたくなくて困った。

第十一話

帰り道

亜衣ちゃんって、

普通の親友？

(後書き)

## 第十二話 大学 カタツムリの写真

それからしばらくは、大学とマンションを往復する日が続いた。長袖が半袖になって、湿度の高い空気は肌にまとわりつくように不快だった。空が厚い雲に覆われる季節になっていた。

会えない時間は寂しかった。

いま何をしているのだろうと、何度も思う。

キャンパスや学食に行けば、碧の姿を探してしまう。

ときどき見かけると、落ち着かない気分になる。

懇意そうに友人と話している様子に、イライラして、詮索してしまいそうになる。

会うきっかけを掴めずにいると、碧からメールが来るようになってきた。内容は以前同様、特別なものではなく、そのときのささやかな出来事や、心情を短い文章にしたものだったが、自分に向けて発信してくれたことが嬉しかった。

自分が会いたいと思っているときは、碧も同じことを考えてくれているのかと思うほど、メールの来るタイミングが重なった。都合のいい思い込みかと思っていたけど、その解釈が、それほど的外れではないと思っただのは、五、六回、メールのやり取りを繰り返した頃だった。

『前に送ってくれた添付写真の小説、読んでみたよ。難しそうないトルだったけど、読みやすかった。あの作者の本で、他に面白いのある？』

メールを読んで、一緒に帰った夕暮れの坂道を思い起こした。

あのとき碧は、途中で書店に寄った。あの小説は、そこで購入したのかもしれない。本を読んでいる間、自分に気持ちを向けてくれていたのではないだろうか。

そんな風に思えてしかたがなかった。

興味のないタイトルの、知らない作家の小説を普通、手に取らない。時間を費やして読み切ったのは、柚希の思考に近づいたためだったと考えても無理がない。

どんどん好きになっていく。どういう形にしたいかまだわからないのに、好きな気持ちだけが膨らんでいく。

会いたいとメールで伝えれば、きっと碧は会ってくれよう。けれど、なぜ会いたいかと問われれば、好きだから会いたいとはいえない立場である。

それに、もし自分が情愛を望めば、応じてしまいそうな碧の気配が怖かった。

『あの作家は、当りはずれが大きいんですよ。面白かったのを貸しましょうか？』

浮かれて書いたわりに、事務的なレスになった。

『貸して。明後日くらい、会える？ エントラスホールでもいいし、学食でもいいけど』

『じゃあ、明後日エントラスホールの南側付近で。五時くらいで大丈夫ですか？』

『うん、大丈夫。ありがとう』

最後のメールには写真が添付されていた。カタツムリの写真だった。カタツムリは葉っぱの上ではなく、レンガの上を這っていた。碧が暮らす家のレンガかと想像しただけで、ほほえましい気分になった。

第十二話

大学 カタツムリの写真（後書き）

## 第十三話

エントラスホール 副部長、ムカつく

「あれ？ 髪型、変えたんだ？」

碧に声をかけると、振り返ってすぐ、そう指摘された。

「あんまり暑苦しかったので、ちょっと切りました」

「似合ってる。前のも可愛かったけど」

腰まで伸ばし茶色く染めていた髪を、十センチほど切って黒っぽくし、顔にかかる横の髪を後ろで束ねていた。

「耳、なんにもしてないんだね」

「え？」

「ピアス。ちょっと意外。いかにもピアスしてそうなイメージだったから」

「うちの母親、無宗教なんですけど、二十歳までは神様からもらった身体だから、故意に傷を作るなって、うるさいひとなんです」

「へ〜」

「子どもの頃から、あんまり何度もくりかえし訊いたので、どうしてもピアスをする気になれなくて」

「まあでも、しなくていいんじゃない？ あたしは、痛そうだし根性なくてできないんだけど」

「それよりこれ、忘れないうちに」

柚希が紙袋を差し出した。

「三冊も入ってるよ」

碧は中身を取り出して、裏表紙を読む。

「こないだのと、だいぶ違う感じ」

先日、碧が読み終わったのは、法廷が舞台だった。絶対的に不利な裁判を、優秀な弁護士が逆転勝訴に導く話だった。今回、柚希が持ってきた本は、三冊とも法廷をテーマにしていない。

「これが、パニツク小説です。小動物が大量発生して、国家が滅亡

寸前になる話。で、これがその続編で、こっちは犯罪者の家系をたどっていく話です」

「へー、おもしろそう。でも瀬戸さん、ちょっと意外だな」  
「なにがですか？」

「あの小説を読んだとき、ああ、やっぱり法学部だからかな、って思ったんだけど、今日の本はそうじゃないし。見た目は恋愛小説とか読みそうなのに」

「恋愛小説はほとんど読まないんです。なかなか共感できなくて」  
「ふーん、あ、でも、三冊もいっぺんに借りたら、返すの遅くなっちゃうね。どうしよう」

「読み終わった本だし、いつでもいいですよ」

「夏休みまでに読み終わるかな」

「試験もあるし、急がないでください。冬になっても構わないですから」

「いくらなんでも、そこまで遅くはならないはずだけど……」

碧は少し考え込むように視線をさまよわせた。

「ね、夏休みに時間あったら、会ってくれる？ そのとき、返すから」  
「ら」

「……はい」

一瞬、返答に躊躇ったのは、理由がなければ会えないのだと、改めて気づいたからだ。

「困る？」

「いえ、べつに……」

「あ、夏休み、バイトとかで忙しい？」

「バイトは入れますけど、そんなに忙しくはしませんから」

「じゃあ、大丈夫だね。メールで連絡するから」

柚希は頷いた。

「あれ？ 碧ちゃんと柚希ちゃん？」

背中から声をかけられて振り返った。

「副部长、今日は就活じゃないんですか？」

碧に尋ねられて、松浦は苦笑した。

「今日はゼミだよ。それより、きみら、名画やってる？ 佐々木が、みんなあんまり送ってこないってばやいてたよ」

柚希と碧は顔を見合わせた。

「まだ、余裕あるし、もうちょっとしたら気合入れます」

「早めに決めても、結局こうなるんだよな。柚希ちゃんは？」

「まだ、三枚だけです。あれ、二千枚くらい必要かもって訊いたんですけど、本当ですか？」

「本当らしい。佐々木がああいうの得意なだけだし、完成度上げるために、枚数増やしたいらしいんだよ。顔の表情とかだいぶ変わるらしいし。」

「ぎこちなくてもいいと思うけどな、あたしは。曲線がなめらかじゃなくても、いい味出るじゃん」

松浦は、こらこら面倒くさいだけだろうと、碧の頭を掴んで揺さぶった。

「でも、枚数増えるのはちょっと不安ですよ。そんなにモデル頼める人もいないし」

柚希は肩を落として溜め息をついた。

「ま、頑張つて。俺ら三年はまだ就活もたいしたことしないし、目途がついたら合流するから」

大学に入って間もない柚希には、就活の大変さはよくわからない。就職超氷河期、とニュースで見えるけど、実際にはそれほど問題なく決めているひとも多いと訊く。

「あ、そうだ。いい忘れてた。柚希ちゃん」

「はい？」

「つきあってくれない？」

「……は？」

流れもムードもない告白に、訊き間違えたかと思った。告白ではなく、部室かどこかへ同行しろと頼まれたのだろうか。冒頭部分を聞き逃したのだろうか。

「副部長、ム力つく」

碧が無然と松浦を睨みつけた。

「なんで碧ちゃんがム力つくかな。関係ないでしょ」

「関係ないなら、二人だけのときに告ってくださいよ」

「いや、柚希ちゃんガード固そうだし、せっかく会ったから」

「瀬戸さんは理想が高いから無理だつて、亜衣ちゃんがいつてたじやないですか。副部長、ハードル超えてる自覚でもあるんですか？」

憤然と喰つてかかる碧に、松浦は苦笑した。

「うん、それなんだけどね……」

松浦は、柚希の腕を引き寄せて、唇を耳に近づけた。

「柚希ちゃん、俺はきみが何者でも大丈夫だから、その気になったら、連絡してくれる？」

松浦は耳元でささやいた。

「……………知ってたんですか？」

目を見開いて、松浦の顔を覗き込む。何者といわれれば、柚希が男だということ以外、身に覚えがない。

「うん。あ、発信源は亜衣ちゃんじゃないよ。うちのゼミに、きみと同じ高校出身の奴がいて、そこからだから」

柚希は天を仰いだ。大学に来たときに、その可能性をまったく予想していなかったわけではなかったが、碧のことに気持ちが向かっていたので、完全に失念していた。

碧が背中を向けて歩き出していた。

「碧さん」

「先に帰る。邪魔でしょ」

「待ってください。一緒に帰りますから。松浦さん、とにかくつきあえませんか」

「もうちよつとゆつくり、考えない？」

「嫌です。じゃ、失礼します」

柚希は急いで碧の背中を追いかけた。



## 第十四話

### 帰り道 好きなひとには好かれたいよ

「碧さん、怒ってます?」

「瀬戸さんには怒ってない」

ならば、松浦には怒っているのだ。

顔をしかめてどんどん歩いていく碧に、柚希は引つかかるものを感じた。いままで、碧が自分に向けてくれていた気持ち、勝手に好意と思いついてきたが、いまの碧の態度に疑念が沸き起こる。

好意の先にいるのは、松浦ではないだろうか。

もしそうなら、いままでの碧の言動はどういう解釈になるのだろう。恋敵を知りたくて探りを入れていた……と解釈しても不自然ではない気がする。いま思えば、最初に部室で会った日、碧はそれらしいことをいっていた。確か、『口説く突破口を探ってるんじゃないですか?』だった。あのときから、碧はこうなることを予感していたとしたら、符号が合う。

なんだか一気に落ち込みそうだ。

「あの、松浦さん、あんなこといってましたけど、なにか違うと思いますよ」

自分でいって、さらに気分が沈んだ。松浦と碧がまとまるようなことにもなれば、こんな落ち込みでは収まらないのに。

けれど、松浦の唐突な告白はやはり解せない。

なにか他に目的があるのか、自分に興味があるとしても、生の二ユーハーフが珍しいとか、そんな理由に違いない。

「碧さん、もしかして、松浦さんのこと、好きだったりします?」

碧は立ち止まって振り返った。キャンパスを歩く学生は、少なくなってきた。

「そんな風に見える?」

「さあ……?」

「副部長って、一見、親切そうだし温厚な感じじゃない。でもどっか浮世離れしてるっていうか、飄々としてなに考えてるかわかんないところあると思わない？」

「はあ」

質問に答えてもらってないけど、しつこく追及するのも躊躇われて押し黙る。

「男は単純なひとがいいよね」

単純なひとがいい。松浦はなにを考えているかわからない。ならば碧は、松浦を好きではないのだろうか。単純なひとがいい、とは、単純なひとが好き、とは違うのか判断が難しい。

「最近、女に生まれてきたことが残念だっと思ってる」

紙袋を握りしめて、碧は柚希と視線を合わせた。

「好きなひとには好かれないよ。でも努力してもどうにもできないことは、諦めなきゃいけないの？」

まるで、自分の心の中を指摘されたように思えて、胸を絞られた。碧の言葉はときどき難しくなる。いろんな言葉が抜け落ちているからだ。言葉が足りないのは、興奮しているか、混乱しているせいだ。そしてそんなときは柚希も動揺しているから、余計に会話が交わらない。

「わからないけど、そうかもしれません……」

柚希の気持ちがあ先に進めないのは、最終的に諦めるしかないからだ。認めるのが怖くて、考えないようにしてきた。

「瀬戸さんだったら、どんな希望も叶えられそうだね。あたしみたいに、諦めることなんて、なにもないんだろっな」

「そんなこと、ないです……」

柚希の声は、消え入りそうにかすれた。

第十四話

帰り道

好きなひとには好かれないよ(後書き)

## 第十五話

### ファミレス 気持ちの種類に決着ついた？

ファミレスのドリンクバーで、おなががいっぱいになってきた。時計を見るとそろそろ五時だ。

七月末の試験が近づいてきた。柚希は亜衣と二人で必修科目の追い込みをしていた。図学、ドイツ語が最大の難関だった。ノートを広げて、わからないところを教え合う。完璧ではないだろうが、だいたい問題ない状態まで持ってこられた。

「あたしさ、ちょっとうらやましがられてるんだ」

何杯目かのエスプレッソを飲みながら、亜衣は含みのある笑みを見せた。

「なにを？」

「柚希と勉強してるのを」

「べつに、図学もドイツ語も、得意じゃないけど？」

「あんた、文学部だけでも結構、話題になってるよ。タイソー美しい花のカンバセで」

花の顔かんばせとはずいぶん古典的な表現だ。さすがに文学部だなど、妙なところで感心してしまう。

「そう？ 目立ってたら嫌だなー」

「目立ってるって。心配しなくても」

「え、だからかな」

「なにが？」

「松浦さんにはれちゃった」

「……………男だって？」

しばらく沈黙してから、亜衣は唾液を嚥下して尋ねた。

「うん」

「なんでばれたの？ 松浦さんって、写真部の副部長さんの方だよね。碧先輩じゃなくて」

「うん。ゼミに私たちの高校出身のひとがいるって」

「ああ、二年上のひとにいたかもしんない。それでなんかいわれた？」

「つきあってくれていわれた」

「げ。秘密を守りたければ、つきあえて？」

「ううん。そんな感じでもなかったけど、ちゃんと話しないで帰ったし、どういふつもりかはわからなかった」

頼杖について考え込む亜衣に、柚希は言葉を続ける。

「大学にはちゃんと受験の時に申告してるし、べつに問題ないよ」

「でも、学部の友達にも写真部にもいつてないんでしょ。だいたい、なんでいわないの？ 高校のときも中学のときもみんな知ってたのに」

「あれは、自分でいったんじゃないかって、親が学校に事情を話して、学校側が保護者に『性同一性障害の生徒がいます。本校では一般の女子生徒と同様に扱いますが、トイレは職員用を使用させ、体育の着替えの際は保健室を利用します。生徒の皆さんにも理解とご協力を、お願いします』とかなんとか説明があっただよ」

「あ、そっか。大学ではカミングアウトも隠すのも個人の判断で、つてわけか」

「みたい。でも、いま思うと、よくいじめられなかったな、って思うよ。中学でも、高校でも。亜衣が庇ってくれてたんだよね」

「そうでもない。柚希はどう見ても女にしか見えなかったし、可愛かったから、みんな普通に友達になりたがってた。男の子がちょっと残ってるのも、ある意味、魅力的だったし」

「ふーん、わかんないな……。私が女だったら、そういう人種は気持ち悪いと思うか、遠ざけるけどな」

柚希は首を傾げた。

「いまどきの若者は、個性を尊重できるんだよ。柚希、古すぎる。昭和初期から生きてるんじゃないの？」

「あのねえ……」

ひどい言い草である。

「それより、松浦さん、どうすんの？」

「近いうちに、連絡取ってみる。どう考えても不自然だったし、なんか他に理由がある気がする」

「本気だったら、どうすんのよ？」

「ないって、絶対」

「根拠もないくせに、なんでそういう切れるわけ？」

「自分に対する熱い視線くらい感じ取れるよ。鈍感じゃないし。松浦さんはそんなんじゃない」

「ふーん。そんなもんかな。でも柚希って、鈍感なところもあるけどな」

鈍感と批評されて、柚希は口を噤んだ。いままでなら即座に否定できたはずなのに、否定しきれない事実に向面しているからだ。

碧に関しては、鈍感かもしれないと、最近感じ始めている。鈍感というより、理解しきれなくて、モヤモヤしている。

最後に会ったときの、言葉の意味を考える。

『努力してもどうにもできないことは、諦めなきゃいけないの？』

努力してもどうにもできないことは、セックス依存症のことだろうか。それとも不感症のことだろうか。どっちにしても、性欲自体がない柚希には、近づくことさえできない領域の問題だ。

頭が痛い。

慰める方法もすべも持たないのに、戸籍だけが男だなんて、情けない。女同士として悩みを訊いてあげることもしかないのだから、情けないどころじゃなかった。

それに、松浦が柚希の正体に行き着いたということは、碧の耳にも遠からず情報が届くだろう。

こんなことなら最初に、妊婦になったらヌード写真を撮らせくれ、といわれたとき、オカマだから無理だと告げておけばよかった。

「碧先輩と会うことある？」

「うん。たまに」

「気持ちの種類に決着ついた？」

「ついたよ。碧さんのこと、好きだよ」

亜衣がエスプレッソを吹き出しそうになった。ハンカチで口元をおさえながら、咳き込んでいる。

「驚いた？」

「普通、驚くよ。あー、でも、まあいいや。なんか、うん、ほっとした」

息が落ち着いてきた亜衣は、あっさりと微笑んだ。なんとも度量の広い友人だ。

「よかつたね、柚希」

恋を知ることができて。そう続けた言葉は優しく、やわらかだ。

「でもなんか、にわかにはややこしくなってきたね。どっちの松浦さんとくっついてても同性愛っぽいんだけど、碧先輩の方がより同性愛っぽいのが面白いな」

すっかり冷静さを取り戻した亜衣は、笑いながら、とんでもないことをいつてのけた。

度量の広さにも程がある。

第十五話

ファミレス

気持ちの種類に決着ついた？

(後書き)

## 第十六話 通学 汚れたガラスの向こう側

『誕生日、おめでとう』

試験二日目の朝、携帯には母親からメールが入っていた。仕事が忙しく、子どもの頃から、充分に構ってもらったことがないが、誕生日だけは、多少、母親らしい気づかいをしてくれる。

試験勉強で寝不足の目を擦りながら、洗面所に向かう。顔を洗っているときに、メールの着信音がした。

身支度を済ませて携帯を開くと、また母からだった。

『八月になったら、夏休みでしょ。ケンゴくんに連絡してあげて。人手が足りないから、柚希にバイトして欲しいみたい』

ケンゴとは母の仕事繋がりひとりで、カフェバーを経営している。年齢は三十半ばを少し過ぎたあたりで独身だ。いや、この先もたぶん独身のままだろう。彼はゲイなのだ。

ケンゴの店はゲイバーではないが、彼の友人知人が集まることも多いので、いきおいゲイが多く集まってくる。

母親を通じて知り合ったが、去年までは柚希も高校生だったため、バイトの誘いはなかった。だが、大学生になったら休みの間だけでいいから、手伝ってね、といわれ続けていた。彼はそれを律儀に実行しようとしているのだ。

柚希は鞆を肩にかけ、足早に駅へ向かった。

大学までは電車で二駅だ。駅の喧騒を通り抜け、電車に乗り込んだ。電車の窓から流れる景色をぼんやり眺める。

昨夜の雨のせいかな、ガラスが汚れていた。

線路沿いの道路をバイクが走っていた。電車の加速について行けずに、遠ざかっていく。夏休みに車の免許を取って、バイク通学にしようかと考える。通学時間がかかり短縮するだろう。

けれど、戸籍が女になってからの方がいいかもしれない。変更の

手続きが大変そうだ。

電車がトンネルに入り、窓ガラスには車内の様子が反射された。すぐにトンネルは通りぬけたが、柚希の目にはもう、外の景色よりもガラスに映った車内ばかりが見えていた。

意識を戻せば、景色が見える。けれど、ガラスは向こうとこっちを仕切っていて、どちらを見ることもできる。汚れているのは外側のガラスだけで、暑さに晒されているのもやはり、外側のガラスだけなのだ。

碧の写真を思い出した。

『汚れたガラスの向こう側』

碧の表現したかった世界の一部分が、少しだけ感じられた気がした。もう一度、あの写真を見たくなった。

第十六話

通学

汚れたガラスの向こう側（後書き）

## 第十七話

バイト いい傾向じゃないか。なんかあったの？

夏休みに入り、ケンゴに連絡をすると、週末が忙しいから手伝ってほしい、と頼まれた。

金曜日から日曜日まで店に入ることにした。仕事の内容は裏方中心でいいとのことで、柚希は安堵した。接客は自信がなかった。

夕方四時から十時までの約束だったが、店が忙しいときは終電ギリギリまで手伝うこともあるし、客が少ないときは九時頃に帰ることもあった。

「ユズ、仕事慣れた？」

ケンゴは初めて会ったときから、柚希をそう呼ぶ。

「だいぶ」

「ちょっと、接客も頼んでいいかな？ 酒とか料理を運んでくれればいいだけだから」

この店は一人で来る客も多い。店で気の合う相手を見つげる目的のひとつもあれば、ケンゴや店員と話がしたくて来るひともある。だが、そうした客はカウンターに座るので、テーブル席に料理を運ぶ分は、たぶん問題はない。

「わかりました」

「悪いね」

頷くとケンゴは柚希を矯めつ眇めつ見つめていた。怪訝そうに首をかしげると、ケンゴは不躰な視線を詫びた。

「ごめん、ごめん。いや、久しぶりに会ったらいい女になったなあ、って感心してるんだ。恵美さんによく似てるよ」

恵美さんとは柚希の母親のことだ。

「なにいつてるんですか。女の子を好きでもないくせに」

「だから、来年までに会いたかったんだよ。男の子のうちにね」

高校の頃、自分のことで混乱すると、よくケンゴに悩みをぶつけ

た。ケンゴは、性転換手術には一貫して反対だった。手術を決意したあとは、疎遠になっていた。けれどケンゴは、ずっと気にかけてくれていたのだろう。今回のことも、バイトを口実に自分の元に通わせて、思いとどまらせようと考えているようだ。

「決意は変わらない？」

「そうですね。手術は受けたいです。でも最近、少しだけ迷ってます」

「へえ、いい傾向じゃないか。なんかあったの？」

「あるひとに、感情を揺さぶられてるんです」

「亜衣ちゃん以外に、そんなひとが現れたのか。すごいね。いい男？」

「ノーコメント」

柚希は愉しそうに笑ってごまかした。ケンゴに相手は女だと告げれば、腰を抜かすだろうか。それとも祝福してくれるだろうか。いずれ、なんらかの決着がつけば、ケンゴにも報告するつもりだったが、いまはまだ、状況を説明することができない。

時間が遅くなってくると、ゲイの客が増えてくる。不思議と、見ただけでわかるものだ。男同士の友人とカップルは、空気がまるで違う。特にべたべたしているわけでも、指を絡ませているでもないけれど、ただ、静かにビールを飲んで話をしているだけで、見つめ合う視線は甘く、真摯だ。

以前柚希は、自分もいつかゲイのカップルになるのだろうかと思っていた。

この店の客だった男と、亜衣としたような交歓に近い行為をしたことがある。結果は、自分が性的に欠陥のある人間なんだと思い知っただけだった。なにをされても反応できなかった。全身に鳥肌が立ち、顔が青ざめた。気が削げた相手には申し訳なかったが、途中で止めてくれてありがたかった。

店が落ち着いた時間になったので、柚希はエプロンを外し、カウンターの際で夕食をよばれた。

この店の食事を作る店員は腕がいい。毎回違うワンプレートの食事を出してくれるが、いつも可愛くておいしかった。今日はオムライスとサラダ、それに生春巻きが綺麗に盛り付けられている。

「今日も可愛いですね。食べるのがもったいないな」

「ユズちゃんにそういつてもらえると、嬉しいよ」

料理担当の店員は、相好を崩した。

「あ、そうだ。この料理、写真に撮ってもいいですか？」

「いいよ。そういえば、写真部だったけ？」

「ええ、そうなんですけど、写真部とは関係なくて、先輩に写メー  
ルしたいんです」

柚希はポケットから携帯を取り出して、写真を撮った。料理の背景にリキュールの瓶がいくつも写っていて、なかなかいい雰囲気だ。  
『先週から、週末だけカフェバーでバイトを始めました。いまから、  
夕食です』

書きたいことはいろいろあるのに、メールはいつも簡単な近況報告になる。返事を期待しない疑問符もつかないメールを送ることがほとんどだった。

しばらくすると、マナーモードにしていた携帯が振動した。

『おいしそうだね。そのお店、ちよつと行ってみたいな』

返信の必要がない内容のメールでも、碧は律儀にレスをくれた。

それは、柚希も同じだったが。

『カフェバーなんですけど、遅い時間になるとゲイのお客さんが多  
くなって、女性客が少ないんです。来るなら早い時間がいいですよ』

『今度、友達と行くから教えて』

店の名前と住所を書いて送信すると、短い礼の返信が来た。

久しぶりに碧とメールのやり取りができて嬉しかった。

バイトが終わり、上機嫌で帰路を歩いていると、着信音が鳴った。  
発信者も確認せずに、携帯に耳を押し当てた。

『柚希ちゃん、遅くにごめんね』

松浦だった。何度か着信履歴に名前が残っていたのに、放ってお

いたので、柚希に非がある。

「いえ、こちらこそすいません。何度も電話していただいていたのに」

『一度、ゆっくり会いたいんだけど、明日か明後日、会えない？』

「……わかりました。明後日でいいですか？」

承諾の返事とともに、駅と時間を指定された。

携帯を閉じて、鞆に収めた。マンションのエレベーターを待つ間、

柚希は松浦のことを考えた。

悪いひとではない。好きか嫌いかでいうと、好きだった。けれど、それ以上の気持ちはない。

碧は松浦のことを好きなのだろうか。それとも別のひとを好きなのだろうか。

「サッカー部の彼氏と別れて、だいぶ経つんだよね」

あれから、碧がだれかときあっている話は訊かない。セックス依存症だと自分でいっていた。ひとりである時間は、どれくらいが限界なのだろう。

声が訊きたくて携帯を見つめた。けれど、アドレスのボタンを押すことはできなかった。

第十七話

バイト

いい傾向じゃないか。

なんかあったの？

(後書き)

第十八話 待ち合わせ 松浦さんって、ホモなんですか？

待ち合わせの場所に、松浦はすでに来ていた。

「こんにちは……………」

硬い表情で頭を下げる柚希に、松浦は吹き出した。

「そんなに警戒しないでほしいな。俺のこと、信用できない？」

「松浦さんのことは信用してます」

「じゃあ、なんでそんな顔してんの？俺が男だから？」

訊かれて柚希は、はっとした。

確かにそうかもしれない。松浦がおかしな告白をしてこなければ、信用していたし、緊張することもなかった。男女の関係を意識しなければ、いまでも松浦のことは信用できる。男の立場をおわす態度に、柚希は不快感を覚えているのだ。

「そんなに男嫌いになった原因は、なんなの？父親による家庭内暴力とか？」

「私は私生児なんで、父親を知らないんです」

「……………」

「自分の存在を知りもしないひとを、許せないのかな」

こんなことを考えたのは、初めてだった。柚希は自分が男嫌いだと思っただけでもなかった。

けれど、否定する気になれなかった。長い間迷っていた迷路で、出口が見つかったような気分だった。

子どもができるようなことをしておいて、赤の他人でいる男の無責任さが許せない。そのひとと同じ男だから、自分のことも好きになれない。正しい答えに行き着いた気がした。

「カラオケ行かない？」

「なんで、カラオケなんですか？」

「ちよっと込み入った話が見たいし、喫茶店よりマシかなって思っ

て

「……わかりました。行きましょう」

松浦は告白の話をするつもりなのだ。柚希もそのつもりで来た。人目のないところに行こうとしているのは、柚希の性別にかかわる話もあるから、その配慮だろう。

「松浦さん、一つ訊きたいことがあるんですけど」

「なに？」

「松浦さんって、ホモなんですか？」

率直すぎる質問に、松浦は一瞬驚いて固まったかと思うと、笑い転げた。

「いや、普通だよ。なんていうのかな。ストレート？ ノンケ？」

まだおかしさが止まらないのか、クスクス肩を震わせながら逆に質問してくる。

「俺がホモかと訊くってことは、柚希ちゃんは現在、性別は男なわけ？」

「役にも立たないものが、まだ、ぶら下がってますよ」

今度こそ本当に窒息しそうな勢いで、松浦は笑った。なにがそんなにおもしろいのか、柚希は不思議だった。質問に答えただけなのに。

「柚希ちゃん、きみさ、自分で思ってるよりずっと男らしいよ」

柚希は心底嫌そうな顔で眉根を寄せた。

第十八話

待ち合わせ

松浦さんって、

ホモなんですか？

(後書き)

## 第十九話

### カラオケ店 写真のモデルですか？

「ビール？」

「酎ハイにしてください」

カラオケの個室に注文の品物が運ばれると、形ばかりの乾杯をした。

「せっかくだから、なんか歌う？」

のらりくらりと話を後回しにされているみたいで、腹が立ってきた。リモコンを奪いとって、何度か歌ったことがある曲を入れる。

歌い終わってマイクを置くと、勢いよくソファーに腰を落とした。これで文句はないだろうと鼻息も荒く松浦を睨むと、松浦は呆然としていた。

「驚いたな。歌声も女の子なんだ。どうやったらそんな声が男で出せるんだ」

「そんなこと、知りませんよ」

むっとした顔を隠さずに、酎ハイを飲んだ。いつたい、いつになつたら本題に入るのだろうとイライラした。自分から切り出すのも癪なので、仕方なくジョッキを傾け続けた。

テーブルの上にジョッキが並んでいる。店員が持つていった分もあるんで、結構飲んでいる。頭がグルグルする。

要求されるまま歌って飲んでいるうちに、喉が痛くなってきた。

「松浦さん、いったいどういっつもりなんですか？」

「なにが？」

「いきなりその気もないのに、告白みたいなことして、いい迷惑ですよ」

だんだん気が大きくなってきた。酔ってるかな、と少し自覚したが、言葉はむしろ滑らかに出てくる。

「碧さんだつて変に思ってるし、どうしてくれるんですか？」

「はいはい、悪かったって」

「適当に頷かれて、なおさら腹が立つ。」

「ホモでもないのに、なんで男だつて知つてて告るんです？ なにをたくらんでるんですか？ 白状しなさい」

「酔つてくるせに妙に確信ついてくるね。まあいいけど。実は頼みたいことがあるんだ」

「頼み？ なんですか。一応訊いてあげます。仕方ないから」

「柚希はだんだん眠くなってきた。それでもまだ、会話は頭に入ってきている。ウーロン茶を飲んで、眠気を覚まそうと試みる。」

「被写体になつてほしい」

「写真のモデルですか？ 嫌です。お断りします」

「そういうと思つてたけど、引き受けてよ」

「なんで私なんですか。変ですよ。ちゃんとした女の子がいくらでもいるのに」

「実は、最初は女の子だと思つてたから、そんなに写したいとは思つてなかつたんだ。軽い気持ちでモデルを頼もうかなと思つてただけど、同じゼミの、きみらの同じ高校の出身の奴がさ、俺が柚希ちゃんに恋愛感情持つてるつて勘違いしたんだよ。瀬戸柚希は諦めるつてあんまり必死になるから、わけを訊きだしたら、きみが男だつて白状してさ」

「どうせ誤解されているのを、面白がつて放置していたのだろう。」

「松浦はビールのジョッキを傾けた。このひともかなり飲んでいて、顔は赤くなっているのに、言動は冷静だ。アルコールに強い体質のようだ。」

「絶対、撮りたいつて思つた。時間もなさそうだし」

「時間？」

「ウィーン少年合唱団つて知ってる？」

「知ってますよ。変声期前の男の子の合唱団でしょ」

「それが、柚希のモデルとどう繋がるのか、さっぱり理解できない。」

時間ってなんの時間なんだろう。酔ってるからわからないのだろうか。

「合唱団の子どもは、声変わりすると退団しなきゃいけないんだよ。当然だけど。でも、声変わりする直前が、一番綺麗な声なんだって」「へへ、初めて訊きました」

「柚希ちゃんがいままさに、その一番綺麗なときだと確信したんだ」「十九ですよ。声変わりなんて、過ぎてますって。あんまりわからなかったけど、たぶん。だいたい、声なんか写真には関係ないじゃないですか」

「だから、それはたとえだよ」

「ますます、わからない。頭が回らなくて、ぼうつとする。考えるのが面倒くさくなってきた。眠くなって目を閉じかけた。」

「碧ちゃんの好きなもの、知ってる?」

急に碧の名前が出てきて、気持ちが引き戻された。

「妊婦さんと双子?」

「そう、妊婦と一卵性双生児。碧ちゃんって、『二個一』が好きなんだよね」

「二個一? 二人で一人みたいなの?」

「うん。梅雨の季節はかたつむりをよく撮ってるし、キメラの本もよく読んでたな」

「かたつむり? キメラ?」

「かたつむりって、雌雄同体だろ? キメラは二卵性双生児が妊娠初期に片方が吸収されて二種類の細胞を持つてるひとのこと、だっただかな。両性具有者もキメラだっけ?」

なるほど、と柚希は素直に感心した。キメラの話は初耳だったが、カタツムリの写真はメールで送ってもらったことがある。二個一が好きなのだとは、気が付かなかった。

「俺の知る限り、碧ちゃんはまだ、きみの正体に行き着いてない。知りたくない?」

「なにをですか?」

「碧ちゃんがきみを気にしてる理由。二個一的なものを感じ取って惹かれているのか、それとも他に理由があるのか」

松浦という男は、つくづく頭のいい男のようだ。柚希は大きく息を吐いた。自分の性別と碧に対する感情を知っている相手だとわかり、気が楽になった。

「松浦さんは、碧さんが私を意識してるように見えるんですか？」

「そうだね。ほら、部室できみの写真を見たことがあっただろ。亜衣ちゃんばかり写してた、あれ。あのとき、碧ちゃん、妙に複雑な顔してたんだよ。あの子は素直で単純だから、あんな表情することないんだよね。なんでかなくて不思議だった」

隣の個室からは賑やかな歌声と歓声が聞こえてくる。柚希はウーロン茶の中の氷をストローでつついた。

「エントラスホールできみ達を見たとき、もしかして、好き合ってるのかなって感じたけど、全然自信はなかった。だから、わざとあんな言い方をして引っ掻いてみたんだ。どっちかが反応するかと思っただけ」

「私はあのとき、碧さんは松浦さんのことを好きなんじゃないかと思いましたよ」

「俺のこと、ムカつくっていつてただろ。碧ちゃんは正直だから、本当に言葉のままだよ。俺が柚希ちゃんに告ったことに腹を立てただけだ」

「碧さんは普通に彼氏がいたりするじゃないですか」

「最近はいないだろ？ あの子あれで結構モテるから、こんなに長い間おひとり様でいるのも、珍しいよ」

「私：碧さんに、同性愛者の汚名を着せたくないんです。せつかく普通の恋愛ができるのに、逆走するような人生、選ぶ必要なんかないじゃないですか」

泣きたくなってきた。酔ってるからだと思いたい。感情がうまく抑えられない。汗をかいたグラスで、手が濡れていた。濡れているのは手のひらなのに、手の甲に水雫が落ちる。

「そんな後ろ向きに考えなくてもいいんじゃないの？ 世の中、いるんなひとがいるし。死んじゃったひとを忘れられないとか、不倫に比べたら、よっぽど恵まれてるよ。見た目はともかく、きみと碧ちゃんは一応仮にも若い男女なんだから」

「来年、手術して、戸籍も変えるつもりなんです」

「決断したなら、それは正しいと思う。でも迷いがあるなら、ほかに正しい正解があるかもしれないよ」

松浦は柚希の肩に手をかけ、慰めるように髪を撫でた。親切にされるのと余計に悲しみが込み上げた。

「……モデル、してもいいですよ」

「本当？」

「ええ。その代わりに、教えて欲しいことがあるんです」

「なんでも訊いてくれていいよ」

「碧さんが去年学祭で展示した写真、汚れたガラスの向こう側、あれって、どんな設定で撮った写真か、知りたいんです」

「碧ちゃんに訊いてみなかった？」

松浦は不思議そうに首を捻った。

「訊いたんですけど、フィルムだからわからないって」

「え…… あー、わかった。そうか。いいよ、今度会ったときにそのカメラを貸してあげるよ」

「カメラ？ なんでカメラなんですか？」

「あれ、トイカメラで撮った写真なんだよ。だから、シャッターズピードとか露出とか触れないんだ。どんなデキになるか、出たところ勝負だな」

「そうだったんですか」

トイカメラ。日本語でいう玩具のカメラ。

なんだか碧らしい。とりとめのない、ふわふわした写真だったんだなと、改めて思った。

写真は一瞬で、見えるものをありのまま写す。けれど、碧の持つ感性はやわらかく不安定で、そのファインダーを通すと独特の世界

観が表現される。

柚希はその世界を知りたいと思ってきたけれど、そこはガラスで仕切られた向こう側の空間のように、見えても行き着けない場所かもしれない。

「松浦さん、ついでにもう一つ教えてください」

松浦はポツキーをかじりながら頷き、話の先を促した。

「男の立場から、突っ込むだけがエロじゃない、ってあり得ます？  
かじりかけのポツキーが、床に落ちた。」

「柚希ちゃん、そういうことを、その綺麗な顔で……、まあ、いいか。うーん、突っ込まずにエロが可能かといわれれば、可能だろうな。ただ、俺はそれほどのテクニクがないから、自信がないけど」  
頭をぐしゃぐしゃ掻きながら、松浦は答えた。

「なんか、いまいち参考にならない。松浦さん、頼りない」

眠たそうな声で不満をぶつけてくる柚希に、松浦はがっくりと肩を落とした。

第十九話

カラオケ店 写真のモデルですか？

(後書き)

## 第二十話

### 柚希の部屋 マイマイの靴下

二日酔いというものを、柚希は生まれて初めて経験した。頭が痛い。

ベッドから起き上がる気がしない。今日がバイトの休みの日であった。

柚希の母親はアルコールに強い。水商売をしているのだから当たり前かもしれないが、多少、機嫌がよくなる程度でザルだった。どうやらその血は、遺伝しなかったらしい。

午前中はだらだらとベッドで過ごし、午後になってようやく頭痛が治まった。

シャワーを浴びると、すっきりした気分が戻った。濡れた髪をタオルでたたく。

昨日、松浦と会って話をした。二日酔いにはなったが、話したことは覚えている。

松浦が柚希に、好意を抱いていたわけではないこと、写真のモデルをして欲しいと頼まれたこと。ちゃんと覚えている。

被写体になることを承諾したのは、適当にその場の空気を切りたかったからだ。あのまま碧のことをしゃべっていたら、泣き出してしまいそうだった。

「好きなひとには好かれたい、か……」

なんて率直な欲求だろう。いま、本当にこの言葉を紡ぎたいのは、柚希の方だ。

いつそ、後先考えずに、手を伸ばしたらどんなに楽になるだろう。手術で女になりたいわけではない。男でいたくないのだ。

だから柚希は、完全な性転換手術をする予定はなかった。胸にシリコンを入れるつもりも、女性器を作りたいとも、思っていなかった。

長年蓄積された、性別に対する嫌悪感は、そう簡単に払拭できない。

けれど碧の存在が、柚希を迷わせている。

男のままであれば、結婚できる可能性があるから、などという馬鹿馬鹿しい理由ではない。もしそんなことをいえば、地球の裏側に住んでいる老人にだって、可能性があるのだから。

碧に好意を寄せられている可能性があるなら、いまの自分を変えてしまつて、その好意を失うことが怖いのだ。松浦がいった、碧は二個一に惹かれるのだということも、迷う要因になっている。自分が男でも女でもなく、そしてどちらの要素も併せ持っているなら、それが碧に好意を向けられる理由なら、手放したくなかった。どんなものにも、すがりつきたかった。

そして、碧に意識されているなら、自分の存在を少しは愛しく思うことができそうだった。

松浦のモデルを引き受けたのは勢いだったけど、彼のレンズを通した自分が、どんな姿をしているのか興味もあった。松浦は柚希を、女として撮るのだろうか。男として撮るのだろうか。

簡単な昼食をとつて、パソコンを立ち上げた。

亜衣が春からブログを始めていた。一度見ただけだったので、コメントを残そうと思いついたのだ。

お気に入り登録しておいたので、すぐに開くことができた。

「前も思つたけど、『あいあいのあいある日常』って、ブログのタイトルとしてどうなんだろ？」

ブログには、夏休みを利用して、車の免許を取りに行つてること、実家からそうめんをひと箱もらつて、アレンジしながら食べていることが書かれていた。自己紹介の欄に、柚希が写した亜衣の写真が掲載されている。

以前、ブログで使いたいからデータを貸してほしいといわれたことがあった。キャンパスで撮った写真のデータをコピーして渡したことがある。その中の一枚を使っているのだが、舌を出してる変な

顔なのだ。

「なんで、よりよってこれ？ センス疑うなあ」

まあいいけど、と最新の記事にコメントを残すべく、マウスをクリックした。

『あいあいさん、こちらでは、はじめまして。住所も近いし携帯もメールもできるのに、ブログにコメント入れるって、変な感じですよ。車の免許、頑張ってください。ドンくさいところがあるので、脱輪とかしそうですね。昨日、写真部の先輩とふたりでカラオケに行きました。歌いすぎと飲みすぎで喉が痛いです。またお邪魔しに来ます』

ハンドルネームをどうしようか迷ったが、結局思いつかなかったので『ユズ』にした。

ブログのコメントとして変かもしれないが、送信してしまっただし、まずければ亜衣が削除するだろう。

スクロールして過去の記事を眺めていく。結構多くのコメントが載っている。読んでみるとM大生も多く書いていた。連絡を取るのにも使っているようだ。

「人気あるなあ、亜衣。だれとでも仲良くなれるから」

コメントのハンドルネームの一つに、目が留まった。

マイマイの靴下。

「マイマイ……。カタツムリって、なんとかマイマイっていうよね」  
カタツムリの靴下？ なんとなく、このセンスが碧を連想させた。

コメントを読んでみる。

『昨日は一緒に飲めて、愉しかった。ありがと。飲むと歴女になってごめーん。写真部の名画、今年もあります。これ読んでる文学部のみなさん、九月以降でいいのでご協力、おねがいしまーす』

やっぱり、碧が書いたコメントだ。思いがけず碧の痕跡を見つけて、嬉しいような腹立たしいような気持ちになった。

碧と亜衣は文学部の先輩後輩なのだから、親しいのはわかるけど、なんとなく面白くない。しょっちゅう飲みに行ってるらしいことも、

なにか引つかかる。けれどそれは、子どもじみた焼きもちだ。

学部の先輩とは、選択授業や三年から入るゼミのことで、教えてもらうことが多い。柚希にしても、法学部の先輩とは交流があるのだから、碧と亜衣が懇意なのは当然である。

「亜衣にまで焼きもち妬いて、どうすんのよ」

自嘲気味に呟いて、柚希はパソコンを閉じた。

まだ、知らない碧がいる。一度、一緒に飲んで、歴女になるところを見てみたい。

けれど、昨日みたいに酔っぱらってしまったら、口説いてしまいたいと苦笑いした。

その日は夕方になって買い物に行った。自炊は好きな方だ。夏はあまり食欲が湧かないが、夏野菜を中心に買い物かごに入れていく。アボカドを見つけて足を止めた。亜衣のブログにアボカドとエビを使ったそうめんのレシピが載っていた。柚希は、アボカドとエビもかごに入れて、レジを済ませた。

マンションに戻り、食材を冷蔵庫に放り込むと携帯が鳴った。電話の受信音だ。表示された名前を見て驚いた。碧だった。碧とはメールのやり取りしか、いままでなかった。

「もしもし、碧さん？」

『ごめんね。メールにしようかと思ったんだけど、いま大丈夫？』

久しぶりに声を聞いた。少しつぶれたような、甘く可愛い声。胸に沁みるような思いだった。

声を聞いたら、顔を見たくなってきた。ああ、このひとのこと、やっぱり好きなんだと実感した。

「大丈夫ですよ。自宅なんです」

『借りてた本、読み終わってるから返したいんだけど、大学に行く日、ある？』

「来週、行きます」

『明日とか、時間取れない？』

「夕方からバイトなんで、それまでだったら」

『じゃあ、瀬戸さんのバイトの近くで待ち合わせさせて。駅前の…カフエでいい?』

「わざわざ、いいんですか? 本ならいつでもいいのに」

『……ほんとは、瀬戸さんに会いたくなっただ。本は口実だから心臓が飛び跳ねるかと思った。携帯を持つ手が震えた。』

「碧さん、私もずっと、会いたかったです」

言葉が勝手にこぼれた。考えたら、気持ちを伝えたのは、これが初めてかもしれない。

『あ、あの、昨日……』

「昨日?」

『ううん、明日でいい。電話じゃうまく訊けないから』

「はい…? じゃあ、明日」

電話を切って、柚希はそのまましばらく携帯を見つめていた。いろいろな感情が溢れていたけど、明日会えることが、一番、嬉しかった。

第二十話

柚希の部屋

マイマイの靴下

(後書き)

## 第二十一話

### カフェ カラオケ行ったのって、やっぱり副部長？

碧は指定したカフェの窓際の席にいた。

「碧さん」

声をかけると、碧は小さく手を振って顔をほころばせた。

「すみません。だいぶ待たせました？」

「そんなことないよ。瀬戸さんの方が時間ぴったりじゃん」

席に来た店員にアイステイーを注文して、碧に視線を向けた。

最初に会ったとき、幼い印象が強かったけど、いまはそれほど幼い感じがしない。柚希が情愛を傾けているからそう見えるのか、碧自身が変化しているのか、どうなのだろう。

松浦が、碧はあれで結構モテるから、といつていたが、なんとなくわかる。一見、どこにでもいそうな平凡なイメージなのに、目が離せないような可愛い二重だったり、かまいたくなるような表情をしたりするのだ。

どこか天然な言動も、愛しく思う男は多いだろう。

「これ、ありがと。全部、面白かった。特に、この二冊。ネズミの大量発生の話。何回も読み直しちゃった」

「私もこの話は好きでしたよ。最初に読んだときは高校一年でした」

「へー、高校生がよくこんな本に出会えたね」

「いま、バイトしてる店の店長に教えてもらったんです」

「いまのバイト先って、そんなに前からの知り合いなの？」

「えーっと、中学の終わりくらいですね。母を通じて」

運ばれてきたアイステイーをストローで攪拌した。グラスに氷が当たって涼しい音を立てる。

その音に、松浦とカラオケボックスで飲んだウーロン茶を思い出した。

「なんか最近、先輩と待ち合わせして、後から着いちゃうこと多い

んですよ。反省しないと、やばいですね。下級生なのに」

「え？ そうなの？」

碧は不思議そうに首を傾げた。

「一昨日、松浦さんと待ち合わせしたら、松浦さん、時間より早く来てて」

写真部のひとつで、時間より早く着くのがあたりまえなのかと疑問に思う。

「あ、カラオケ行ったのって、やっぱり副部長？」

「はい。あれ？ なんでカラオケ行ったの知ってるんですか？」

「『あいあいのあいある日常』に、そんなコメントがあったから」

「あ、そうか。そういえば、『マイマイの靴下』って碧さんでしょ？」

「うん。わかった？ 『ユズ』よりは捻ってるんだけどな」

柚希は「やっぱりあのハンドルネームは芸がないですよね」と苦笑した。

「実は、ハンドルネームだけだと自信なかったんです。でも、コメントに写真部の名画のこと書いてあったし」

「うん。とりあえず、告知しといたら少しはマシでしょ」

「そうですね。あ、そうだ。バイト先の壁、からし色なんです。私、佐々木さんから、黄土色の背景で撮れるだけ撮るようにいわれたんですけど、バイト先のひとで撮ってもいいんですか？」

カフェバーの客は、柚希から名画の話をして面白かった。自分たちにも参加させるとしてこく要求してきていた。社会人になると、ささやかな変化を求めるらしい。

「大丈夫だよ。だいたい同じ大学の生徒に限られたら、二千とか無理だし。からし色も黄土色もほとんど一緒だよ」

「よかった。これで数かせげます」

柚希はほっとしてアイスティーに口をつけた。

「一昨日、松浦さんに会ったのに、この事訊くのを完全に忘れてて。今日、碧さんに会えてよかった」

「……あのさ、副部長とつきあってるの？」

碧が上目づかいに尋ねた。

「え？」

「だって、前に副部長、告白してたから……」

柚希はふと、昨日碧が電話でいいかけて止めたことは、このことだったのではないかと思った。

「ああ、あれ、告白じゃなかったんですよ。もちろん、つきあってませんし」

「ほんと？」

「本当です。一昨日会ったときに、ちゃんと確認しました。ただ、写真のモデルをすることになりましたけど」

「へー、引き受けたの？」

碧は意外そうに目を見開いた。ひとの頼みをすんなり訊くようには見えないんだろうな、と柚希は苦笑いした。

「まあ、なりゆきで」

「副部長、喜んでたでしょ」

「うーん、酔ってたから、くわしいやり取りは、よく覚えてないんです。なんか時間がないとかいってましたけど、松浦さん、不治の病を患ってるとか訊いてます？」

「全然。あんな心臓に毛が生えてるようなひとが、不治の病とかあり得ないでしょ。不治の病に失礼だよ。就活問題じゃないの？」

実も蓋もない、いい様に、柚希はおかしくなって笑った。

このけなし方を訊く限り、碧が松浦に恋情を抱いていることは、なさそうだ。

就活問題と訊けば、なるほど納得もできる。柚希はすっきりした気分になった。

「碧さんと亜衣にも手伝ってほしいって言ってました。なんか、ややこしいことになったら、すいません。勝手に引き受けたことで」

「そんなの瀬戸さんのせいじゃないよ。でも、手伝いがあるようなモデルするの？」

「さあ？ とにかくスタジオで撮るらしいです。夏の日差しの中では無理だつて」

「まあ、そうかもね。コントラスト強すぎるし。副部長やわらかい光の写真、好きだもん。あたしは写真部だから、手伝うのはいいよ。亜衣ちゃんはどうかわからないけど」

バイトの時間が近づいてきたので、カフェを出ることにした。エアコンの効いた店内から出ると、一気に汗が吹き出しそうな暑さだった。

店の場所が知りたいからと、碧と一緒に歩いてきた。本当に一度、来店するつもりらしい。

アーケードの中を移動して細い路地に入っただけしばらく歩くと、碧はふいに足を止めた。

「碧さん？」

「ちよつと、触らせて」

碧が柚希の頬に手のひらをあてた。驚いて動けずにいると、碧が耳たぶに指を滑らせてきた。

「困ってるんでしょ」

「急だったから、びっくりして……」

「亜衣ちゃんだったら、びっくりした？」

亜衣だったら、急に顔に触ってきてても、驚いたりしない。どうかしたのかな、と思うだけだ。首を横に振ると、碧は真剣な表情になった。

「あたしは、亜衣ちゃんとは違うんだよね。それは喜んでいいことなの？」

柚希は自分の首筋に伸ばされた碧の手首を掴んだ。掴んだ手首の細さに怖くなって指が震えた。

「瀬戸さんって、なにか隠してる？」

「……………」

碧は、柚希が男だということを、もう知っているのだろうか。柚希が言葉を探しあぐねていると、碧は俯いた。

「違うか。瀬戸さんがなにかを隠してるんじゃない。亜衣ちゃん  
瀬戸さんのこと、なにか知ってるんだよね。亜衣ちゃんと飲みに行  
って瀬戸さんの話になったら、はぐらかされることあるの。なにか  
あたしにはいえないことなんだろうなって……」

碧は知っているわけではなかった。けれど、いま碧が言葉にして  
いることは、二人の核心に触れることだ。

いまかもしれない。本当のことを告げるのは。

掴んだままの碧の手首を引き寄せた。碧の身体が柚希にぶつかっ  
た。柚希はそのまま碧の肩を抱きしめた。

碧の汗の匂いが立ち上った。眩暈がするような甘い匂いだった。  
華奢な肩の感触が、たまらなく愛しくて、ついさっきしたはずの覚  
悟が霧散した。

「私、碧さんのことが好きなんです。でも、隠して話を話した  
ら、碧さんは私を嫌いになるか、軽蔑すると思っんです。だから、  
怖くていえないんです。ごめんなさい」

柚希はそれだけをいうと、碧から身体を離して踵を返した。バイ  
ト先に向かうために歩き出した柚希はもう、振り返らなかった。

## 第二十一話

カフェ

カラオケ行ったのって、やっぱり副部長？

(後書き)

ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました。活動報告の方でも書きますが、この二十一話で、一応、ひと区切りです。いままで、視点をこれだけ固定して書いたことはなかったのですが、読んで下さった方が読みづらくなかったか、心配です。特に柚希は見たことも聞いたこともないような、女の子に恋するニューハーフ直前という、特殊なキャラクターだったので、手探り状態のまま、二十一話になりました。書き始める前から、つきあうか、告白したら碧視点にするつもりでしたので、二十二話からは碧視点で話が続きます。再開の予定などは、活動報告を見てくださいます。

## 第二十二話

### 碧の部屋 キスの写真撮らせて

碧は呆然とその場に立ち尽くした。

柚希の背中へは、すぐに見えなくなった。バイト先の建物に入ったのだ。

肩を抱かれた指の感触が、まだ生々しく残っていた。肩口に顔をうずめたときに、柚希と名前と同じ、柑橘系のコロンの匂いがした。好きだといってもらえた。

けれど、喜んでいいのか判断できなかった。柚希に、なにも訊けなかった。

なにを隠しているのか、なぜ、それを知れば嫌いになるのか、軽蔑するのか、なにもわからないままだ。

しばらくすると、碧は駅に向かって歩き出した。そのままそこにいれば、柚希を追いかけてしまいそうだった。

碧は住居である大学の女子寮に帰ってきた。

M大は交通の便が悪い。家が都内にあっても寮やアパートに住む学生が多かった。碧の家は大学から二時間以上かかる。一年のときは家から通ったが、申請していた女子寮に空きが出たので、四月から入寮していた。

いまは夏休みで帰省している者も多い。普段より閑散とした建物は、どこか寂しかった。

碧は部屋に入ると窓を開けて、風を通した。流れ込む風も生温かったが、気にせずその場に座り込んだ。

わからないことが多すぎて、頭が大渋滞している。

いつも我慢できなくて、変なことを仕掛けるのは自分だ。キスのときも、今日も。

けれどなぜ柚希は、まともに相手をしてくれるのだろう。適当に

あしらってくれたっていいのに。

どうして袖希はあんなに綺麗なんだろう。

どうして自分は女に生まれてきてしまったんだろう。

いろんな感情が溢れてくる。袖希には自分の気持ちをちゃんと伝えていないけれど、ばれていたんだろくなあ、とぼんやり思う。そこそこ露骨につきまといっていた自覚はあった。

とにかく、好意を抱いてもらえているのだから、前向きに考えることにした。わからないことも、そのうち時期が来れば教えてくれるかもしれない。

部屋のドアがノックされた。

「碧、いる？」

「いるよ」

鍵をかけていないドアから、友人が滑り込んできた。小畑こはたさくらだった。

さくらは碧同様、今年度から寮に入っている。同じ文学部の二年である。嫌でも一緒にいることが多い。おまけに、写真部に所属していた。もっとも、さくらは真面目な部員ではない。学祭や飲み会のときに一番出席率が高い、お祭り部員だ。

「ねえ、来週、海、行かない？ 工学部と話があるんだって」

海で合コンとは、随分あからさまだ。

「んー、やめとく」

「なんで？ いま彼氏いないでしょ」

「そうだけど、なんか気が乗らない」

「ふーん、なんか最近、枯れてるね。やんちゃし過ぎて干上がった？」

さくらは奔放な碧の恋愛事情を知っている。口は悪いが、それなりに心配してくれていた。

「人聞きの悪い。海で合コンするような肉食系男子に興味がないだけだよ」

「いわれてみればそうか。碧の好みは百人が百人とも『優しそうな

ひと』って批評するような超草食系タイプだもんね」

身近なひとには必ずいわれる。碧は、判で押したように、同じタイプのひととしかつきあわない。

優しく、穏やかで、温厚なひと。それが、初めてつきあったひとは正反対のタイプだと知っているのは、大学の友人では、さくらだけだった。

そして、そういうひとと長続きしない理由も、きつと碧以上に気がついている。

「ねえ、写真部の一年にすごく綺麗な子、いたじゃん」

「瀬戸さん？」

「そうそう。瀬戸さん、行かないかな？」

「海に合コン？ どう考えてもそんなキャラじゃないでしょ」

行かれても困る。でも、水着姿にでもなったら、すごく可愛いんだろつなあ、と想像してしまう自分に自己嫌悪した。これではまるで発情してるエロじじいだ。

「だよ。碧、仲いいんでしょ」

「仲いいってほどじゃないよ。本貸してもらったり、メールのやりとりはするけど」

暑くなってきたので、窓を閉めてエアコンをつける。冷蔵庫から2リットルのペットボトルのまま麦茶を出すと、さくらは勝手にコップを出してきて注いだ。

「そういえば瀬戸さん、副部長にモデル頼まれたっていった」

「うわ、なんか怪しい。脱がせて写して」この写真をばらまかれなくなかったら、いうときけ』なんてことになったりして」

「まさか……」

どこのポルノ小説だ。いまどき、そんな陳腐な展開、あるはずがない。けれど、なんだか心配になってきた。

「……大丈夫だよ」

「冗談だよ。なに真剣になってんの？」

呆れたように肩を竦めるさくらに、碧はうん、と頷いて目を泳が

せた。

「そんなにいい子なの？」

「うん。すごく」

「そういえば、話題になってるもんね。綺麗だけど全然気取ってないって」

「そうなんだよ。目立つの、好きじゃないみたい。モデルのスカウトされたことあるけど、断ってきたんだって。瀬戸さん、副部長に一眼レフ教えてもらってたし、引き受けたみたい」

「そんな子だったら、今年の名画は楽勝かも」

「なんで？」

「パングには人が集まるでしょ。瀬戸さんが声かけたら、みんな協力してくれるんじゃないの？」

「まだ一年だし、そんなに有名じゃないよ。文学部は亜衣ちゃんと一緒にいるのを見てるから、知ってるだけじゃないかな」

「そっか。残念。ところでさ、今年は私も個人作品出そうかと思ってるんだ」

「へへ、珍しくやる気じゃん。なんか撮りたいのあるの？」

「さくらは頷いて、持ってきた鞆の中からデジカメを取り出した。小型ながらレンズの取り換えができるタイプで、素人でも一眼レフの写真が撮れるのをコンセプトにしているカメラだ。望遠は苦手だが、接写を得意にしている。

撮った写真を液晶に表示させて、碧に見せた。

「へへ、いい感じ」

幼稚園くらいの女の子が、おそらく自分の弟にキスしてる写真だ。背景は綺麗にぼけていて、うまく撮れている。表示を送ると犬の写真だった。何枚か送り続けてさくらは目あての写真に行き着いた。

「これどう？」

ダックスフントとポメラニアンが口をなめ合っている写真だった。「可愛い」

さすがに犬がモデルのせいか、ピントが少し甘い。目に合わせる

べきピントが前足に合っているが、写真自体は悪くなかった。

「こんな調子で、キスをテーマに何枚か集めて一枚のパネルにしようと思つて」

「いいんじゃない」

「でしょ。協力してくれるよね」

「うん。なにすればいい？」

「キスの写真撮らせて」

「はあ？ だれとキスしろつていうのよ。やだよ」

「べつに、男と舌絡ませてるキスしろなんていわないよ。子どもや犬の写真と並べて、同じくらい可愛いキスの写真が撮りたいの。碧は中身はともかく見た目は幼いし、女同士でほっぺにキスしてる写真でいいから」

中身はともかくとはひどい言い草だ。でも、思春期の初めに、ただれた性体験を経過した自覚もあるので、いい返すこともできない。唇を尖らせながらも頷いた。

「なんだ。それならいいよ」

背景ぼかして、フィルターかけて、逆光で……、カメラの性能と相談しながら、二人でプランを練る時間も楽しい。

「とにかく、ために撮つてみようよ」

「うん、いいよ。そういえば、だれとキスしたらいいわけ？」

「あ、考えてなかった」

「なにそれ。じゃ、さくらでいいよ。セルフでいこう」

「セルフか。タイミング難しいなあ。リモコンあったらなあ」

「あたし、持つてる」

碧は机の引き出しからリモコンを取り出した。幸い、さくらのカメラと互換性があって使うことができた。三脚もセットして、準備を整える。

「部屋、狭いし、ベッドの上しかないね。距離ないけど、ぼけるかな」

「練習なんだから、ぼけなくてもいいよ。で、どっちがキスするの

「？」

「碧がされる方。わたしがする方。碧が顔、カメラに対してほぼ正面で、目、瞑ってて」

モデル的には楽な役割だ。いわれた場所で座って待つ。リモコンを手にさくらが近づいてきた。ベッドが揺れて傾いた。

「何枚か撮ってみるから、しばらくそのままにしてて」

「オッケー」

目を瞑っていると、さくらが頬にキスしてきた。まぶたや唇の横や耳にも。少しくすぐりたい。動くピン트가ずれるので、動けないのがつらかった。

二十回くらいシャッター音がして、もういいよ、と肩をたたかれたので目を開けた。

「どう？」

碧も設定に口を出したので、写真のデキには興味がある。

さくらが撮った写真を表示させた。

「結構、いいじゃん」

「うん。いい感じ。逆光でよかったね」

「あ、これいい」

さくらが気に入ったのは、碧の唇のすぐ横にキスしてる写真だった。碧が少し首を傾げていて、角度があるのがよかった。心配していた背景のぼかしも、思っていた以上だった。

「練習のつもりだったけど、もう、これにするわ。ありがと、碧」

「もう、いいの？」

「いいよ。今度、モデルのお礼になんか奢ったげる」

「だったら、奢ってくれなくていいから、一緒に行ってほしいお店があるんだ。瀬戸さんがバイトしてるカフェバーなんだけど、ご飯もおいしいらしいの」

「いいよ。今度行ってみよ。じゃ、さっきのデータ、コピーしたら持ってくるから」

さくらは満足顔で出て行った。碧の部屋は三階。さくらは二階で

ある。なにかあれば、すぐにも行き来できる気安さだった。

第二十二話

碧の部屋

キスの写真撮らせて  
(後書き)

## 第二十三話

### 碧の部屋 恋に似ている

碧は食事と入浴を終えて、春から撮りためた写真の整理をしていた。ふと時計に目をやると十時を過ぎてている。

柚希が何時までバイトかわからないが、以前、遅い時間になるとゲイの客が多くなる、といった内容のメールをもらったことがあるならばまだ、バイト中だろうか。

これ以上遅い時間に電話するのも非常識だし、今日はもう無理かな、と頼杖をつく。

声を訊きたかった。昼に会ったときのことを、ちゃんと話したかった。

けれど、冷静に会話ができる自信もなかったから、電話ができないのは、ちょうどよかったのかもしれない。

せめて、メールをしておこうと携帯を手を取った。

『今日は、会えて嬉しかった』

それだけを打って、全部消した。しばらく考え込んで、やっぱり同じ文章を打ち始めた。

『今日は、会えて嬉しかった。あたしは瀬戸さんのこと、よく知らないけど、なにを訊いても嫌いになったり軽蔑したりしないと思う。無理強いはいしないけど、教えてくれるの、待ってるから』

送信して、携帯をテーブルの上に置いた。こんなメールで気持ち伝わるのかなあ、と不安になる。文学部のくせに、言葉で気持ちを伝えることが苦手だったのかと情けなくなってきた。

柚希が隠していることは、なんだろう。なにを訊いても嫌いになったり軽蔑したりしないと決意したつもりだが、やはり不安はあった。

たとえば、柚希に恋人がいるとしたらどうだろう。悲しいしショックだけど、軽蔑することはない。実は、いままでその可能性を何

度も頭の中で巡らせてきた。柚希と亜衣の間には、友情以上のものが存在しているように思えてならない。

パニック障害を患ったときに支えてくれた、と柚希は説明した。それは嘘ではないだろう。二人の間には、他人が入り込む余地などないくらいの絆があるように見える。

亜衣をうらやましく思うし、その立場にいるのが自分でないことも残念でならない。亜衣との間に、愛情は存在するのだろうか。いまの二人を見る限り、そうは思えなかった。

けれど、柚希と交わしたキスを思い出すと疑念がわく。慣れたキスだった。同性とのディープキスを柚希は知っていた。なりゆきや流れがあっても、同性とディープキスをする発想が、普通はない。

相手が亜衣以外のひとは、考えられなかった。

「一度は、なにかあったんだろうなあ」

だからといって、柚希がいまも亜衣に感情を傾けているようには思えないし、それは亜衣の様子も同様だった。

松浦が柚希に告白してきたときも、柚希は他人事のように冷静だった。ただ、並んで立っている姿が思いがけず似合っていて、男だというだけで、あっさり告白できる松浦に腹が立ったのだけだ。

嫌いになるとか軽蔑するというのは、特殊なことだ。恋人がいるとか、実は他に好きなひとがいる、といったことではないだろう。だいたい、自分と柚希はつきあっているわけではないのだから、他のひととながあっても、口を挟むことはできない。

ならば、年齢を偽っているとか？ 本当はもう五十歳を超えているとか？ いくらなんでも、そんなことはないはずだ。中学からの友人だという亜衣もいるのだから。

だとしたら、全身、整形しているとかはあり得るだろうか？ あの綺麗な姿が、実は整形によるものだったら、かなりショックだ。本当の姿が別人だったら？ 嫌いなるだろうか？ 軽蔑するだろうか？ 中学の時に、パニック障害になったのは、元の柚希の容姿に原因があると考えられる気がしてきた。

あの綺麗な容姿を自覚していながら、目立つことを嫌がり、控えめで気取らないのは、本来の姿ではないから、と考えれば妙に筋が通る。

柚希は二十歳になるまで、ピアスもしないといっていた。なら、整形しているはずはない。でも、もししていたら、たとえば事故かなにか理由があつて、不本意にも整形をする必要があつたら、どうだろう。柚希の言動と、重なりはしないだろうか。

決して見た目だけに心惹かれたつもりはないが、あの美しさに心を奪われたことも事実だつた。

碧は天井を見あげた。なんだか急に喉の渴きを覚えた。

冷房で身体が冷えてきたので、温かいものを飲みたくなつて、コーヒーを入れた。

マグカップから漂うコーヒーの香りに、暗室で作業をした日に交わした口づけの感覚を思い出した。要するに自分は、欲求不満なのだ。あのときのあのキスを、もう一度したいのだ。

柚希の姿が本当はどうであれ、もうどうでもいい。考えてもわからないし、柚希が隠していることが、なんなのかもはっきりしていないのだ。はつきりしていることは、いまの柚希の姿が、碧の知る柚希のすべてだということだ。

夕方、さくらから頬にキスをされたとき、なにも感じなかったことに、碧は今頃になつて気がついた。

翌朝、目が覚めると携帯には未読のメールが二通あつた。柚希と松浦からだ。松浦のメールを先に開いた。

『柚希ちゃんの写真を撮りたいから、手伝ってもらいたいんだけど、お願いできる?』

撮影の日時とスタジオの場所が、そのあとに続いているメールのレスは、すぐに送つた。

『行けます。持っていくものとかあつたら、教えてください』

返信は時間をおかずに来た。

『一眼レフ持参で』

『了解です』

柚希のメールを開くときは緊張した。

『今日はわざわざ、ありがとうございました。あのことは、もう少し待っててください。いつか必ずお話します』

送信時刻は昨夜の十一時半頃だ。そっけないメールが、少し寂しかった。期待より、不安が膨らみそうだった。けれど、誠意も伝わってきた。

柚希に向けている自分の感情は、なんだろう。

恋に似ている。

でも、柚希は女だから、恋ではないのだろうか。

中学の時に、初めて好きになったひとに抱かれた。年も離れていたらから夢中になった。いろんな性行為を仕込まれて、何度も浮気されて心が折れた。

二年以上つきあつて、まともに喧嘩もできなかった。年が十以上離れていると、どんなに理不尽でも相手が正しいと思ひ込むしかなかった。いま考えれば、馬鹿馬鹿しい。年が離れていたとはいえ、相手も二十台だ。中学生に手を出すような男が、まともであるはずもなかったのに。

散々浮気を繰り返して、やっぱり碧しかいない、と戻ってきた男に、いつのまにかなんの未練もなくなっていた。罵倒する気力も、過ぎた月日に対する後悔もなく、碧は初恋を卒業した。

あのときの嵐のような感情が恋ならば、いまの、柚希に対する切なさは何だろう。

この気持ちはこれから、どこに向かって動くのだろうか。

碧は気持ちを振り払うように、洗面所で顔を洗った。

第二十三話

碧の部屋

恋に似ている

(後書き)

## 第二十四話

### カフェバー さくらの写真だよ

柚希がバイトするカフェバーにさくらと足を運んだのは、撮影を翌日に控えた日曜の夕方だった。しばらく間が空いたのは、お盆休みだったからだ。よほどの事情がない限り、寮の学生もお盆時は実家に帰省する。

それは、碧やさくらも同様だった。だから、さくらと会ったのも、碧の部屋で写真を撮った日が最後だった。

店はエスニックな内装で、明るい雰囲気だった。席に案内してくれたのは柚希ではなかったが、注文を訊きにきてくれた。

「碧さん、小畑さん、いらっしやいませ」

もの珍しそうに店内を見廻していると、柚希が声をかけてきた。

店の黒いエプロンをつけている柚希は、ウエーブの髪を後ろで束ね、いつも見る印象とは違って大人びて見えた。

「いい感じのお店だね。なんかちょっと、変わってる」

ゲイの客も多いと訊いていたので、もっとシンプルで都会的な店を想像していた。思っていたよりアットホームな雰囲気だ。

「オーナーが東南アジアによく行くので、こんな内装になってるみたいですよ」

「おすすめある？」

「アルコールはベリー系のカクテルかな？ 料理は本日のおすすめプレートだと色々愉しめますよ」

「じゃあ、あたし、ラズベリーのマティーニ」

「わたしはブルーベリーにする」

料理は柚希の勧めるまま、おすすめプレートを注文した。

厨房に向かう柚希の後姿を眺めていると、さくらが感心したようにいった。

「近くで見ると、やっぱり、綺麗な子だね。新歓コンパのときも思っ

たけど。あれだけ可愛いと、生きてて嬉しいだろうな」

妙な感心の仕方もあるものだ。

真面目に写真部に顔を出さないさくらは、柚希と言葉を交わすのはこれが初めてだった。

「あれ？ そういえば、なんでわたしの名前知ってるんだろ？ 新歓コンパで覚えたのかな？」

新歓コンパのときは、新入生は自己紹介をするが、上級生は特に自己紹介をしない。席の近くに座った上級生とは会話の中で名前を訊くのだが、ほとんどの上級生は顔を見るくらいなのだ。さくらはその日、柚希と話をした記憶がなかった。

「前に訊かれたことあるんだ。『碧さん、よく学食で一緒の方、写真部のコンパで碧さんに彼氏の試合、行くの？』って訊いてた方ですよね』って」

「ああ、それで。にしても、あの人数の中で、よくそんな会話覚えてたね」

さくらは納得して頷いた。

「そうそう、ここに来る前に、写真、現像してきたんだ。見たい？」

「見たい、見たい」

さくらが鞆の中から出してきたのは、学祭に出品するというキスがテーマの写真だ。最終的にはパソコンで繋ぎ合せて一枚にして大きくプリントするのだが、その前にAサイズにプリントしたのだ。

カメラの液晶やパソコンで見ているときは印象が変わることもあるので、大切な作業だ。

前に見た子どもや犬の写真以外に、赤ちゃんの頬にキスする若い母親や、手の甲にキスして笑い合っている老夫婦の写真もある。それから、碧とさくらの写真だ。

「へー、このおじいちゃん達いいなあ。会話が聞こえてきそう」

「でしょ。バランス的に、若い恋人か夫婦を加えたいんだよね。シルエットか全身か地面の影だけ写しても面白い気がするんだけど」

「うん、そうだね。でもすごいよ。お盆の間も頑張ってたんだ」

「まあね。見直した？」

「見直した。見直した」

写真を撮らせてほしいと頼むときは、女でよかったと思う。初対面のひとでもあっさり承諾してくれることが多いし、この老夫婦のように、すぐに打ち解けてくれるものだ。

碧はほとんど人物を撮らないのであまり関係ないが、男子で人物を撮りたいひとは、苦労している。若い男がいきなり「写真、撮らせてくれ」といつてきたら、女の子は警戒するのが普通だからだ。

テーブルに広げた写真で盛り上がっていると、柚希がカクテルを持ってきてくれた。

「お待たせしました」

二人は慌てて散らかした写真を掻き集めた。

「碧さんの写真ですか？」

柚希が興味深い様子で、身を乗り出した。

「さくらの写真だよ」

「小畑さんの写真、私、見たことないです」

「やっぱり？ 実は、ほとんどまともに写したことないの。去年の名画のときに人手不足で入部して、そのまま、なにもしてなくて。

でも、なかなかいいの、撮れてるんだよ。これどう？ わたしと碧の愛の軌跡」

さくらが碧とのキス写真を柚希に差し出した。写真を手にした柚希は、息を飲んで凝視した。

「…綺麗ですね」

「でしょ。思ったより可愛く撮れたから、気に入ってるんだ」

「愛の軌跡って、ためし撮りをそのまま使うことにはただじゃん」

碧は呆れてわざとらしく溜め息をついた。

「ためし撮り？」

「可愛いキスをテーマにした写真をつないで一枚にするんだって。

ために自分たちで撮ってみたの。絞りとか露出とか設定のためのためし撮りだったのに、これで決定にするんだって。思い切りがい

いつていうか、いい加減っていうか……」

呆れた口調で肩を竦めた碧は、柚希を見あげた。なんだか不満そうにしている。

「瀬戸さん、どうかした？」

「いえ、雰囲気が素敵な写真だから……」

「瀬戸さんにも参加してもらいたいなあ。若い男女の枠が空いてるんだ。彼氏、いないの？」

さくらの発言に、ぎよつとした顔で柚希は首を振った。

「いません」

「じゃあ、部長が副部長あたりでどう？ 身長的にいい感じなんだけど」

「却下、却下」

柚希よりも先に、碧が頬を膨らませて拒絶した。

「なんで碧が嫌がるのよ」

「写真部でまかなおうなんて、横着すぎる。まじめにちゃんとしたカップル探しなさいよ」

「うーん、ま、そりゃそうか。ごめんね、瀬戸さん」

「いえ、面白い話でしたから、気にしてませんよ。じゃ、仕事ですので」

嫣然と微笑んで、などという表現が似合いそうなくらい綺麗な笑顔だったので、碧は思わず見惚れてしまった。

第二十四話

カフェバー

さくらの写真だよ（後書き）

## 第二十五話

### 帰り道 整形じゃなかったんだ

料理もカクテルもおいしかった。さくらとも、久しぶりに寮以外でゆっくり話せて愉しかった。ただ、柚希は裏方の仕事が多いのか、そのあと席に来てくれることはなくて、ちょっと寂しかった。

二時間くらい店にいて、そろそろ帰ることにした。カウンターの近くのレジに行くと、柚希がカウンターに座る、三十歳くらいの女のひとと、なにか言い合っていた。怒ったような言動が珍しくて、しばらく佇んでしまった。

「あ、碧さん、もう帰るんですか？」

柚希が碧に気がついた。

「うん。すぐおいしかった。明日のモデル、大変だろうけど頑張つてね。あたしも手伝いにいくから」

「柚希のお友達？」

さつき、柚希と言い合っていた綺麗なお姉さんが振り返った。

「写真部の先輩。碧さんと小畑さん」

「初めまして。いつも娘がお世話になってます」

「娘……？ 瀬戸さんのお母さんですか？」

碧とさくらの声がぴったり重なった。

「うわ、若いなあ。お姉さんにしか見えませんね」

さくらの驚嘆の声に、柚希の母は「やーん、嬉しい」と可愛らしく喜んで見せた。

「……………」

碧は驚いて言葉を失った。華やかな、本当に華やかなひとだった。柚希をひとまわり小柄にしたくらいの背丈で、面差しがよく似ていた。呆然としていると、柚希が声をかけてきた。

「碧さん、碧さん、月に十万以上化粧品とエステにつき込んだら、これくらいになりますよ。べつに妖怪とかじゃありませんから。普

通のアラフォーですし」

「失礼な娘ね」

「そうよー、こんなに綺麗なお姉さんに失礼よ、瀬戸さん」

なぜか意気投合したさくらが、一緒になって拳を振り上げている。多少、酔っていたらしい。

どうやら、さくらはもうちょっと残って、柚希の母親と飲むことにしたようだ。まあいいか、と碧は会計を済ませようとした。

「碧さんだっけ？ 一緒にもう少し飲まない？」

柚希の母親がグラスを掲げて誘ってきた。

「いえ、明日用事があるので、帰ります」

「そう？ じゃあ、柚希、送って行ってあげなさいよ」

碧の方が年は一つ上なのに、送っていけと娘に声をかけるなんて変わったお母さんだなあ、と碧は思った。夜道を歩いていたら、碧よりも柚希の方が、よほど痴漢に狙われそうなのに。

「でも瀬戸さん、バイトは？」

「今日はもう、終わりました。もともと助っ人だったんで、これからは、週一回くらいになりそうです」

「そうなんだ」

会計は柚希の母親が、さくらの分と一緒に払ってくれるといったので、甘えることになった。あんまり遠慮するのも失礼だと店長にもいわれたからだ。柚希の母に頭を下げて、店を出た。

「派手なひとで驚きました？」

「え？ ああ、ううん、違うの。そっくりだったから」

隣を歩く柚希に問いかけられて、さっきはよほど変な態度だったんだろうなと、うなだれた。

「よく似てるとは、いわれます」

（整形じゃなかったんだ）

柚希が隠していること候補の、一番有力な候補だった。母親のあの美貌なら、柚希の美しさも遺伝によるもので間違いはない。

「碧さん、あの写真、どこで撮ったんですか？」

「あの写真？」

「小畑さんが碧さんにキスしてる写真」

「あたしの部屋だよ」

「小畑さん、よく来るんですか？」

「うん、大学あるときは三日に一度は来るよ。あたしもよく行くけど」

「……………」

黙り込んでしまった袖希に、碧は首を傾げた。

「どうしたの？」

「べつに……………」

あきらかに不機嫌な顔になってしまった袖希に、碧は面白半分であからかうようなことをいつてみた。

「もしかして、妬いてる？　なんてね」

軽い口調で袖希の腕を掴んだ。けれど、当然返ってくるはずの、笑い飛ばす声が届かない。まさかと呆れる言葉がない。

「妬いてますよ。私、碧さんのこと好きなんで」

真摯な言葉を、隠しもごまかしもしないで袖希が告げた。

碧は耳を疑った。前にも好きだといわれたけど、そのあとに告げられたことに困惑して、喜ぶ余裕もなかった。あんな写真で妬いてるといつてもらえたことが、信じられない。

「……………どうしよう。すごく、嬉しい」

ここが人通りの多い歩道でなければ、袖希にしがみついていたかもしれないなかった。俯いていたので、袖希がどんな顔をしていたのか、碧は知らなかった。

第二十五話

帰り道

整形じゃなかったんだ（後書き）

## 第二十六話

### スタジオ 水着も持ってませんし

指定されたスタジオは、大学からそれほど遠くない場所にあった。古ぼけた小さなコンクリートの建物だ。

以前は美大の卒業生が製作に使っていたアトリエだったそうで、壁のそこかしこに油絵の具の汚れが残っている。スタジオといわれたが、実際は、水道、電気が通っているだけの、空家のような状態だ。

碧は、スタジオに入ればライトの配置や光量の測定を手伝うのかと思っていたのだが、すでに準備は整っていて、手伝うことがなかった。

いわれた時間より早めに着いたのに、すでに柚希と松浦が到着していて、柚希はオーガンジーの白いドレスのようなものを身に付けていた。

「碧ちゃん、待ってたよ」

松浦はレンズにエアをかけながら、暑かったかい、と気遣う言葉をかけてきた。

「なにを手伝うんですか？　なんかもう、手伝うことないみたいなんですけど」

「ライトの配置なんかは亜衣ちゃんに手伝ってもらったからね」

いわれて室内を見廻してみたが、亜衣の姿は見当たらない。

「そっさいえ、亜衣ちゃんは？」

「さっき、終わって帰ったよ」

事情がさっぱりわからなかった。自分はなんのために呼ばれたのだろう。亜衣と二人で手伝うのかと思っていたが、どうやら、時間をずらして来るように、それぞれに連絡していたらしい。

「碧ちゃんは左側のライトの外側から、柚希ちゃんと喋っててくださいよ。適当にリラックスしてるところを、勝手に撮るから」

「そうですね？　じゃあ、手伝うことがあったらいつてくください」  
説明されてもなんだか腑に落ちないが、撮影そのものには興味があるし、いわゆるまま袖希に近づいた。

「昨日はごちそうさまでした、って、お母さんに会ったら伝えたい」

床に座り込んで話しかける。袖希は椅子に腰かけているので、見あげる状態になった。

「はい。あの碧さん、昨日も思ったんですけど、肌、焼けましたね」  
「うん。日焼け止め塗ったんだけど、途中で塗り直さなかったから、取れちゃったみたい。ほら、水着の跡がくつきり」

碧がTシャツの襟ぐりをはだけて肩を見せると、袖希は顔を赤らめて怒り出した。

「碧さん！」

「え？」

不思議そうに首を傾げると、松浦がクスクスと笑いを堪えていた。  
「大変だな。同情するよ」

松浦はレンズを変えて、三脚にカメラを固定していた。まだしばらく、カメラの準備をするようだ。

「なんのことですか？」

「いや、独り言」

松浦に尋ねてみても、はぐらかされてしまった。袖希はどこかわざとらしく咳ばらいをした。

「海ですか？」

「ううん、プール。お盆に実家、帰ってたんだけど、お墓参り以外に行くところなくて、暇だったから近所の友達と」

遠目で見ていたときはドレスかと思ったが、近くで見ると布を巻きつけていた。カメラから死角になるところは洗濯バサミがついている。背景の壁も白いので、写真になったときはかなりいい雰囲気になりそうだ。壁の汚れが心配だが、松浦のことだから、それもなにかしら計算済みなのだろう。

「瀬戸さんは焼けてないね。泳ぎに行ったりしないの？」

「全然。水着も持ってませんし」

「ええ？ なんで？ すっごく似合いそうなのにもつたいない」

「かなづちなんです」

「ふーん。でもさ、あたしもプール行ってそんなに泳がないよ。泳げない子も一緒に行ってるし」

中学の水泳教室でもあるまいし、海に行こうがプールに行こうが、泳げなくても関係ないのではないだろうか。おしゃれ番長のような柚希が、水着すら持ってないのは不可解だ。

「身体が弱くて……」

「高校のとき、皇居の周囲をよくジョギングしたっていつてなかった？」

「……………」

松浦は身体を震わせて笑いを堪えていた。

「だめだ。きみらの漫才訊いてたら集中できない。音楽でもかけるよ」

部屋の片隅にあるコンポのスイッチをいれて、松浦は曲を流した。よく知っているポップスだ。

いまの会話のどこが漫才なのか、意味がわからなかったが、碧は流れてくる懐かしいラブソングに意識を傾けた。二年くらい前に流った曲だった。

昨日、柚希と一緒に歩いた夜の歩道を思い出した。あのあと、なにを話したかよくわからないほど、胸が高鳴った。

柚希のことを碧は最初、憧れていた。自分もこんな風になりたいと思っていた。容姿が綺麗なだけでなく、冷静で、だれに対してもなにに対しても淡泊な態度がうらやましかった。くだらない感情に振り回されて自分を見失ってしまうことが、いつも嫌だったからだ。

柚希は理想そのものだった。

けれど柚希と接触するたび、切なさが募った。なんでもない会話にも、心が揺れた。

考えれば、碧はこんなときめきを経験したことがない。好きだと自覚するときは、セックスの直前だったり最中だったり。男に求められれば応えたいと思う自分の気持ちに愛情だと考えていたし、相手が自分の身体に欲情すれば、それがそのひとの愛情だと思っていた。

けれど、セックスは苦痛だった。早く終わってほしくて感じてる演技をするのも面倒だった。

優しく抱かれて、相手を傷つけないように気を遣いながらの行為に、内心うんざりしていた。

我を忘れるようなセックスをしたのは、最初の恋人だけだった。けれどそのひとは、セックスより先に、フェラチオを教え込むような、人でなしだった。

好きなひとからは優しさをもらえない。優しいひとからは快樂をもらえない。なにが悪かったのだろう。だれが悪かったのだろう。それともみんな、こんなちぐはぐな思いをしているのだろうか。

男とつきあうことは轍わたちの上を歩くようなものだ。自分の経験も友人の経験もテレビのドラマも小説も、全部教科書みたいに導いてくれるので、先が見えている。けれど同性に気持ちを動かされたときは、まっくらな夜の砂漠を手探りで進むように心もとない。

「副部長、いま付けてるレンズ、単焦点ですか？」

単焦点レンズとは絞りとピント合わせが固定されているレンズのことだ。

「そうだよ」

「そこからだと、どれくらい被写体が入ってるんですか？」

「見に来れば？」

碧は移動して松浦のカメラを覗き込んだ。

「へー、絞り強いなあ。これで設定したら固定なんですよ。ズームも望遠もできないって、不便な感じ」

「確かに、外でなんか写したいときは難しいな。今日みたいなきはいいけど」

碧が一番撮りたいのは風景なので、絞りが強すぎるこのレンズを扱うのは難しそうだ。

レンズの中の柚希は、モデルの務めを果たすためか、いつもより化粧が濃かった。初めて会った新歓コンパのときは、これくらいだったような気がする。最近、化粧が薄いのは、夏の暑さのせいだろうか。

白い布に身を包まれているのに、こんなに綺麗なのに、花嫁のような、とは思わない。清廉すぎるのだ。生身の人間が持つ欲望を、柚希は持ち合わせているのだろうか。花嫁より妖精の方がしっくりくる。

碧は元いた場所に戻った。

「そついえば、前に借りた小説、面白かったから他のも読んでみたの。読みにくかった」

「あ、やっぱり碧さんもそうなんだ。話によって全然違いますよね。文学部のひとでも読みにくいんだったら、私なんか読めなくて当然ですね」

とりとめのない話をしていく間に、シャッター音が届く。途中、レンズを変えて撮っていた。松浦の提案で、碧も自分のカメラで柚希を撮影した。自分が写した写真と比べて確かめたいから、と松浦に要請されたのだ。どうやら、碧をここに呼んだのは、それが目的だったらしい。

リラックスしているところを勝手に撮るといつていたが、撮影が進むと、松浦は立ってくれ、座ってくれ、横を向いてくれ、笑ってくれと、注文を付け始めた。端から見ている、モデルも大変な仕事だとわかった。じっとして動けないのは辛い。要求に応えているのに、何度も撮り直されれば、腹も立つし、表情にも出てしまう。

けれど、柚希は文句もいわずに松浦についていつてる。見た目よらずと体力があるらしい。少し、感動した。一度引き受けたことに対する責任感の強さにも、好感を持った。

かなりの枚数が撮れたので、松浦は写した画像を確認していた。

碧は立てた膝に頬杖を突いて柚希を眺めていた。撮影中ではないのでライトの内側に入っている。

近くで見ると、柚希のグロスがライトで光っていた。

暗室で作業をした日、口づけを交わしたことを思い出す。あの日、自分からくつつけるだけのキスをしかけたときは、柚希に対して、こんなに心を傾けていなかったのに。

「ねえ、グロスってキスしても取れないの？」

ふと思いついた台詞を口に乗せてみた。

「……さあ、どうなのでしょう。前にためしたときは、鏡で確かめなかったから」

柚希も碧に倣って、あのときと同じような台詞で答えた。

「ためしてみたい？」

「いまはちよっと」

「そうだね」

顔を見合わせて、笑った。

「あ、でもやつぱり、いまがいいかも」

柚希がおかしなことをいった。

「松浦さん、メモリ、残ってます？」

柚希は首を伸ばして松浦に問いかける。

「残ってるよ」

「ちよっと記念写真、お願いしていいですか？」

「いいよ」

「しばらく、構えててくださいね」

松浦が三脚からはずしたカメラに顔を押し当ててるのを待ってから、柚希は碧を手招きした。

「碧さん、あれ」

「あれって？」

柚希の指差す方を見ているが、なにもない。気を取られていると、二の腕を引き寄せられ、口角の横に唇を押し付けられた。

「……ッ！ 瀬戸さん、なに……？」

「小畑さんの写真の意趣返し、かな」

柚希はいたずらっぽく笑った。さくらの写真に対抗したとでもいうのだろうか。あんな、ためし撮りの意味もない写真に？

「松浦さん、撮れました？」

「ちよつと待って……あー、撮れてるよ」

「そのデータ、後でコピーしてくださいね」

どうして松浦はそんなに淡白な反応なのだろう。もう少し、びっくりするとかはないのだろうか。

碧はドキドキしながら柚希の顔を見つめた。

「今日のグロスは、一回で移っちゃいましたね」

身体に巻きつけられたオーガンジーを身体から剥がして、柚希はティッシュで碧につけたグロスを拭き取った。

なんだか恥ずかしくて仕方がない。頬にキスされただけなのに。

もう絶対、なにを訊いても嫌いになつたり軽蔑するなんてありえないから、隠してることを全部、教えて欲しかった。

第二十六話

スタジオ 水着も持ってませんし（後書き）

九月に入ると大学に行く日が増えていく。夏休みなので講義はないが、遊んではかりもいられない。大学の図書館は解放しているので、レポートのための資料を探しに、碧はここ数日、大学の図書館に通っていた。

借りて帰ることもできるが、目的の内容が確かめるだけでも手間がかかった。ようやく何冊が見つかったので、学生証を出して借りる手続きをした。

寮に戻り、付箋を貼りながら資料を読んでいく。

碧はパソコンを立ち上げた。わからない言葉を調べるためだ。

立ち上がるのを待つ間に、ふと集中力が途切れた。辞書を開くつもりだったのに、ブログを開いた。

あいあいのあいある日常。柚希の友人、亜衣のブログだ。

柚希がコメントを書いたあと、亜衣が返事を書いていた。

『ユズ様、コメントありがとうございます。でも、どんくさいとは失礼な！ ま、一回だけ、脱輪はしましたが。夏休み中に免許取れそうです。ドライブに連れて行ってあげるので、ありがたく待っててください。来年行く約束の温泉旅行も、車で行く？』

そのあと、柚希のコメントはない。読んでいるのか読んでいないのかわからないが、柚希がそれほど亜衣のブログを覗いている様子はないので、見ていないのかもしれない。

「温泉旅行、行く約束なんだ……」

行かないでくれと頼めば、柚希は行かないでくれるだろうか。行ってほしくない。

けれど、そんなことをいえる権利があるとも思えなかった。柚希に好かれている自覚はある。自分も柚希を好きだから、気持ちは重なっている。なのに、はつきりとした形がない。友情の範囲でしか

ないのか、情愛の域に達しているのか。

もし、男女なら、好き合っていればつきあうし、つきあえば他のひとと旅行に行ったりしない。行くといわれれば怒って反対すればいい。温泉旅行に行くのが同性の友人ならば、反対することはない。自分も柚希も女で、亜衣も女という構図の中で、どういう決着が正しいのだろう。けれども、柚希が男と旅行に行くといえ、やっぱり嫌なのだ。そうすると、柚希には他の誰とも旅行に行つてほしくないとも願うつもりだろうか。

柚希とは好意を寄せあっているはずなのに、つきあっているわけではない。それは、女同士だから好意の深さに関係なく、友情の交流にしかならないのだろうか。

同性と異性の境界線はなんだろう。

ぼんやりしながらブログを閉じた。電源を落とそうとして、最近パソコンのメールチェックをしておかなかったことに気がついた。ほとんどのメールは携帯だし、問題はないはずだが、こんなに何日も溜めていたのは初めてかもしれない。

メールチェックのボタンをクリックすると、二十七通のメールが届いていた。なかに一通、やたら重いメールがある。受信に時間がかかっていると、携帯の着信音が鳴った。名前ではなく、電話番号が表示されていた。だれだろうと首を傾げながら、通話ボタンを押した。

『碧？ 久しぶり』

声を訊いた途端、碧は血の気が引いた。苦い初恋の相手だったからだ。

「……………直哉さ…持田さん、お久しぶりです。どうかしたんですか？」

声が震えないように、必死だった。短い言葉だけで、何年も会っていないかったひとだと気がついた自分に愕然とした。久しぶりでだれかわからなかった、と演技することもできなかった。

『よそよそしいな。だれに電話番号教えてもらったか、訊かないの』

か？」

「べつに……」

そんなことはどうでもよかった。早く、この電話を終わらせたかった。

『きみの中学の時の親友だよ。知り合いのつてで、どうにかたどり着いた』

この男は話をするとき、吐息を吐く癖がある。その吐息ごと口づけで飲み込みたいと願ったかつての欲望が思い起こされて、鳥肌が立った。

『今度、結婚するんだ』

持田の年齢からすれば、不思議ではない。むしろ遅いくらいだ。けれどいままで、そんな展開を想像したことはなかった。胸がざわめいているのを、どう解釈すればいいのだろう。

「そう、ですか。おめでとうございます」

『最後に抱かれに来ないか』

ああ、この男は、何も変わっていないのだと碧は思った。自分勝手に人でなしで傲慢で、そして途方もない魅力の持ち主なのだ。

『碧？』

低くて甘い声だった。この声で名前を呼ばれることが大好きだった。自分はきつとこの先、この男から受けた以上の快樂をセックスで得ることはないだろう。

目に涙が滲んだ。滲んだ目に、柚希の美しい顔が浮かんだ。深呼吸して携帯を持ち直した。

「直哉さん、正直にいえば抱かれます。でも行きません。大切なひとに合わせる顔がなくなりますから」

柚希に会えなくなるより辛いことなど、なにもない。だから選択に迷いはなかった。

『……………そうか』

ライターの音が聞こえた。昔、嗅ぎ慣れた煙の匂いの記憶がよぎった。

『変なことをいつて悪かった。元気にしてるか？』

「はい。持田さんは？」

『相変わらずだ』

「あの、お幸せに……」

『きみもな。いろいろすまなかった。それでも俺は、碧のことを本気で好きだったんだぜ』

「わかってます」

本当は、わかってなかった。いまでもこの男の言葉は信用できない。それでも、一時心から好きだったひとからの言葉には、深い感慨があつた。

『じゃあ、元気で』

電話が切れた。

碧は閉じた携帯を握りしめて膝を抱えた。

「瀬戸さん、あたしちゃんと断れたよ……」

涙声で呟いた。

一人きりの部屋が寂しく感じた。柚希に会いたかった。

ぼやけた視界でパソコンの画面を見た。メールの受信が終了している。ほとんどがダイレクトメールだったが、一通だけ松浦から届いている。添付メールだったから重かったのだ。

メールを開いた。

『この間は、手伝ってもらってありがとう。いいのが撮れたから時間のある時に、見せるよ。とりあえず、この写真だけ送る。柚希ちゃんのパソコンのメールアドレスがわからないから、もしわかるなら送っておいて』

添付された画像は、柚希がモデルをした日に松浦が写したものだ。最後に柚希に騙されたように、頬にキスされた、あの写真だ。

驚いた自分の顔と柚希の綺麗な横顔。頬に、柚希に押し当てられたやわらかな唇の感触がよみがえった。

「瀬戸さん、あたし昔の恋人とセックスするより、あなたとキスしたいんだよ。また困らせるよね……」

持田の存在を知られたら、柚希にどう思われるのだろうか。汚いものでも見るような目で、見られるのだろうか。嫌われるのも軽蔑されるのも、自分の方だった。何年も前に終わったことだと思っていたけど、他のひとと抱き合った事実は変わらない。愛し合っていてはなく、快楽に引きずられてずるずる抱かれた事実が。

そしていまでも、心の中では持田と交わした性の交歓に未練を持っている。たった一本の電話で、自分のあさまじさが露呈した。

「ねえ瀬戸さん、それでも好きっていつてくれる……?」

碧はいつまでもパソコンの画面を眺めていた。

## 第二十七話

碧の部屋 あのお幸せに……（後書き）

重い。暗い。すいません。碧の最初の相手は、声だけとはいえ登場させる予定はありませんでした。が、二十五話くらいで終わる予定の話が思いがけず長くなってきて、その中で悪役がひとりも出てこないというのはどんなもんかな、と思つて、ちょっと入れてみました。たぶんここがお話の谷底……だといいな。まだ書き終わってないので、自分でもよくわかりません。

## 第二十八話

部室 瀬戸さん、痩せすぎじゃないの？

「碧さん、碧さん」

碧は名前を呼ばれて、目を覚ました。図書館で本を読んでいたら、眠り込んでしまっていたらしい。

顔を上げて辺りを見廻すと、柚希が心配そうに覗き込んでいた。

「瀬戸さん…？」

「碧さん、もうそろそろ五時ですよ。閉館になりますから」

「え？ 嘘？ そんな時間？ 起こしてもらって助かった。とりあえず出よ」

碧と柚希は荷物をまとめて図書館を出た。

「瀬戸さんも図書館、来てたんだ」

「区の図書館と交互に通ってるんです。大学の図書館の方が資料は見つけやすいんですね」

出入り口の脇で立ち止まっていると、退館する学生が脇を通り過ぎていく。中には柚希を見て声をかけたそうになっている者もいる。

柚希が着ている服のブランドが、大学で流行ったりしていることに、本人は気づいているのだろうか。

いまもちろちら見られているのに、まるで反応していない。

「居眠りなんて、珍しいですね。寝不足ですか」

「うん。最近なんかあんまり眠れなくて。そういえば、こないだ副

部長から写真のデータ、送ってもらったよ」

「写真？ なんの写真ですか？」

「あの…モデルしたときの最後に写した……」

キスの写真だとはいい難くて、口ごもる。

「瀬戸さんのパソコンのメルアドがわからないからって、こっちに送ってくれたの」

「どつでした？」

「フィルターかかってて、綺麗だった。副部長らしかったよ」  
「うーん、イメージできない……」  
「じゃあ、いまからうちに来る？ メモりにコピーしようか？」  
「いいんですか？ そういえば、碧さん大学の近くでしたよね」  
「うん、女子寮だし」  
「え？ 碧さん、女子寮だったんですか？」  
「うん。いつてなかったっけ？」  
「…………… すいません、やっぱり今日は行けません」  
急に歯切れの悪くなった柚希に、碧は首を傾げた。  
「時間ないの？」  
「時間はあるんですけど……………」  
寮にだれか会いたくないひとでもいるのだろうか。  
「碧さん、部室に行ってみませんか？ もう少し話したいし、松浦さんがもし来てたら見せてもらえるかもしれません」  
「うん、いいよ」  
部室に行ってみると、鍵がかかっていたので学生課に鍵を借りに寄った。部室には当たり前だが、だれもいなかった。  
「残念ですね」  
「夏休み中だし、そんなにタイミングよく会えないよ」  
柚希は夏の間少し痩せたように見える。顔が小さくなった。  
「まだ、バイトしてるの？」  
「土曜日だけ。あ、そういえば、バイト先で名画用の写真、六十枚以上撮れたんですよ」  
「ほんと？ 凄い。佐々木くん喜んだでしょ」  
「はい。最優秀選手だって褒められました。あそこのお客様たち、みんなノリがいいんです。学祭も自分たちの写真がちゃんと使われたか、見に行くなって息巻いてましたから」  
「うわー、最高」  
とりとめのない会話は愉快だった。ずっと、このまま時間が過ぎれば良いと思う。

ついこの間までは、キスしたいと思っていたけど、もう、このまま曖昧な関係でもいい。嫌われるくらいなら、柚希を独占できなくてもいい。他の誰と、旅行に行ってもかまわない。またこんな風に親しく会ってくれるなら、それだけで充分だ。

「……碧さん、いまでも、全部知りたいですか？」

唐突に、柚希は切り出した。

「知りたいけど、でももういい。あたしも、いえないことあるし……」

碧は窓の外に視線を移した。柚希を見ていたら、また気持ちが戻ってしまいそうだった。

「最初のひと以外に、まだだれかいるんですか？」

「な……なんで知ってるの？」

驚いて振り返ると、柚希は存外、穏やかに微笑んでいた。

「碧さんって、なんでも自分で喋ってますよ。最初のひとが最悪なひとだったんでしょ。浮気されたり、殴られたり……」

「……あ、そつか。亜衣ちゃん？」

「はい。ごめんなさい」

「うっん。そうだね。あたし、誰かに訊いてもらいたくなるから。こないだ、そのひとから電話がかかってきて、なんか落ち込んだの」

椅子に腰かけると、少し気持ちが落ち着いた。窓の外が暗くなってきた。黒い雲が空を覆い始めている。夕立が降りそうだった。早く帰った方がいいのだろうけど、柚希と離れがたくていい出せない。「結婚するんだって」

「……それで、落ち込んでたんですか？」

思いもよらない誤解をされたことに気がついて、碧はかぶりを振った。

「違うよ。結婚するからじゃなくて、あたし前に、そのひとのこと、好きじゃなくなってからも別れなかったから……」

頬杖を突いて部屋の壁を見あげる。大きなコルクボードに、部員

が写した写真が無造作に貼られていた。柚希が写した写真は、まだ一枚もない。

「もう二度と会いたくないって思ってた。いまでも本当にそう思ってる。でも、最後に抱かれに来ないかっていわれて、動揺したの。抱かれない気持ちもあったから。好きでもないし顔も見たくないひとに抱かれたらって変でしょ。だから、落ち込んだの」

碧は柚希の白い顔を見つめた。

「軽蔑してもいいよ」

急に、バタバタと大粒の雨の音がした。開けた窓から降り込みそうな勢いだったので、慌てて窓を閉めた。柚希がすぐそばにいる。

「碧さん、そんなことくらいで軽蔑なんてしませんよ」

「それだけじゃないんだよ。あたしがどんなことしてきたか……」  
全然わかってない。そう叫びそうになったのに、柚希は荒げた言葉を押し被せてきた。

「それでも、嫌いになったりできないんです」

柚希は碧をきつく抱きしめた。こんなに身体を密着するのは初めてだった。最初にキスしたときは唇だけを合わせる体制だったし、バイト先に向かう前に抱き寄せられたときは、あつという間だった。この間、頬にキスされたときも似たようなものだった。

さくらや他の女友達とふざけて接触する感触と、全然違う。本当にモデルみたいな身体なんだなあと思った。

「瀬戸さん、痩せすぎじゃないの？」

「夏だけです」

抱きしめ合ってるのが嬉しかった。体温が伝わってくるのも、鼓動が聞こえそうなのも幸せだった。こんな自分だと知っても、抱きしめてもらえるのが、夢のようだった。

「あたし、瀬戸さんが隠してる秘密について、いろいろ考えてた」  
柚希の肩に頬を乗せて、耳元に呟いた。

「整形してるのかなって、かなり真剣に予想してたんだ」

「整形？」

「だって、あんまり綺麗な顔だから、うさんくさいじゃない」  
「うさんくさいって……」

「だから、瀬戸さんのお母さんの登場で振り出しに戻っちゃった」  
「それであるとき、なんか様子がおかしかったんですね」

柚希は愉しそうに笑って、身体を離れた。雨はなかなか止みそうにない。

「碧さん、傘、持ってきてますか？」

「持っていない。瀬戸さんは？」

「持ってきてないんです。もう少し小雨になるまで、帰れないですね」

「そうだね。でもあたし、瀬戸さんにずっと会いたかったから、嫌じゃないよ」

柚希はほっとしたように頷いた。

「それで、私が隠していることがわからなくなったんですか？」

「心当たりはあと一つあるよ。これが外れたら、もう全然わからない」

「訊かせてもらえますか？」

「当たってたら、もう隠さないですよ」

「はい」

雨の音が、少し小さくなってきた。碧は言葉を選びながら尋ねる。

「亜衣ちゃんですよ」

「亜衣？」

柚希は不思議そうな顔をした。

「前に、亜衣ちゃんときあつてた？」

「……ああ、そういう意味なんです。つきあつたことはありません。でもなにもなかったわけじゃないんです。あんまり詳しく話するのは、亜衣の名誉にもかかわってくるので、これ以上は亜衣に訊いてください。亜衣が話したら私はかまいませんから」

「なんだか煙にまかれたような返答だった。でも、二人の間になにかしらの接触があつて、それを隠さないといってくれたことは、碧

を安心させた。亜衣のことを慮っている思慮深さも嬉しかった。

「当たり前だった？」

「それも隠してはいましたけど、外れです」

「うわゝ、もう全然わからないや。お手上げ」

「さつき、気がつきませんでした？」

「なにが？」

「あんなにくつついても、わからないものなんですね。困ったなあ」  
「？」

苦笑する柚希の言葉の意味がわからなくて、碧は疑問符を浮かべた顔になる。

ふと外を見ると雨が上がっていた。窓を開けると、雨上がりの匂いがした。思っていたより短い通り雨だった。

「碧さん」

「なに？」

「キスしてもいいですか？」

さつき、抱きしめられたときではなくて、どうしてこんなタイミングなんだろう。けれど、決して嫌ではないから碧は素直に頷いた。  
「うん。どうぞ」

柚希が唇を合わせてきた。抱きしめ合いながら、深く口づけた。柚希の両手が碧の耳を大切そうに包んでいた。

キスがこんなに感慨深い行為だと、碧は柚希に教えられた。あれからずっと、こんなキスをしたかった。けれど、欲しかったのはキスだけではなく、求められる気持ちも欲しかったのだ。

舌を絡ませる。唾液を交換するような激しいキスに、情愛を掻き立てられた。

「…んっ」

吐息が口唇の隙間からこぼれた。唇を離れたとき、唇が濡れていたのが、妙に恥ずかしかった。

「碧さん……」

柚希が強く抱きしめてきた。苦しくなるくらい抱きしめられて、

それでも碧は泣きたくなるほど嬉しかった。

「……私、碧さんじゃないと、駄目みたいですよ」

いままでだれからも、いわれたことがない言葉だった。抱きしめ合って幸せなのに、お互い肩越しに違う景色を見ているのが、なぜか寂しいと思った。

「なんで、そんなこというの。だって、あたし、全然そんなんじゃないのに……」

碧は気持ちをようやく言葉にした。

「こんなこという資格ないけど、でも、大好き……」

## 第二十九話

### 部室 フェルメールブルー

大学は夏休みが終わり、後期が始まった。

十月にもなると、昼間はまだ暑さも残っているが、朝晩はずいぶん肌寒くなる。

写真部の部室は、日に日に、にぎわってきた。

この日は、一、二年を中心に名画の進行状態を確認するために集まっていた。名画制作のために写真部に入部する者もいるので、以前に比べると人数は増えた。被写体になっているうちに興味を覚えて……といういきさつだ。

碧や柚希たちは夏休み中も写しては佐々木のパソコンに送信していたが、まだ枚数が全然足りていない。

やはり、どう考えても二千枚は無理がある。自分の写真がどこにあるか探せなければ、撮影に協力してくれたひとにも気の毒だ、と碧を筆頭にごね倒して千枚弱で落ち着いた。それでもまだ、先は遠かった。

「いままでに集まった数は？」

松浦の問いかけに、佐々木がパソコンの画面を確認して答える。

「百八十くらいです」

「色味はどう？」

「柚希ちゃん頑張ってくれたんで、からし色はかなり埋まっています。白もまずまず。黒もまだ足りないけどある程度来てます。ぜんぜん足りてないのが、肌色とフェルメールブルーですね。特に、フェルメールブルーは一枚もないんですよ」

「あのさあ、佐々木くん、そのフェルメールブルーって、どんなブルーなの？ さっぱりわかんないんだけど」

からし色も黄土色も一緒だといいい切った碧が、唇をとがらせる。メールで佐々木からフェルメールブルーで写すように要請されたが、

色味がわからなければ、写しようがない。これは決して、碧ひとりが色音痴というわけではなく、一枚も佐々木の元に写真が届いてないのだから、他の部員もわかっていないのだ。

「そうそう、フェルメールブルーって普通の青色じゃ駄目なの？」  
「さくらもこの行事には参加するので、身を乗り出して尋ねる。」

「フェルメールブルーってのは、わかりやすくいうとウルトラマリ  
ンだ」

「…ウルトラマン？」

「マリンだよ。マリンマリンマリンマリン」

佐々木ががり立てるのを、松浦はまああと、肩を押さえた。

「佐々木、他にもっとわかりやすい説明できない？ 美大生じゃないんだから、ウルトラマリンじゃわかりにくいって。群青色に近いんだろうけど……」

「うーん、あ、小田急六万形！ あの電車の色がフェルメールブルーだ」

「……なにそれ」

碧は軽蔑するような、冷たい視線を佐々木に送った。さくらも松浦も頭を抱えている。柚希は呆気にとられていた。

「あの小田急六万は最高だよな。高速車両でもないのに未来を彷彿とさせるフォルム。流れるようなライン……」

うつとり呟き始める佐々木を松浦が制止にかかる。

「あのな佐々木、悪いが写真部が全員、鉄道マニアの撮り鉄ってわけじゃないから、お前の説明は、ますますより一層わからない。とにかく、群青色でいいな？」

佐々木は不承不承、頷いた。多少、趣味嗜好が偏っているが、これで優秀な男だから、指揮自体は安心して任せられる。この名画の軸でもある『青いターバンの少女』の青いターバンの色なのだから、こだわりたくなるのも、わからないではないのだが。

「そういえば、柚希ちゃんの写真、うまく工夫してくれてたよな。からし色の背景に、全員からし色の布かなんか被ったり巻いたりし

てるみたいなの？」

佐々木が思い出して柚希から届いた写真の一枚を開いた。

「背景はバイト先の壁の色なんですけど、服装を合わせるのは無理だったんで、同じような色のストールを渡して自由に着けてもらっただけです」

部員が佐々木のパソコンを覗き込んで頷く。

「ほんとだ。そっか、大きめのストール用意していたらよかったんだ。黒い服の子見つけてお願いしたり、大変だったんだよね」

さくらは感心して「瀬戸さん、賢いじゃん」としきりに褒めたたえた。

その日の写真部の活動はそれで終わりだった。松浦の解散の声に、部室からひとが少なくなっていく。

碧はこのあと、松浦に写真を渡す予定だったので残ることを、さくらに伝えていた。さくらは碧に手を振って、先に帰った。

「柚希ちゃんも見ていったら？ きみがモデルした写真だし」

松浦が帰りかけている柚希を引き止めた。

「いいんですか？」

柚希は碧の方を向いて確認する。

「いいけど、がっかりしないでよ。本当に人物は苦手だから」

碧は鞆から現像した写真を出して、机の上に拡げた。写真はすべて、柚希が松浦のモデルをしたときのものだ。

「へー、陰影をつけたんだ。そういえば、ライト消してたっけ」

「はい。なんとなく……」

松浦が写した写真は、露出を上げて幻想的な雰囲気だった。壁の汚れも、ぼけ方が強いせいで、効果的に使われている。

けれど碧は柚希を自然に近い明るさで撮影した。撮影現場で、柚希のことを妖精のようだと思ったのに、松浦の方がよほど、それらしく写している。

「これ、面白いですね」

柚希が一枚の写真を拾い上げた。正面ではなく、ほとんど後ろか

ら写した写真だ。休憩しているときだったので、気怠そうな横顔をしている。柚希が面白いといったのは、オーガンジーを留めた洗濯バサミが写っているからだった。

「舞台裏ってシチュエーション、ちょっと好きなんだ」

ライトのスタンドも入っているが、それも含めて碧は気に入っていた。けれど、こうした写真が、正式な作品にはなれないのもわかっていった。

「うん、碧ちゃんらしいな」

そのあと、カメラの話や名画の話に興じて盛り上がり、写真の整理をして帰るといふ松浦を残して、碧と柚希は部室をあとにした。

第二十九話

部室 フェルメールブルー（後書き）

第三十話 食事 なんかちょっと、デートみたい

部室を出てわずかな間、碧は柚希の隣を歩くだけで落ち着かない気持ちだった。部室で夕立をやりすぎした日から、今日まで会ってなかった。柚希が九月の後半、京都に行っていたからだ。

「京都、どうだった？」

「裁判員制度の講演会は思ったより、大学生が多かったです」

「講演会のあと、京都に残ってなにしてたの？ 法学部の子はほとんど日帰りだったって聞いたけど」

「写真、撮ってました。学祭の個人写真がまだなにもなかったので」

「へー、京都の写真なんだ。そういえば、瀬戸さんの練習じゃない写真って、見たことないな」

「まだ、手探りですよ。愉しいけど難しくくて」

「性能を全部覚えなくてもいいんじゃないの？ 撮りたいものがないとつきりしたら、そのための性能を勉強すれば他は知らなくてもいいよ。その点、佐々木くんはつきりしてるよね。電車が撮りたいって」

「そういえば、そうですね」

佐々木の写す写真は百分の一秒、千分の一秒のシャッタースピードを求められる世界だった。シャッタースピードに関する知識と技術だけは、他の部員の追隨を許さない。

「それより、フェルメールブルーの写真、どうしよう。背景にできそうな色の壁なんかいいし、色画用紙買って写真部の壁に貼ろうかな」

「写真部の部室に来てくれて頼むんですか？ 来てくれますか？」

「うーん、やってみないとわかんないけど、とりあえず試してみ、駄目だったらそれから考えようかなって。瀬戸さん、一緒にしない？」

碧は悩むより先に身体を動かすタイプだった。

「はい。じゃあ、いまから買いに行きますか？」

「ウルトラママンの色画用紙とストール？」

「ウルトラマリンだったと思いますけど……」

「そうそう、それ」

「時間、大丈夫ですか？」

「うん」

碧と柚希は駅前に向かって歩き始めた。

画材店で色画用紙はすぐに見つかった。店のひとにウルトラマリ  
ンの色画用紙を見せてもらい、これがフェルメールブルーなんだ、  
と呟いた碧に、店員は口を挟んできた。

「フェルメールブルーなら、こっちのほうに近いですよ」

見せてもらった色画用紙は、ウルトラマリンとは少し違う。

「群青色ってどれですか？」

出してもらった画用紙は、もっと色味が違った。

「青色のくせに生意気だなあ。ややこしすぎる」

「碧さんの名前も青色じゃないですか」

柚希がくすくす笑っていた。とりあえず、フェルメールブルーに  
一番近いといわれた画用紙を何枚か購入した。ストールは、無地で  
色違いを多く扱う衣料品店で購入することができた。

時間が遅くなったので、イタリアンの店で、一緒に夕食を済ませ  
た。

この日、寮は夕食のない日だったので、ちょうどよかった。

「なんかちよっと、デートみたい」

ピザを頬張りながら、碧は無邪気な発言をした。

「デートじゃないんですか？」

柚希は不満そうな顔を試みせる。

「女同士でも、デートっていうのかな？」

疑問は単純だけど奥深かった。碧も柚希も答えをすぐには、見つ

けられなかった。

「……………碧さん、ありがとうございました」  
「なにが？」

「写真。いままで自分が写されるの嫌いだったんですけど、碧さんに写してもらって嬉しかった」

「下手なの？」

「下手じゃないですよ。私、もともと碧さんのファンだから」

「冗談でも嬉しいけどさ、妊婦になってくれたら、もっといい写真撮るよ」

「私が妊婦になるとしたら、誰かと結婚するってことですよ。碧さんはそれが望みですか？」

「あ…あの、ごめん。そうじゃなくて……………」

いわれて初めて気がついた。自分たちはいま、異常な関係なのだ。柚希のようなひとが、異性とつきあって結婚すれば、だれもが羨ましがる夫婦になるだろう。綺麗で控えめで謙虚なひとだから、どんな男も誠意をもって愛情をそそぐに違いない。

柚希は幸せな未来を掴めるひとなのだ。

男に諦めと失望を抱いている自分とは違うのだ。

碧は、自分の気持ちがかわいそうだと思った。

いまだけでいいから、そばにいたかった。けれど本当は利己的な考えに、飲み込まれそうだった。

ずっと一緒にいられたらいいのにと、願ってしまう気持ちを、碧はどうしても払拭できそうになかった。

第三十話 食事 なんがちよつと、デートみたい(後書き)

なんだかんと言ってるうちに、三十話まで来ました。色々、予定と違ってきてますが、プロット無しで書いてるので、なにをもって予定と思っていたのか、自分でも疑問です(笑) ざっくりとした予定では、四十二〜四十五くらいで終わるかな、と一応考えてますが、話が進むと登場人物たちが勝手に動き回ることもあるので(笑)あくまでたぶん、です。

第三十一話 学食 どうぞ、どうぞ。もう好きにして

ドイツ語が休講になったので、碧たちは学生食堂で長い昼休みを過ごしていた。

喫茶室に移動してもよかったのだが、昼食時を過ぎて、学生が減ってきたのでそのまま留まったのだ。

碧とさくらを含めて文学部のが五人、経済学部の友人が四人と法学部が三人である。学食の一角はまるで、二年の女子会のようになっていた。

お湯のようなお茶をポットからプラスチックの湯飲みにそそいだ。「もし、どんな願いでも一つだけ叶うとしたら、なにを叶えてもらいたい?」

文学部の佳奈が、ふと、いい出した。

「宝くじ、一等前後賞、三億円」

さくらが色気もそっけもない願いを口にした。

「わかるけど、もっと夢のある願いはないの? サラリーマンと同じ願望ってどうよ」

佳奈は呆れるようなため息をついた。

「超イケメンの彼氏ほしい」

経済学部の友人の願いは凡庸な願いだが、そのあとは盛り上がった。アイドルだったら誰が理想だとか、理学部のだれとだれがつきあってるとか、テニス部のだれがカッコイイとか、話題は尽きない。

一通り話で盛り上がると、さくらが鞆から雑誌を取り出した。

「ねえねえ、この髪型、気になってるんだけど、どうやってるのかわかる?」

いまドラマで話題の女優が記事になっていた。

「ツインテールだけど、分け目は斜めみたいだね。部分的に編み込みしてる感じ。最後はどうなってるのかな?」

「着け毛じゃないの？」

集まった女の子は、複雑な髪型が苦手のように、興味はあるがやり方がわからなかった。

味のしないお茶を喉に流し込みながら首を捻っていると、柚希と亜衣がそばを通りかかった。

「こんにちは。こんなところで、二年の女子会ですか？」

亜衣が文学部の上級生に小さく会釈をした。

「亜衣ちゃん、この髪型、どうしたらできるかわかる？」

さくらに尋ねられて、亜衣は首を振った。

「全然わかりません。あ、柚希はこういうの得意じゃない？」

雑誌を見た柚希が、しばらく眺めたあと、ああ、と頷いた。

「左右から編み込めばできますよ。最後の毛先は内側に入れて、細いゴムなら目立ちませんし」

「訊いただけじゃ、わかんないな。やってみせて。だれの髪ならできる？」

「ある程度長さがあればできますよ。小畑さんでししょうか？」

さくらは首を振った。

「わたしがしてもらったら見られないじゃん。碧の頭はどう？」

「できますよ」

「じゃあ、これでやってみて」

「ちよつとさくら、これってなんなのよ」

碧がむくれても意に介さず、さくらは柚希の手にブラシを持たせた。

「じゃあ碧さん、髪、お借りしますね。痛かったらいつてください」

「どうぞ、どうぞ。もう好きにして」

安っぽい学食の椅子から動けなくなった碧は、自分と柚希の周りをぐるりと囲まれるのを見て、見世物にでもなった気分だった。

駅前で夕食を一緒にしたときから、柚希とはなんとなく気まずかった。妊婦になってくれたらいい写真を撮る、といった内容の話が、

気に入らないのだとはわかつている。好きな相手から、結婚を推奨するようなことを告げられれば、面白くないのは当然だけど、それほど意味のある発言ではなかったのだ。

あときはただ、写真のモデルに対する軽い気持ちしかなかった。そもそも柚希というひとは、あまり感情をおもてに出さない。端然とした涼しい態度は、端から見れば心地いいが、自分が原因となるとそんなことはいってられない。

腹を立てているならば、はっきりそういつて欲しかった。雰囲気を探るような能力はないのだから。

こぼれそうになるため息を隠しておとなしくしていると、柚希の指が髪を撫でた。碧は一瞬、背筋にざわめきを覚えた。

ブラシで髪をとかされていく。

髪にブラシが滑っているだけなのに、変な気持ちだった。

「へー、先に後ろの髪を括っておくんだ」

さくらが熱心に覗き込んで訊く。

「あとではずしますけど、編み込むときに邪魔になるから、よけておくとやりやすいんです」

柚希はさくらからゴムを受け取って、説明通りに後ろの髪を括った。

碧の左側に柚希が立ち位置を変えた。斜めに分けた髪を編み込んでいく。

柚希の身体が碧に覆いかぶさる体制になって、碧は身体を震わせた。

「痛かったですか？」

「うっん、大丈夫……」

「痛かったら、いつてくださいね」

「うん……」

地肌に指が届くだけで、胸が高鳴った。耳に柚希の腕がかすめるだけで、息が震えそうになった。

どうしてこんなに気持ちいいと思ってしまうのだろう。何度かキ

スだっただけのこともあるのに。碧は震えそうな膝をきつく閉じ合せた。

さくらからゴムを受け取って、耳の位置で髪を括られた。すべての作業が終わったようだった。

碧はこっそり息を吐いた。

「すごい、なんか簡単そうにするから、見てたらできそうな気がしてきた。碧って、ツインテールになると一気に幼くなるね」

さくらたちが興奮した声で、はしゃいでいる。碧はそんな歓声を、頭の遠くで訊いている気がした。

袖希に髪を触られている間、自分はもしかしたら、性的な快感を覚えていたのかもしれない。いたたまれない気持ちになった。

髪型の話から離れて、別の話で盛り上がりつつも、碧は訊いてる振りをするのが精一杯だった。みんなの会話の内容が、少しも頭に入っていない。

「ねえ、碧はどうなの？」

佳奈に問いかけられて、弾かれたように視線を辺りにさまよわせた。

「なんでも一つだけ願いが叶うとしたら、だよ」

いつの間にか、話題が最初に戻っていた。

ぼんやりしていたのも、不自然な態度とは思われてないようだ。

ほっとして、言葉を探した。

「え〜っと、男になりたいかな」

「なんで？」

「女でいたいことは、もう残ってないから」

「ええ〜、結婚したくないの？」

経済学部のひとりが不思議そうに身を乗り出した。

「碧は結婚したくないんだよね」

さくらが碧の髪の毛先をめくったり触ったりして、頷いている。

やり方を見ていたのに、まだ興味があるようだ。

さくらに髪を触られても、なにも感じないのに、袖希が触るだけ

で意識してしまう。

恋を感じるって、こういうことかもしれない。

柚希に触れられた髪を、夜には、ほどかなければならないのが、寂しかった。

「柚希、碧先輩、男になりたいって」

亜衣は含みのある笑いを浮かべて、柚希の肩に手を置いた。

「困ったもんだの大問題だね」

「……………」

「どうすんの？」

「こつちが訊きたいよ」

「あの薬、いまは飲んでないんでしょ」

「うん……………」

柚希と亜衣が顔を見合わせながら、短い言葉をぼそぼそ交わしていた。何度見ても、絵になる二人だ。なにかもわかり合っている様子が、伝わってくる。

柚希が、亜衣となにもなかったわけではない、と正直に告白してくれたので、一時のような切実な焦燥はないけれど、二人の呼吸がぴったりと合わさっているのを目の当たりにすると、やはり胸が痛んだ。

薬ってなんだろう。風邪でも引いているのだろうか。そんな風には見えないけれど。二人の会話に入っていけなくて、碧は視線を逸らした。

第三十一話

学食

ヤシキヤ

ヤシキヤ。

まじ好おてて

(後書き)

### 第三十二話

### さくらの部屋 もつたいなうい

「もー、信じられない」

さくらはクッションに八つ当たりしながら、碧に不満を吐露していた。

部屋まで来てくれといわれて来てみれば、顔を真っ赤にしたさくらに力任せに抱きつかれた。扉に背中をしたたかぶつけて、文句のひとつもいおうとした矢先、彼氏から別れ話を告げられたのだと涙ながらに叫ばれた。

「そりゃ、高校卒業してあんまり会えなくなってたけど、でも、そんなの、大丈夫だって思ってたの。いままで喧嘩もしなかったし。なのに、なのに……」

さくらがティッシュで涙や鼻水を拭きながら、嗚咽をこらえていた。碧はさくらの背中を撫でながら、ただ黙って訊いていた。

高校時代からつきあっていた恋人が、遠距離恋愛に音を上げたのだ。

身近にいる可愛い女の子に目がいくことは、よくあることだ。けれどさくらは、自分たちは大丈夫だと思っていたのだ。

さくらの恋人は家から別の大学に通っていたが、M大とは逆方向だった。

さくらも碧と実家までの距離は似たようなものだ。二時間くらいだから、もつと会おうと思えば会えたけど、大学のレポートやつきあいで忙しかった。時間を作っても、今度は相手の都合が悪くて、なかなか会えなかった。経緯には理解できるけど、さくらだって、どんなことをしても会いたいという情熱が薄れていたのだ。

だいたい、浮気する気がなくても、数合わせにしても、しょっちゅう合コンに参加していたのだから、彼氏ばかりを責められない。

「碧って、別れるとき、泣いたことないの？」

「うん。そういえば、ないなあ」  
「なんで？」

少し落ち着いてきたのか、涙は止まったようだ。

「悲しくなかったのかも」

「どうして？」

「さあ？ よくわかんない」

「好きじゃなかった？」

「う…ん…？」

持田以外のひとには、恨みはなかった。好きだったはずだ。優しくて、穏やかで、誠実で、嫌いになる理由など、なにもなかった。

「好きだったよ」

「嘘。だって碧、別れ話にショックも受けてなかったじゃない。大  
学きからつきあつたひと、全員知ってるけど」

「そうだった…？」

「碧が好きになる人って、結婚したら絶対いい夫、いいパパになり  
そうなひとばかりだったよね。なのに、結婚願望がないって、矛  
盾してる。わたしは、彼氏と結婚したらどうなるんだろって、よ  
く想像してたもん。碧って、好きだったんじゃないかって、好きになれ  
たらいいのって気持ちだったんじゃないの？」

さくらの指摘はたぶん間違っていない。碧は口を噤んだ。

「碧って、バツイチみたいな精神状態なのかもね」

「うん…。そうかも」

持田との交流は、碧の心をすり減らした。恋愛は懲りたといいな  
がら、相手が悪かったただけだと思いたかった。けれど、他のひとと  
つきあってみても、うまくはいかない。失恋で臆病になってしまっ  
た。いつか裏切られると用心してるから、いつまでも信じられな  
かった。

相手に非があるのではなく、自分の問題だった。

「ねえ碧、なんで男って浮気するの？」

「男だから浮気するんじゃない」

質問の答えになつてない、と自分でも思う。女だつて浮気っぽいひとはいるだろう。

でも、碧の知る限り、男は誘惑に弱い。女は一年近くかけてひとりしか子どもを産めないが、男は一度に何人でも子どもを作ることができる。

男が浮気をするのは、本能かもしれない。

「あたし、結婚したら、絶対、夫の浮気とか受け入れられないと思う。だから、結婚なんかしたくない」

「持田さんだっけ？ はじめてのひと。そんなに好きだった？」

「うん、最初はね。でも、浮気されてからはもう、なにをいわれても疑心暗鬼だった。言葉の全部が嘘に聞こえたし、信じられなかった。好きだったのって、最初の半年くらいだったかも」

「最初に浮気されたとき、なんで別れなかったの？」

自分の辛さと重なる碧の経験が、いまのさくらには慰めになるのか、自分の話を訊いてもらいたい気持ちより、碧の破れた恋の体験を教えて欲しい気持ちの方が大きいようだ。

「別れるつもりだったけど、嘘つかれたり、謝られたり、ほだされたり、逆切れされたり、許したりで一年半くらい。我ながら、馬鹿だったなあつて思つてるよ」

「うん。それは馬鹿だわ。わたしは絶対別れるから」

「そのほうがいいよ。信じられなかったら、いつかは別れるんだし」  
「そうだね」

女子寮じゃなかったら、ビールでも飲みながら、元彼の愚痴を一晩中でも訊いてあげたかったが、禁酒禁煙が規則の寮ではそれもできない。

「長いよね」

「え？」

「碧がだれともつきあつてないの。何人かは申し込んできてたでしょ」

「うん。断つたよ」

「合コンにもいかないし。好きなひとでもいるの？」

「……………」

答えようがなくて、口を噤んだ。けれどその態度で、さくらは自分の予想が当たっていると確信したようだ。

「いるんだ」

「だから…いるなんて、いつてないじゃん」

「嘘つけない性格だよ、碧って。で、だれなの？」

さくらの失恋を慰めていたはずなのに、どうして自分ばかりが質問されているのだろう。ひとの恋愛話を訊いているうちに気持ち紛らわされているのだろうけど、いい迷惑だ。まして、相手が同性となれば、白状もできないのだから。

黙り込んだ碧に、さくらはあっさりいった。

「あのさ、間違ってたら申し訳ないんだけど、瀬戸さんだったりする？」

碧は飛び上がりそうになった。視線を逸らす程度では逃げられそうになかったので、部屋から出ようと立ち上がる。

「あやし、そろそろ部屋に戻らないと」

「こら、逃げないの」

腕を掴まれて引き戻された。しりもちをついた碧を、さくらは背中から羽交い絞めにした。

「やっぱりそうか。ふーん」

「もー、違っちゃって」

もがいて逃げ出そうと試みるが、後ろから両方の肩を捕まえられているので、抜け出せない。

「あのね、簡単に割り出せるよ。好きなひとがいるんですよ。だれかはいえないんですよ。碧ってなんでも訊かれたら簡単に答えちゃうのに、いえないってことは、いえない相手なんですよ」

さくらは理路整然と述べたてる。

「碧はこのところ、大学と寮を往復してるだけでしょ。いえないような相手に大学の関係者となると、彼女持ちか教諭と不倫だけど、

碧の性格でそれはないし、そうすると、もう、限られてくるんだよね。副部長か瀬戸さんかどっちかしかあり得ないの。最近、友達以外でよく会ってるの、その二人だけだし。でも、副部長だったら、もうとっくに決着ついてるはず。で、残りはひとりだけ」

ぐうの音も出ないというのは、こういう時に使う言葉だと碧は身をもって知った。

「……………まいりました」

碧は逃げることを諦めて、力を抜いた。そういえば、さくらは心理学が得意科目だった。

は「っとため息をついた顎を、立てた両ひざに乗せて、碧は上目づかにさくらを見た。

「さくらの失恋なんか可愛いもんだよ」

「それはそうかも。なんか怒ってたのも、悲しかったのも、ぶっ飛んじゃったし。いつから？」

「よくわかんない。いつのまにか」

「瀬戸さんのほうはどうなの？」

「……………たぶん、ある程度は……………」

碧は顔から火が出そうだった。律儀に質問に答える必要はないのだからうけど、いまの自分の様子から、さくらにはあっさり看破されそうなので、同じかもしれない。

「うわゝ、あんなに可愛いのに女に走っちゃうんだ。もったいない」

最初の感想がそれなのか、碧は脱力しそうになった。

本当にこの友人は口が悪い。口だけではなくて、性格も悪かったのだと、いまになって気がついた。

「人間あれだけ綺麗で性格いいと、どっか欠陥あるんだね。今年の夏は暑かったし、脳が変になっちゃったのかな」

「……………さくら、面白がってるんですよ」

「それはもう、心から」

理不尽だ。呼び出しに応じて来て、泣いたり怒ったりする友人を

慰めていたのに、この顛末は何事だろう。

「碧がコイバナで恥ずかしがるなんて、すごい新鮮」

「なによ、それ」

「自覚ないの？ 今日の晩ごはん、なに食べた？ って訊いても、昨日の夜、彼氏とエッチした？ って訊いても、碧は同じ顔色でありのまま答えるんだよ」

「……………」

それではまるで、馬鹿みたいではないか。けれど、まったく身に覚えがないわけでもないの、黙り込んだ。

「あれ？ そういえば、瀬戸さんって……………」

「なに？」

「…………ううん、なんでもない」

さくらは少し、引っかかることを口にしてやめた。小首を傾げながらか考える様子だったが、気を取り直して碧に身を乗り出した。

「女同士って好き合ったら、なんかイベントみたいなことあるの？」

「さあ？ 特になにもない気がするけど」

「じゃあ、友情と愛情の区別はどうなの？」

「さあ……………」

「頼りないなあ。男女と変わらない感覚かどうかもわかんないの？」

「え？ じゃあ、あたしって、瀬戸さんを抱きたいか思ってるのかな？」

驚いたように訊いてくる碧に、さくらは拳を握りしめた。

「そんなこと、わたしに訊いてどうすんのよー！」

さくらの雄叫びが、狭い部屋に轟いた。

第三十二話

さくらの部屋

もったいなうい

(後書き)

### 第三十三話

### キャンパス 最後まではしてませんか

秋は風が気持ちいい。

碧は、珍しくひとりで、キャンパスの木陰でぼんやりと午後を過ごしていた。厳密に言えば、さくらから逃げてきたのだ。

まずいことがばれてしまった。刑事のように追及してくるのを、躲すこともごまかすことも難しいので、まとまった自由時間のある時は、さくらと二人にならないようにしていた。同じ寮で暮らしていれば、それも無駄な抵抗だけ。

相手が柚希でなければ、恋の対象が同性と知られても、こんなに隠したいと思わなかったかもしれない。ついに男に愛想を尽かせて女に走ったかといわれても、笑って頷ける程度の問題だ。

だけど、なんだか後ろめたいのだ。

柚希を汚してしまったような気分で心苦しい。

「碧先輩」

「きゃ」

急に声をかけられて、一瞬さくらかと思った。

「なんだ、亜衣ちゃんか」

「だれだと思っただんですか？」

「べつに…びっくりしたただだよ」

「隣に座ってもいいですか？」

「いいよ。そういうえば、ひとりでいるの、珍しいね」

亜衣は友好的な性格なので、友人が多かった。

「それはこっちの台詞ですよ。碧先輩、人気者だからいつも囲まれてるし、近づきにくくて」

「はあ？」

亜衣におかしなことを指摘されて、碧は困惑した。確かによく友人と群れて過ごしているけど、人気があるからではない。自分は極

めて平凡な女子大学生だ。

「碧先輩、柚希と喧嘩したんですか？」

「へ？ なんで？ 喧嘩なんかしてないよ」

「この間、学食で碧先輩、柚希のこと、見ないようにしてたみたいだから」

「あれは……」

見ないようにしていたわけではなく、髪に触れられて、ドキドキしてしかたがなかったから、視線を合わせられなかったのだ。

「……気のせいじゃない？」

「そうですね。そういえば、写真部の名画、どうなったんですか？」

「ああ、あれね、部室に色画用紙貼って、だれか来てもらえたら写せるんだけど、もう頼めるひとは声かけて写しちゃったし、頼めそうな人が見つからないんだ。学生課の先生にまで声かけたんだよ」

話題が変わったので、碧はほっとした。写真部のことなら話はしやすい。

「まだ、足りないんですか？」

「全然。半分もいってないよ。今年、四年が多いし、就活で苦戦してるし、それを見る三年も気持ちが悪そうに行っちゃってるみたい。おまけに、名画の評判がいいからって、展示場所が部室からエントラスホールになっちゃって、余計に大変なの」

まともに動いてくれていた三年が松浦ひとりなので、必要以上に焦っているのもあるのだろうけれど、状況が厳しいことは事実だった。

「うわ、大変ですね」

「でしょ」

「うちのブログでよかったら、協力しましょうか？」

「前にあたし、コメントで書かせてもらったよ」

「コメントだと読まない人もいるでしょ。もっと正式に、日時と場所と目的とか去年のダビンチの写真も載せて、協力と参加を呼びかけるんですよ。学祭の日時も明記して、自分の写真を探しに来てく

ださいって」

亜衣の提案は素直にありがたかった。『あいあいのあいある日常』は大学と学部を公表しているの、M大のみならず、近隣の大学生も、最近よく見ているのだ。

「うん、それだったら、来てもらえそうな気がする」  
「でしょ」

「うんうん。あたし、今日寮に帰ったらすぐ、去年のダビンチの写真、メールで送るから」

「はい。あ、そうだ。碧先輩、写真撮らせてもらってブログに載せてもいいですか？ 撮影スタッフが女の子だってわかる方が、安心するひとも多いと思うから」

「いいよ」

亜衣は携帯を取り出して、碧の顔写真を撮った。

「碧先輩、いつも土日はどうしてるんですか？」

「なにもなかったら、実家に帰ってるかな。二時間ちょっとで帰れるから」

「今度の土日を撮影の日に指定しても大丈夫ですか？」

「うん、もちろん」

「柚希も一緒ですよね」

「うん、瀬戸さんが大丈夫だったら」

「あ、そうだ、柚希で思い出した。碧先輩」

「なに？」

「以前、一緒に飲んだとき、わたし、SM嫌いなんですっていったじゃないですか」

さわやかな秋のそよ風の中で、突然、淫猥な話題になったので、碧はびっくりした。青空の下でするような話でもないはずだけれど、亜衣はかまわず言葉を続けた。

「あれって、自分のせいなんですよ。わたし、初めてのとき、強姦しちゃったんです」

「ええッ？」

碧はびっくりして思わず声を上げてしまった。慌てて自分の口をふさいで辺りを見廻す。幸い、辺りに会話を訊いたひとはいないようだった。

「友情をかざせば絶対断れないだろうなってわかってたから、無理やり引きずり込もうと思つて。その相手が柚希なんです」

「……………」

あんまり淡々と告げられて、碧は言葉を失った。

「でも、最後まではしてませんから。途中までですし」

女同士の性行為で、最後と途中の区別がなんなのか碧にはわからなくて、思考が混乱した。いまこのタイミングで訊いていいかどうか判断ができなくて、つい黙り込んでしまう。

「碧先輩、柚希の正体がなんであつても……………たとえば、宇宙人だとしても、見捨てないであげてくださいね」

亜衣は携帯の時計を見た。そろそろ教室に向かう時間なのだ。謎のような言葉を残して、亜衣は芝生の上から立ち上がった。

「強姦つて……………宇宙人つて……………」

残された碧は呆然と呟いた。

空がやけに青い、さわやかな秋の午後だった。

第三十三話

キャンパス 最後まではしてませんか(後書き)

### 第三十四話

#### 碧の部屋 脳の糖分足りてた？

寮の部屋で、碧は亜衣のブログを見つめていた。

早速、昼間に約束した名画の記事を載せてくれている。次の土日、夕方十五時から十七時までには写真部の部室で撮影を行いますので…と丁寧な記事だった。正門から部室までの地図まであったのには驚いた。

記事を載せてくれたことに対する感謝のコメントを打って送信する。

撮影スタッフはマイマイの靴下さんとユズさんです、とハンドルネームで紹介されていた。柚希の顔写真も載っているので、柚希にも話が伝わっているのだろう。

碧はパソコンの電源を落とした。

いまのところ、さくらの襲撃はない。案外、これ以上の詮索はしてこないのかもしれない。いろいろ詳しく訊かれても、碧自身、まだ混乱している状態だし、説明もできないのだ。さくらは鋭いので、そういうところを察している可能性もある。そうであって欲しい。

メールか電話で柚希に連絡を取るべきだろう。週末のことを、話しておいた方がいい。話が込み入っているので、メールより電話の方が話しやすい。

携帯電話を手にして考え込んだ。この時間に電話しても、大丈夫だろうか。入浴中ではないだろうか。食事中ではないだろうか。

たかが電話ひとつに、なにをこんなに落ち着かない気持ちになっているのだろうか。いままで、こんな些細なことで相手を気遣ったことがないので、自分でも戸惑う。間が悪ければ、留守番電話に切り替わるだけなのに。

好きだと告げられて、抱きしめられて、キスをした。すごく嬉しかったのに、どんどん自信がなくなっていく。

自分のどこに、袖希が惹かれてくれているのか、まったくわからない。綺麗でもなければ、賢くもないし清らかでもない、どこにもいる平凡な同性に、どうして、と疑問ばかりが募る。

それこそ、さくらが冗談交じりでいった、今年の夏は暑かったから頭が変になった、という理由が、一番説得力があるような気がする。てくるのだ。

次に会ったときは、別れを告げられるのではないかと思うと、会いたくてしかたがないのに、会うのも電話をするのも怖かった。

一緒に夕食を食べたとき以来、ぎこちない状態のままにいるのも、不安になる要因のひとつだった。だからといって、改めて謝罪するような内容でもない気がする。

手に持っていた携帯が、ふいに振動した。授業の前にマナーモードにして、そのままになっていたのだ。

『碧さん、こんばんは。いま、大丈夫ですか？』

通話ボタンを押すと、袖希の声が届いた。いつもと変わらない声音に、碧は安堵した。

「うん、あたしも電話しようと思ってたから」

『今日、亜衣から名画のこと提案されて、いまブログ見ました』

「亜衣ちゃん、すごくちゃんと載せてくれてるよね」

『何人が来てくれるといいですね』

「そうだね。去年は最後、百枚近く足りなくて、部員で撮り合いながら埋めたから」

『そうだったんですか。大変だったんですね。それから、さつき気がついたんですけど、青いターバンのフェルメールブルー、ネットで見たら、光が当たってる部分は白っぽいですよ。水色みたいな色なんで、それも用意した方がいいんじゃないですか？』

「ほんと？　じゃあ、あたし、土曜日、大学行く前に買っとくから」

『私もいきます。駅前で待ち合わせしませんか』

「うん。一時でいい？」

『はい』

普通に用事の会話をしている間は、会話は滑らかに繋がる。なのに、電話の要件が終わると、途端に緊張した。

『……碧さん?』

「ごめん」

『え?』

「さくらにバレちゃった」

『バレたって、なにがですか?』

「あたしが瀬戸さんのこと、好きだったこと……」

『ああ、なんだ。よかった』

「よかったって、なんで?」

『だって、碧さんに相手がいるってわかったら、小畑さん、合コンに誘ったりしないでしょ。ずっとハラハラしてたから、もうそんな心配しなくていいと思うとよかったなって』

「バレても嫌じゃないの?」

『嫌じゃないですよ』

「……あのさ、今年の夏って、暑かったよね?」

しばらく逡巡して、碧は言葉を紡いだ。

『は?』

「瀬戸さん、夏痩せしてたじゃない」

『ええ、まあ、夏は毎年似たような感じですけど……?』

「脳は一日、一二〇グラムの糖が必要だっていうでしょ」

『はあ?』

「今年の夏、脳の糖分足りてた?」

『足りてたかどうかは、自分ではよくわかりませんでしたけど、たぶん問題なかったと思いますよ。碧さん、これって、なんの話ですか?』

「さくらが……」

『小畑さんが?』

「瀬戸さんのこと、あんなに可愛いのに女に走るなんてもったいない、夏の暑さで脳が変になったんじゃないかって……」

しばらく沈黙が続いた後、電話の向こうから笑い声が聞こえてきた。

『小畑さんの発想の方が変ですよ。そんな個性的なひとだったんですね』

「でもなんか、だんだんそんな気がしてきて……」

『碧さんのこと好きになったの、夏じゃないですよ』

「え？」

『五月だったでしょ、暗室で現像したの』

「あ……」

『あのとき、碧さんに冗談にもならないみたいなキスされて、好きになっちゃったんです』

「そのあとのベロチューで、あたしは変になったよ」

『じゃあ、お互い様ですね』

碧と柚希は笑い合った。しばらくすると、柚希はほっとしたように息をついた。

「どうしたの？」

『ちょっと心配してたから、安心したんです』

「なにが？」

『もしかしたら、碧さんに嫌われたんじゃないかって』

亜衣にも『柚希と喧嘩したんですか』と訊かれた。学食での様子が柚希を不安にさせたのだろうか。

「学食のときのこと？」

『はい。碧さん、髪、触られるの、嫌がつてるみたいだったから』

「違うよ。あれは……初めてキスしたときみたいに、変になりそうだったから……」

『……』  
「みんないるのに、感じちゃいそうだったの。夜、お風呂に入るとき、髪ほどくの、すごく悲しかった」

正直な気持ちを伝えるのは勇気がいった。鬱陶しいとか、気持ち悪いと思われたらどうしようかと心配になる。けれど、全然違う勘違

いをされているよりは、マシだった。

『碧さん……、いますぐ会いにいきたくなるようなこと、いわないでください』

柚希の言葉が、碧の胸を震わせた。恥ずかしかったけど、素直に  
いってよかった。

「やだ。だって、あたしも会いたい……」

柚希からもらえる声が、言葉が、気配が、どうしようもないほど  
心を温かくしてくれた。

第三十四話

碧の部屋 脳の糖分足りてた？（後書き）

### 第三十五話 部室 発想の転換

待ち合わせの場所に行くと、柚希は携帯電話でだれかと話していた。

碧が近づくと、柚希は気がついて駆け寄ってきた。

「ちょっと待って。いま、碧さんがここに着いたから。碧さん、亜衣から電話なんですけど、ちょっと代わって話してもらえますか」

柚希に携帯を渡されて、戸惑いながらも、慣れない携帯に耳に押し当てた。

「亜衣ちゃん？」

「碧先輩、すいません。昨日か今朝、うちのブログ見てもらえました？」

「ごめん。見てない。この間名画協力の記事、載せてくれたときに見ただけなの」

「やっぱり。いえ、ちゃんと見てくれとかじゃなくて、あの記事を読んだひとがコメント残していつてくれてるんですけど、今日の撮影に行きますってコメントが三十くらいあるんです」

「三十？」

碧は声がひっくり返りそうになった。柚希に視線を合わせた。柚希も戸惑った顔をしている。

「柚希に訊いたら、写すのはなんとかブルーって色だけだっていうし、わたし名画のことは、よくわからないんですけど、同じ色の写真が六十枚とか、まずくないですか？」

「六十枚？　なんで六十枚なの？　コメントは三十なんですよ」

「コメントのほとんどが『友達と行きます』とか『家族みんなで行きます』って書いてるんですよ。コメント書いた人がみんな来るかどうかはわからないんですけど……」

「あ、そっか。嬉しいけど困るね。たぶん、フェルメールブルーだ

け余っちゃうな。撮影させてもらってその写真使わなかったら、問題になるだろうし。わかった。ありがとう、亜衣ちゃん。佐々木くと連絡取ってみる」

『はい。お願いします。じゃあ』

碧は柚希に携帯を返した。

「佐々木さんの携帯番号、入ってるんですか？」

「うん。赤外線で登録したから。出るかなあ」

自分の携帯を開き、アドレスから佐々木の電話番号を呼び出して、コールする。三回目で佐々木の声に対応した。

『碧ちゃん？』

「佐々木くん、よかった、捕まって」

碧が事情を話すと、佐々木は驚いたり喜んだり慌てたり、忙しい反応をした。

『今日の三時から五時なんだな。俺も部屋にいくわ。で、お前ら、いまドコにいの？』

「駅前。瀬戸さんが、碧いターバンに光が当たってるって、水色みたいに白っぽいっていうから、薄い色の色画用紙、いまから買うところ」

『すごい。超ナイス。じゃあ、肌色の色画用紙もついでに頼む』

「色画用紙はいいけど、ストールの肌色とか、たぶんないよ」

『ストールとかじゃなくていい。タオルか布なら手に入んねえ？』

肌色じゃなくても、薄い茶色でもいけるし』

「わかった。たぶん見つかると思う」

電話を切って、鞆に入れた。

「亜衣ちゃんのブログって、すごいんだね」

「私もあれから見てなくて、びっくりしました」

「とにかく、急いで買い物すませて大学いこ」

碧と柚希は、画材店を目指して足早に歩いた。

大学に着いたのは、二時前だった。

写真部の部室は壁に多くの写真を飾ってあるので、大きな画用紙を貼る場所の余裕はなかった。先日、貼りつけたフェルメールブルの画用紙がまだ残っているので、これ以上の場所は残っていない。「早めに来たけど、準備もできないね。佐々木くんが来るまで、なんか飲んで待つてよ」

「じゃあ、部室のコーヒーもらいましょうか」  
「うん。そうだね」

碧はポットの水を入れ替えて、コンセントを差し込んだ。その間に、柚希がマグカップにコーヒーを入れている。

「碧さん、お砂糖いくつですか？」

「二つ。そういえば瀬戸さんは？」

「私も二つです」

「そうなんだ。案外、甘党なんだね」

先日の電話で、ぎこちなさが払拭されていた。さくらのおかげといえなくもない。

初夏に切った柚希の髪は、また少し伸びてきた。近づくと香る柑橘系のコロンの匂いにも、最近は慣れてきた。

いまでも会うたび、緊張したり穏やかでいられたり、碧の気分は安定しないけど、柚希のそばは居心地がいい。

(宇宙人……には見えないよね)

亜衣の言葉はたとえなんだから、気にするようなことではないのだろっけど、宇宙人に匹敵するほどの秘密が、柚希にはまだ、あるのだろうか。

「碧さん、この間、もしも願いが叶うなら、男になりたいって言ってましたよね」

「え？ ああ、うん」

「そうなんですか？」

「うーん、あのときは急に話を振られて、他に思いつかなかった、つてのもあったんだけど……」

男になつてみたいと思ひ始めたのは、柚希に気持ちを傾けてから

だ。男になりたいと積極的に願っているわけではないけど、女に生まれてきたのは少し悔しかった。

結局自分は、恋愛は男女間であるものだという、漫然としたこだわりを、捨てきれないのかもしれない。

「あたし、同性相手にこんな気持ちになったことないし、よくわからないの。瀬戸さんに触られたり、キスされると変になるし、気持ちよくなるんだけど、それが性欲みたいなものかどうかの判断がでないんだ」

「そうですね…」

柚希は考え込むように俯いた。

ポットのお湯が沸いたので、カップに注いで柚希に差し出した。

指が触れ合って、碧は一瞬、緊張した。そして、本当はもっとちゃんと、手を繋いでみたいとも思った。

「正直、気持ちが目まぐるしい。女同士でよかったって思うときもあるし。キスの続きがわからないから、好きなのもって考えたりもするの。でももしあたしが男だったら、瀬戸さんのこと、いまよりもっと好きになってた気もするし。…なんかごめん。だんだん、なにいつてるのかわかんなくなってきた」

「いえ……」

「瀬戸さんはいままで、どっちとつきあうことが多かったの？」

「私は、碧さんが初めてですよ」

柚希の言葉を、碧は信じていることができなかった。柚希のような華やかなひとが、だれとも交流を持たなかったとは考えられなかった。気を遣ってくれているのだからうけど、過去のことにも、焼きもちを妬くつもりはなかった。

亜衣のことも、衝撃的な事実を告げられたけど、いまの二人に感情がないなら、もう気にはならなかった。

「碧さん、私は最近、ひとが生まれてきたことには、それぞれ理由があるような気がするんです。性別も、理由があってその性別で生まれてくる必要があったんじゃないかって……」

「だとしたら、瀬戸さんにはこの先、運命の男のひとが現れちゃうね」

ぬるくなったコーヒに口をつけて、マグカップの模様を指先でなぞった。結局、考えを進めると、柚希への恋情には先がない。

柚希がもし、同性愛者だといってくれば、自分にとっては有難いが、そうした発言がないのは、亜衣との経験があるとしても、本来は異性に向かう感情が強いのかも知れない。

「発想の転換を試みる気にはなりませんか？」

「発想の転換？」

「碧さんは、もし自分が男だったらって考えるけど、逆に私の方が男だったらって考えてみたことはないんですか？」

「へ？」

あまりに意外なことをいわれて、碧はきよんとした。

考えてみたこともなかった。柚希ほど女らしいひとを、碧は他に知らない。理想の女性とはこういうひとのことなんだと、見本のようなそんな存在だった。

「考えられない。想像できない。あり得ない」

「……………そうですか」

柚希は大きく息をつくと、肩を落とした。

### 第三十五話

### 部室 発想の転換（後書き）

ここで小説を投稿している他の方が、どんなふうになっているのかわかりませんが、私はだいたい、十話くらい先を書いている状態で投稿します。後から書いた話の状況で、前に書いた話を書き換えないといけないことが多いからです。実は、十話というのは少なすぎで、いろいろ困ることもあります。辻褄合わせとか、辻褄合わせとか、辻褄合わせとか……。なにしろ、その場の思い付きで書いてしまう体質なので……。で、いま四十五話まで書き終わっているかというところ、四十三話でございます。というわけで、明日はお休みです（笑）

最終話は、結局何話なんだろう……？

## 第三十六話 部室 疲れた

「つ、疲れた」

碧は部室の椅子に浅く腰掛け、両足を投げ出して天井を仰いだ。十五時から十七時まで、とブログに時間を指定していたのだが、予想よりはるかに多くのひとが集まってくれた。時間前にはすでに何人か部室の前で並んでいたのだ。嬉しい誤算だった。

慌てて時間を前倒しして撮影を始めたが、佐々木と三人でも人手が足りなかったので、大学の近くに住むさくらと、最近入部した一年を二人呼び出して、ようやく終わったのが五時半だった。

途中、碧の携帯は充電が切れる事態になってしまった。前日の夜、充電は済ませてきたのだが、高校のときから使っている携帯は、バッテリーの持続力が少なくなっていた。

「ごめん、瀬戸さん。明日は充電器、持参してくる」

「大丈夫ですよ。小畑さんたちも来てくれたから。でもまさか、こんなにひとが集まるなんて、びっくりですね。何人分の写真が撮れたんでしょう」

柚希も、自分が撮影したひとの人数すら把握できていなかった。

壁の写真を一時的に撤去して、背景用の色画用紙を二カ所に増やして、それでも来てくれる人が廊下で待っていたので暗室の黒い壁を利用して黒い背景の写真も写した。

佐々木が来なかったら、色の配分がわからなかったもので、大変なことになっていた。碧も柚希も、二日合わせて、二十人くらい来てくれればいいなあ、とのんきに考えていたのだ。

「うわっ、今日だけで百三十六人だ。マジかよ」

パソコンに、撮影した部員のメモリの画像を取り込んだ佐々木が、驚きの声を上げた。

「ええ、そんなに？」

碧は椅子に座り直して声を上げた。

「道理で、忙しかったわけじゃん。家族総出で来てくれたひととか、何組かいたし」

「高校生も多かったよ。来年、受験するのかな」

部員が口々に弾んだ声でさっきまでの出来事を振り返る。

「亜衣ちゃんに謝恩会しないとダメなんじゃない？」

さくらの提案に、部員はうんうんと頷いた。

「もう、数は揃ったんじゃないの？」

碧の問いかけに、佐々木は首を振る。

「残念ながら、あと百五十くらい足りない」

「うわ。でも考えたら、今日のこれがなかったら、ほんとにやばかったんだ」

「そういえば、他のキャンパス行ったりしたもんね、去年。教育学部とか、医学部とかさ」

「同じ大学でも、キャンパスが違つと、よその学校と一緒にだし、頼みにくかったんだよね」

碧とさくらは去年を振り返り、しみじみと頷き合つた。

「柚希ちゃん、亜衣ちゃんのそのブログ、携帯でも見ることできんの？」

「いえ、私はパソコンでしか見たことないので、わからないんですけど……」

「わたし、携帯で見たことあるよ。『あいあいのあいある日常』でしょ」

さくらが自分の携帯を慣れた指で操作した。

「ほら、これ」

画面に表示させて佐々木に見せるが、佐々木は慣れない携帯でのブログ閲覧に戸惑っている。さくらに携帯を返して尋ねる。

「『明日、行きます』みたいなこと書いてるコメント、いくつあるかわかんねえ？」

「ちよつと待つて、え〜つと、十六かな」

「今日が三十で、実際来てくれたのが百三十人くらいだったから、十六のコメントだったら、七十五人くらい？」

「うん、たぶんそれくらいだね。佐々木くん、明日も来られるの？」

「来る。つーか、来ないとやばいし」

「じゃあ、明日も色の配分してくれるんだ」

「おうよ」

残りが少なくなってくると、いい加減に撮影すると、余って使えない写真が出てくる。協力してもらってその事態はまずい。

「じゃあ、明日もがんばるー」

碧は拳を振り上げた。

「碧ちゃん、充電とメモリ空にしてくんの、忘れんなよ」

「わかってるよ」

どうも佐々木は、碧に突っかってしまっようだ。

翌日も、撮影に参加してくれた人は思っていた以上に多かった。

それでも、要領がわかっていたので、初日よりやり易かった。誘導もスムーズにできたので、気持ちにも余裕があった。そんな中でわかったことは、どうやら柚希を目あてに来ているひとが、結構な人数になるらしいということだ。男女両方に憧憬めいた視線を送られているのが、柚希らしい。

男から見れば高嶺の花だろうし、同性から見れば憧れの存在だ。

どちらにしても、きっかけを作って知り合いになりたいのだろう。柚希本人は、いつものことながら、自分に向けられる好意に気づいていない様子だった。慣れているから気にならないのか、鈍いのか、こんな状況を見るたび不思議に思ってきたが、もしかして柚希は、自分にあまり関心がないのではないかと碧は思えてきた。



第三十六話

部室 疲れた〜（後書き）

### 第三十七話 部室 お前、男運、悪そうだし

土日の撮影会のおかげで、名画の写真はほぼ数が揃った。いよいよ、プリントして貼り合わせる作業に突入する。授業が終わって時間のある一、二年は、毎日、部室に集まる日が始まった。

日に日に、空いた時間も部室に足を運ぶことが多くなった。

作業としては、事務的な内容だ。横の軸がアルファベット。縦の軸が数字だ。たとえば、Dの7という番号の写真は、左から四列目で下から七番目の場所に配置される。

一枚一枚の写真は、同じ場所で写していても、モデルになったひとの服装や、写した時間、カメラで色が変わる。暗い写真は影になる場所に配置されるし、明るい写真は光の当たっている場所に配置される。この作業は佐々木がパソコン上で済ませているのだが、プリントアウトした写真を順番通りに番号を振り分ける作業が、思っていた以上に大変だった。ひとつ、ずれるとすべてが狂ってくるので、ときどき確認しながらの地味な作業だった。

それでも今年は、佐々木がこだわっただけのことはあったと、碧は素直に感心していた。

去年、この役を担当した上級生は、並べながら入れ替えるという、アナログなことを繰り返していたので、余分な手間ばかりかかっていた。

この日、部室には碧と柚希、松浦、さくら、佐々木が入っていた。「あ、EかFか、わかんなくなった。佐々木くん、パソコン見せて」

碧が近づくと、佐々木は慣れた動作で、ノートパソコンを碧のほうに向けた。

「眼鏡かけてて、髪が茶色で……、このひと、どこかな……」

「なあ、碧ちゃん、最近、なんで男とつきあわねーの？」

佐々木がA4サイズにプリントされた写真を分割するために、カッターナイフを滑らせながら、ボソリと呟いた。

「6…7…8、あ、あった。Eの8だ。べつにどうでもいいじゃん。興味あるの？」

「どーかな。あるかもな。お前、男運、悪そうだし」「ほつといてよ」

碧は手にしていた写真の裏に、番号を書き込んだ。

「幸せのドクターイエローって知ってる？」

「幸せの青い鳥とは別物？」

「ちげーよ。黄色い新幹線だよ。見たら幸せになれるって噂なんだぜ」

「はあ？ 撮り鉄の都市伝説かなんか？」

どうも佐々木のマニアな会話には、ときどきついて行けない。

「ま、そうといえる部分もあるかもしれねーけど、俺は結構信じてんだな。でも、ドクターイエロー見て幸せになった奴、見たことねーし、お前、最近不幸そうだよ。見て幸せが訪れんのか、興味ある」失礼な男だ。勝手に男運が悪そうだとか、不幸そうだとか、なにを根拠にそんな発言が飛び出すのか、理解できない。自分は現在、なかなか幸せの最中にいるのだ。相手がこの部屋で一緒に作業をしている絶世の美女だと宣言できないのが辛いけど。

「あたしは充分幸せだよ」

「そーは見えねーけどな。もし、ドクターイエロー見たら、教えるよ」

「はいはい」

面倒くさくなってきて、碧はおぎなりに頷いた。いままで二十年生きてきたが、黄色い新幹線など、見たことも訊いたこともない。これからの二十年も、見ることはないだろう。

「松浦さん、俺、今日のノルマ終わっただんで、帰ります」

佐々木は立ち上がって荷物をまとめ始めた。

「お疲れさん」

「わたしも帰ります。寮の掃除当番だし」

「さくら、今日だっけ？」

「そう。碧は明日だよ」

「忘れてた」

さくらと佐々木が部室から出ていくと、室内はいささか寂しくなった。最近、この部室は大勢の部員でにぎわうことが多かったので、こんな静寂は久しぶりだ。

「柚希ちゃんも、終わったら？ 今日の方は済んでるんだろ」

「そうなんですけど、明日、来られないので……」

「土曜日だから、どっか行くの？」

「尋ねたのは碧だった。」

「はい。韓国に。明後日の昼過ぎには帰りますけど」

「ずいぶん慌ただしい海外旅行だね」

「旅行というか、通訳なんですよ。夏にバイトしてた店の店長さんたちが、円高を利用して買い物に行くんですけど、いつも一緒に行ってたひとりが、インフルエンザで行けなくなっただんです。他のひとは英語もほとんどできないので、急遽、ピンチヒッターで……」

「韓国って、キムチとか唐辛子いっぱい売ってるのかな。写真に撮れたら見せてね」

「はい」

「あー、なんかキムチの想像したからかな。目が痛くなってきちゃった。顔、洗ってくる」

一時間以上、座ったままで数字とアルファベットを相手にしてきたので、目が疲れてきた。少し作業から放れたかったので、碧は部屋を出て洗面所に向かった。

洗面所の鏡を見て、化粧をしていたことを思い出した。顔を洗ったりできないので、手を洗うだけで済ませた。

恋人が男だったときより、身だしなみを気にしている。以前は面倒なので髪を束ねてしまうことも多かったけど、綺麗な柚希を意識して束ねなくなった。子どもっぽいとか、みっともないと思われた

くなかった。

同性を意識すると、女子力が上がるのかもしれない。

碧は廊下を戻った。

部室の扉の前まで来たとき、部屋の中から話し声が聞こえてきた。

「……………マスの掻き方でも教えてあげようか？」

「……………そうですね……………。教えてもらおうかな」

松浦と柚希が話をしているようだ。途中からしか聞き取れなかった。

「柚希ちゃん、あのさ、冗談を本気で受け取らないでくれる？ 俺

はまだ普通の人生に未練があるんだ」

「なんだ、冗談だったんですか」

「なんていうか、きみら、似た者同志だな。きみも碧ちゃんも、ふらふらしてて、危なっかしいよ」

扉に手をかけたとき、自分の名前が出てきたので、入りにくくなった。どうしようかと迷っているとき、柚希の声が続いた。

「そうなんですか？ 訊かれたから答えただけですよ」

「自覚がないのが、危なっかしいんだよ」

さつさと室内に入っていくかなければ、盗み聞きしているようでまずい。意を決して扉に指を伸ばすと、また自分の名前が出てきた。

「まだ、碧ちゃんには、あのこといつてないの？」

碧は思わず手を引っ込めた。身体が強張ったように動かない。あのことは、柚希の秘密のことだろうか。

「はい」

「いつもの、怖い？」

「何度か伝えられそうだったんですけど、いざとなると駄目ですね。へタレで」

「そんなもんだよ、男なんて」

「男って情けないもんですね」

「がっかりした？」

「いえ。私には似合ってるのかな」

おかしい。この二人はだれのなんの話をしているのだろう。途中から、よくわからなくなった。

「正直、自分でいわなくても、他のひとから伝わるのかなって思ってたんです。松浦さんと同じゼミのひとから、大学中に拡がるのかと思ってましたし」

「あいつ、たぶん誰にもいってないよ。ま、きみの人徳ってやつかな」

柚希の口から大きな溜め息が落ちた。

「とりあえず、いま出来ることは終わってたんで、帰ります」

「お疲れ」

碧は慌てて来た廊下を引き返した。トイレの壁に隠れて、柚希の足音が遠ざかるのを待ってから、部屋に戻った。

「柚希ちゃんとすれ違わなかった？」

松浦が顔を上げて尋ねた。

「隠れてやり過ぎしたんで」

「どうして？ 二人になりたくなかった？」

「副部長と話してるの、立ち聞きしちゃったんで、顔、合わせられなくて……」

「……そういうことを正直にいつてしまうのが、碧ちゃんだよな。黙ってたらわからないのに」

そうかもしれないが、訊かれたのでつい答えてしまう。どうも、先回りして言い訳を考えるのが苦手なのだ。

「どの辺から訊いてた？」

気を悪くしている風でもなく、松浦は写真に視線を落としたまま問う。

「なにかを教えるとかなんとか……」

「それで、訊いてなにか、わかった？」

「いえ、全部聞き取れたわけじゃないし、話の内容もよくわかりませんでした。ただ……」

「ただ？」

「副部長、瀬戸さんのこと、なにか知ってるんですか？」  
「知ってるよ」

あっさり肯定されたので、碧は唇を噛みしめた。

「…どうして副部長は知ってるのに、あたしは知らないんですか？」  
「逆だよ。柚希ちゃんはきみだからいえないんだ。他のだれよりも」  
松浦の言葉に、碧は驚いた。

「……そんなことまで、知ってるんですか？」

「きみらの間に恋愛感情が存在してるってことなら知ってるよ」

「普通、女同士でそうだとはいえないんじゃないですか？」

「いや、身近にいる人なら、そこそこ気がつくんじゃないかな。きみらは二人ともわかりやすいから」

「あたしって、そんなにわかりやすいのかな。さくらにもあっさりばれちゃったんですけど」

「だろうね」

「なんで同性なのに、親友って方向に見ないんですか？」

「柚希ちゃんの場合は亜衣ちゃんがいるからね。亜衣ちゃんに向ける視線と、碧ちゃんに向ける視線は、気配が全然違うよ。きみの場合のさくらちゃんと一緒で」

徐々に世間にはれていく。さくらに続いて松浦にも知られてしまった。亜衣もたぶん知ってるのだろう。自分と柚希の過去をわざわざ教えて、柚希を見捨てないでくれ、とまでいったのだから。

良いのか悪いのか判断できない。柚希が他人に知られることを気にしていない様子も、なんとなく腑に落ちなかった。

「瀬戸さんって、何者なんですか？」

「それは、俺がいつて良いことじゃないだろうから」

「あたしが知ったら、どうなるんですか？」

「それは、碧ちゃん次第だろう。柚希ちゃんにちゃんと訊けば、教えてもらえるんじゃないの？」

碧は息を吐いて俯いた。確かに、いままで自分は、柚希に強く尋ねなかった。

怖いのだ。なにかが変わってしまいそうで。

けれど、やっぱり知りたい。もっと近づきたいし、もっと好きになりたい。

夏休み、柚希を無理に呼び出して借りていた本を返したあの日から、ずっと歯に物が挟まっているようで、すつきりしない。好きだと告げられて、隠していることがあると打ち明けられた、あのときからずっと。

「とりあえず、これ」

松浦が携帯電話を持ち上げてみせた。見覚えがあるのは、松浦の携帯だからではない。

「それ、瀬戸さんの……」

「正解。明日から韓国に行くっていったただろ。ないと困るんじゃない？ 届けてあげれば？」

「もしかして、隠してました？」

「いや、写真に埋もれてただけだよ。教えるのは忘れてたかもしれないけど」

「それって、隠したのと変わらないじゃないですか」

「いいから、早く届けてあげなよ。住所は知ってるんだろ」

「…はい。じゃあ、お先に失礼します」

「ちゃんと、訊いてみなよ。訊きたいこと全部」

「……………」

やっぱり松浦は、なにを考えているかわからないひとだった。

### 第三十七話

部室 お前、男運、悪そうだし（後書き）

何度も思ってきてるんですが、大丈夫なのかな、この話（笑） 1  
5禁って、どこまでを指すのかがいま一つ解りにくいです。なんか  
碧視点になってから、会話の内容がアダルト過ぎ？ と思っております。  
明け透けな碧の性格に似たような友人が集まって…って感じ  
ですけど、この話に関しては、碧のせいではありません（笑）

### 第三十八話

#### 柚希の部屋　これが、隠してたことです

柚希のマンションに、行くのは初めてだった。携帯に登録されたアドレス情報は、いままで何度も見てきた。電車で二駅目にあるマンションだ。いきなり行って、行き違いにならないか、心配だったが、固定電話はないみたいなので、連絡のしようがない。

セキュリティのしっかりしたマンションのようで、入り口で部屋番号を入力して、相手に開けてもらわないと中に入れない仕組みになっている。

柚希の部屋は308号室だった。

308の番号とインターフォンを押す。いくらも待たないうちに、モニターに柚希の顔が現れた。

「碧さん、どうしたんですか？」

「部屋に携帯忘れてたから、持ってきたの」

「え？　あ、ありがとうございます。いま解除しますので、入ってきてもらえますか」

ガラスの重厚なドアが開いた。

ドアをくぐると、床は顔が映りそうな石材だった。エレベーターが視界に入ったので、そちらに向かう。三階のボタンを押した。

エレベーターのドアが開くと、柚希が待っていた。

「碧さん、すいません」

オリーブ色のチノにシンプルな黒っぽい七分袖のTシャツ姿だ。いつも、大学で見る姿よりも、ルーズな格好だった。なんでもない普段着を、モデルのように着こなしているのが新鮮に感じた。

「うっん、大丈夫。えつと携帯……」

鞆の中を探っていると、柚希に手首を掴まれた。

「部屋に寄って行ってもらえますか？」

「……うん」

手首を掴まれたまま、碧は柚希の部屋に連れて行かれた。手首から伝わってくる柚希の体温が、とても温かった。

「どうぞ。散らかつてますけど」

リビングに通されて、柚希はキッチンに向かった。

落ち着かない心地で、辺りを見渡す。散らかつているといったのは、明日行く旅行のための荷造りのせいだった。

壁際には小さめのキャリーバッグが置いてある。テーブルの上には、洗面用具やパスポート、タオルや着替えが綺麗に並んでいた。

部屋は、ちゃんと片付いている。棚の一番手の届きやすいところには、一眼レフとレンズが大切そうに置いてあった。本をよく読むのか、棚に並べきれない分が手前で横積みになっている。それでもすっきりとした部屋だ。一人暮らしの大学生が住むには、贅沢なマンションだろう。柚希の母親が複数の店を経営していて、最近はスイーツの店も展開していると訊いたので、その恩恵をあずかっているようだ。

碧は、狭い部屋の大半を占めるベッドの上にパジャマを置いたままにしたりするので、こんなふうにはならない。

ソファアーに腰を下ろした。

「携帯、テーブルの上に置いとくよ」

「はい。本当に助かりました。ついさっき、大学に忘れてきたことに気がついたんです」

部屋を見渡すと、出窓にフォトフレームが置いてある。めくれば、はがきサイズの写真を何枚も見ることが出来るタイプのものだ。

「瀬戸さん、この写真、見ていい?」

「どうぞ」

碧はフォトフレームを手に、ソファアーに移動した。

一番上はカタツムリの写真だ。どこかで見覚えがある。

「? ……あ、これ、あたしがメールで送った写真?」

「はい」

「なんで、自分が撮った写真じゃないのを入れてんの？」

「気に入ってるんです」

「なんで……？」

プリントアウトするような写真でもないのに、変わった行動だ。

柚希が紅茶を淹れて持ってきてくれた。ソファアの隣に腰かけたので、身体が揺れた。

フォトフレームに収まっている写真は、見たことがないものがほとんどだ。

「これは？」

現代的な建物の一部のようにだが、格子模様の向こうに空が見える。

「京都駅の天井です。なんか面白かったので撮ってみました」

そのあとは京都で撮ったという写真が何枚か続いた。お寺や町屋の風景を撮ってきたとばかり思っていたが、写っているのは都会的な景色ばかりだった。セオリー通りでないところが柚希らしい。

最後の写真は、松浦が撮った柚希が碧の頬にキスしてる写真だった。

「これも気に入ってるの？」

「もちろんです」

「こんな風に、あとあと残るんだったら、ちゃんと化粧しておけばよかったな。この日暑かったし、スタジオに着いたときには、結構汗で取れちゃってたし」

柚希の化粧はちゃんとしているので、正直バランスはよくない。

「じゃあまた、撮り直しますか？」

「他のひとに撮られるの恥ずかしいから、撮るならセルフタイマーがいい」

「セルフで撮るなら、もっと濃厚なキスシーン撮りたいですね」

「そんなの撮って、もしだれかに見られたらどうすんの？」

「現像を店に出さなかったら、だれにも見られませんかよ」

「そんなにキス写真撮りたい？」

「はい。振られそうになったら、その写真で碧さんを脅迫するんで

す

碧は思わず嘖き出した。もし今の関係が壊れるとしたら、振られるのは自分の方としか思えなかった。

「その発想、さくらと一緒にだよ」

「小畑さんにも脅迫されてるんですか？　もしかしてあの写真？」

あの写真というのが、さくらが自分の頬にキスしているところを撮った写真なのだ、すぐに気付いた。どうも柚希は、あの写真にこだわっている。

「なんでよ。学祭に出品するのに、脅迫とかありえないじゃん。そうじゃなくて、瀬戸さんが副部長のモデル引き受けたっていったら、脱がせて写して、この写真をばらまかれなくなったら、いうこときけ、なんてことになったりしてって……」

碧は自分で話して、あまりの馬鹿馬鹿しさに呆れられそうだと肩を竦めた。

「小畑さんって、本当に面白いですね。でも、松浦さんも信用されてないなあ。いいひとなのに」

たいして気の毒とも思っていないような口調で、柚希は笑っていた。

「でも、キスの写真くらいじゃ、脅迫できないですか？」

「さあ。脅迫なんて、したこともされたこともないから、わかんない」

「脱がせて写して……って鬼畜ですよ。してもいいですか？」

「勘弁してよ」

紅茶を飲みながら、愉しくも物騒な会話が面白くて、何度も笑い合った。

「碧さん……」

柚希に髪を撫でられて顔を上げると、口づけされそうな気配だった。唇の距離が近かった。

「駄目……」

「どうして？」

「あたし、いまでもコーヒー飲むたび思い出しちゃうんだもん。今

度は紅茶飲むたび変になったら、大学で飲めるものがなくなっちゃ  
う」

「……………」

いってて大概、恥ずかしい。意識過剰だと笑われそうだ。柚希の  
顔を見られなくて俯いていると、抱き寄せられた。

「私、碧さんが可愛くてしかたないです」

柚希の抱擁は胸を締め付けられる。ドキドキしてそして、愛しく  
なる。

碧は柚希の背中に腕を回して、自分からキスした。合わせるだけ  
の口づけでは終わらなくて、角度を変えながら深いキスを繰り返し  
た。

息が苦しくなるほどキスしてぼうつとした。視線を下に逸らせる  
と、柚希の素足が目に入った。

「……………あおみどり、みどりあお、エメラルド？」

「え？」

「足のマニキュアの色」

「ああ、これですか？ 碧さんも塗っていきませんか？」

「でも、乾くまで帰れなくなるし……………」

「だから塗ってもらいたいです。帰ってほしくなくて」

「明日、朝、早いんでしょう？」

「碧さんがいま、自分の部屋にいるのが信じられないくらい嬉しい  
んです」

「……………マニキュア、貸して。塗るから」

柚希はどうして、自分をこんなに深く求めてくれるのか不思議で  
仕方がなかった。けれど、柚希が求めるなら、どんなことでも叶え  
てあげたかった。

「私に塗らせてください」

「べつにいいけど……………」

柚希が引き出しからマニキュアを持ってきた。いわれるまま裸足  
の足を差し出した。

フローリングに座り込んだ柚希に足を触られて、碧は身体を震わせた。

「碧さん？」

「ううん。大丈夫。嫌とかじゃないの」

前に髪に触られたときも、心が騒いだ。そのときと似た気持ちだった。けれどいまは二人きりなので、胸のざわめきも受け入れやすかった。

どうやら自分は、思っていたよりずっと、柚希に夢中になっているらしい。いままで足に触られることなんかなかったから、緊張した。

足の爪が一本ずつ青とも緑ともいえない曖昧な色に染まっていく。柚希と同じ爪になっていくのが、くすぐったくも照れくさい。こんなことで、この美しいひとに近づけるわけでもないのに。

触れられているところから、言葉にできないほどの官能を感じた。吐息が色めいた声になりそうなのを、必死で堪えた。

さくらに訊かれたことを思い出した。同性で好き合ったら、どうなるのかと。異性とつきあうのと変わらないとはいえない。もし柚希が異性なら、とうに性行為に突入している。

柚希とセックスしたいと思っているのだろうか。

この愛しいひとの肌を、味わってみたいのだろうか。

思いはいつまでも、ぐるぐる回るばかりだ。

たぶん自分は柚希と寝たいのだ。けれど邪な欲望の対象にしたくないのも、本当の気持ちだと思う。

キスより先に行く方法がわからないから、かけがえのない存在なのだ。

こんなときめいたり、切なくなるのは、男が相手なら誰でもあってもありえない。

最後の爪にマニキュアが塗られて、何分か経った。

「爪、もう乾いたかな？」

「もうちょっとです」

「足、もう放して」

「できればもう少し、触っていたいんですけど」

「やだ。なんか変な気分になるもん」

「そんなやりとりをしている間に、爪が乾いた。」

「じゃあ、あたし帰るね」

「碧は鞆を肩にかけた。」

「碧さん、また来てもらえますか？」

「うん。絶対来る」

立ち上がったとき、碧の膨らんだ鞆がテーブルの角をかすめた。

音がしたので振り返ると、パスポートがフローリングに落ちている。

「ごめん」

「いいですよ」

碧はパスポートを拾い上げた。開いて落ちていたので、つい中を見てしまう。

「へー、こんな証明写真も綺麗……あれ？ これ、間違ってる？  
性別のところ、Mになってるよ。女はFじゃなかったっけ？」

「……………」

「瀬戸さん？」

「碧さん、パスポートは間違ってます。Mで正しいんです」

「え？ だって…………？」

柚希は碧の手を取ると、自分の喉に押し当てた。唾液を嚥下して  
感触を伝える。

喉仏の膨らみを手のひらに感じて、碧は驚いて手を引っ込めた。

頭の中が真っ白になった。

「嘘……だよ。そんなの、違う……よね……？」

気が動転して、言葉がかすれた。

「これが、隠してたことです」

「……………ごめん。なんか、わかんない。なに訊きたいのか、なにが  
いいいたいのかも……………」

「碧さん、ずっといえなくて……………でも……………」

「お願い……帰らせて……。ひとりになりたい」  
碧は袖希の腕を振り切って、部屋から逃げ出した。

### 第三十八話

#### 柚希の部屋

これが、隠してたことです（後書き）

ようやく、正体がバレました。長いよ柚希。ひとから聞かされるではなく、柚希が自分で言うでもない伝わり方にしたいなあ、思ってたら、こんなに長くかかってしまいました。

寮の部屋に戻ると、碧はベッドに突っ伏して泣いた。

自分はいつたい、だれを好きだったんだろう。

柚希が男だと考えたことは、一度もなかった。どうしても早く、教えてくれなかったんだろう。

柚希がなにを隠していても、気持ちは変わらないと思っていた。

だけど、こんな展開は、想像もしていなかった。

柚希の優しさが好きだった。

柚希のしぐさが好きだった。

柚希の話す声が好きだった。

柚希のすべてが、大好きだったはずなのに、いま、柚希の存在そのものがあやふやに思える。

部屋のドアがノックされて、馴染み深い声が届いた。

「碧、いるんでしょ。晚ごはん、いらないんだって？ 食堂で訊いたけど、おなかでも痛いのか？」

ドアに鍵をかけておけばよかった。返事もしないで放っておいたが、案の定、さくらは勝手に入ってきた。

「碧、どうしたの？」

「なんでもない。放っというて」

「泣いてんの？」

「目が痛いだけ」

「目、痛いんだっいたら枕に顔つけてちゃ余計駄目でしょ。顔上げて碧がしぶしぶ、さくらに顔を向けると、さくらは肩を竦めてため息をついた。

「化粧も落とさないで、なにやってんのよ。クレンジングは？」

「…テレビの下の引き出し」

さくらは教えられた引き出しを開けて、クレンジングクリームと

一緒にあったヘアバンドを持ってきた。

さくらは、枕を抱きしめる碧にヘアバンドを付けて、クレンジングを塗り広げた。

「その枕カバーも洗濯しなきゃ駄目だよ」

「……うん」

されるがままでいると、気持ちが少し落ち着いてきた。こんなときはひとりであるより、だれかと一緒の方が気がまぎれる。ティッシュでクリームを拭き取り、洗面所で顔を洗うと、化粧とともに涙も洗い流せた気分だった。

「体調は？」

「大丈夫」

「じゃあ、どうしたの？」

「……………」

どう説明すればいいか、わからなかった。話していいのかも判断できないし、訊いてもらいたいのかもわからない。どうしようかと迷っていると、さくらは口を開いた。

「瀬戸さんに振られた？」

つい先日、自分が似たような状況だったから、そう思ったらしい。

「振られた……って、そっか、あたし、振られたのかな……」

「なんかビミョーにズレたみたいだね。瀬戸さんにカミングアウトされた？」

「！……さ、さくら……？」

「あ、こつちが正解なんだ」

「嘘……なんで、さくらが知ってるの？ 気がついてたの？ わかってた？」

「気づいてたっていうか、一緒に瀬戸さんのバイト先のお店に行っただことあったでしょ。あのとき、碧は瀬戸さんと先に帰ったけど、わたしは残ってママさんと飲んだじゃない」

そつえばあのとき、さくらは上機嫌で柚希の母親と店に残っていた。

「あのとき、ママさんちよつと変なことだったの。瀬戸さんのお父さんの話になってさ、瀬戸さんがまだおなかにいるときに離婚したらしいんだけど、『私ね、元夫にそっくりな女の子が欲しかったのよね』。真逆に生まれてきてくれて、最初はがっかりだったわよ」

「真逆……？」

「そう、真逆ってことは、元夫にそっくりな女の子じゃなくて、自分にそっくりな男の子ってことになるでしょ？ ま、わたしも酔ってたから、そのときは訊き流しちゃったんだけど、碧とくつついたとき、思い出したんだ」

「思い出したんなら、そのとき教えてよ」

「だって、どう見ても男の子には見えないじゃん。違ってたら名誉棄損問題だよ。酔ってたときの会話なんだし、勘違いや訊き間違いかもしれないし……」

「そりやそうか……」

もし碧がさくらの立場だったとしたら、やはり確信がなければ、軽々しく口にできなかつただろう。

碧は枕を抱きしめた。またぞろ目に涙が滲んできて、手の甲でまなじりを擦った。

「で、男だとわかってショックなわけだ」

「だって、考えてみたこともなかったし……」

「いままで、全然、気がつかなかった？」

「気がつくわけないよ。さくらだって、男の子には見えないって、いまいったじゃん」

「そうだけど、碧はつきあってたんでしょ」

「……うん」

「あんた鈍いから、それらしいことあっても、気づかなかつたんじゃないの？」

「うん……？」

そういえば、住居が女子寮だと告げた途端、行けないといわれた。

あのとときは、だれか苦手な相手が女子寮にいるのかと思っただけど、寮に一年はほとんどいない。穏やかで謙虚な柚希に、避けたい相手がいるのも、しかもそれが同級生がほとんどいない場所なのもおかしい。

男だから行けないといていたのだろうか。

女子寮なので、当然男子は入れない。黙っていれば、柚希を男だと思っ人はいないだろうけど、もし柚希が大学に自らの事情を申告していれば、管理人も大学の関係者である寮に来ることはできないはずだ。

それに……。

「あたし、自分がもし男だったら、瀬戸さんとどうなったのかなって思ってたの。そのこと、瀬戸さんにいったら、逆のパターンを考えないんですか？ ってなこと訊かれたことあった」

「……………」

「そういえば、水着も持ってないっていわれたとき、なんでかなくて不思議だったんだけど……」

「……碧、あなたの鈍さは犯罪だよ」

「ええッ！ なんてよ」

「そこまでして、なんで気づかないのか、そっちの方がおかしいよ。だいたい、人並み以上に男に触ってきた過去の栄光があるじゃん。共通の感触つてもんがあるでしょ」

いちいち突っかかる言い方だが、いまはそんな言葉尻を捕えている余裕もない。

「ないってば。モデルみたいに痩せてるんだとしか思わなかったもん」

「男だと思わなくても、女にしては変だな、とかそういう疑問は抱かなかった？」

「うん。まったく、全然」

「……瀬戸さんも気の毒に……」

さくらは大きな溜め息をついて、頭を抱えた。

確かに、いま考えれば、思い当たることは色々出てくる。強く抱きしめ合ったあと、あんなにくっついてても気づかないのか、といった内容の疑問をぶつけられたこともあった。だけどそれもこれも、いま考えれば、なのだ。柚希を女と思い込んでいれば、疑問に思わない。

「あのさ、瀬戸さんって、ニューハーフなの？」

さくらの疑問に碧は思考を巡らせた。いわれて初めて、そのことに気がついた。柚希が『どの状態』なのかは、本人から訊かなかった。

パスポートがMなのだから、戸籍が男であることは間違いない。性転換手術をして、戸籍が男のままのひとはいるのだろうか。完全なニューハーフなら、水着を着ても問題ないだろうけど…。

「わかんない。亜衣ちゃんならたぶん、知ってるんだろうけど。でも、もしかしたら、まだなにもしてないんじゃないかな」

亜衣の名前を出した途端、碧は亜衣に会いたいと思った。他のだれより柚希を知っている人物だ。少なくともさくらと話しているより、建設的な話ができそうだ。

「なんで？」

「瀬戸さん、ピアスしてないの。二十歳までは故意に身体を傷つけないんだって」

「ふーん、だとしたら、すごいね」

碧は頷いた。この年齢の身体で性別を感じさせないのは、神憑り的だ。

「で、なにがそんなに悲しいの？」

「だって、男だったんだよ」

「あのさ、碧はもともと同性愛者じゃないでしょ。好きになった相手が同性だと思ってたけど、実は異性でした。駄目なの？」

さくらのいつてる意味はわかる。けれど、違うのだ。

碧は柚希を好きだった。柚希というひとの本質は女でなければあり得ないと思う。

柚希は女の美学だ。

柚希が女でなければ、もう、別人のような感じがする。

「碧、携帯、鳴ってるよ」

「……………」

だれからのメールかなんて、表示を見なければわからないのに、碧はそのメールが柚希からのメールとしか思えなかった。

「いいの？」

「……………うん」

「気持ちは、わからないでもないけど……………」

「うん……………」

「佐々木くんじゃないけど、碧ってやっぱり、男運、悪いのかな」

「そっか……………。そっかも……………」

「黄色い新幹線、探しに行くなら一緒に行ったげるよ」

「うん。ありがと」

碧は、濡れた目でどうにか笑って見せた。

「あーあ、一生で一度の珍しいカップルを間近で見られて、面白かったのに……………」

どうしてこの友人は、いつもひとこと多いのだろう。  
解せない。

第三十九話

碧の部屋

柚希は女の美学（後書き）

## 第四十話

テラス なにを好きになったの？

翌日碧は、午前中、大学に行つた。土曜日なので講義はないが、学祭が近いので、写真部に限らず、多くの学生が大学に来ていた。部室に入ると、松浦は碧の顔を見て息を飲んだ。

「目、真っ赤だよ」

「気のせいじゃないですか」

松浦は他の部員の視線を気にするしぐさをして、席を立った。

「ちよつと、出ようか」

来たばかりの碧を松浦は連れ出して、喫茶部のテラスに誘つた。碧は促されるまま、力なく従つた。

大学の喫茶部なので、それほどメニューは多くない。なにがいいかと訊かれて、なんでもいいと答えると、目の前に出されたのは紅茶だった。文句はいえないが、昨日の今日で紅茶を目の前になると溜め息をつきたくなる。

「あれから、柚希ちゃんに会えた？」

「会えました」

「訊いた？」

「訊くつもりはなかったんですけど、パスポート見ちゃって……」

「ああ、そうか。それで、その顔か」

松浦は事情を把握して、眉間にしわを寄せた。焚き付けた自覚があるの、碧の悲愴な様子に責任を感じているようだ。

「嫌いになった？ 気持ち悪いと思つた？ がっかりした？」

「…そんなんじゃないかって、なんか…意味がわからないっていうか…」

碧は柚希の部屋を飛び出してからずっと、混乱したままだった。時間を戻したかった。柚希の部屋で過ごした時間は、本当に愉しか

った。優しくて心地いい、幸せな時間だった。

「あたし、知らないままの方がよかった」

「それじゃ、柚希ちゃんがかわいそうだよ」

「…そっか。そうですね。じゃあ、やっぱり、どこかで知ることになったのかな」

「好きになつたら、相手に触りたくならない？ 触っていれば、いつかはわかるだよ」

「ある程度は触ってたんですけど、わかりませんでした。あたし、瀬戸さんが女だって思い込んでたから」

「きみは、柚希ちゃんのなにを好きになつたの？」

「…それは……」

碧はすぐに答えられずに、口を噤んだ。

綺麗な容姿に興味を持った。話してみたら、愉しくて心地よくて妙に安心した。

「冗談半分でキスしてみたら、どんどん意識して好きになつていた。はつきり線を引くとしたら、やはり、初めてキスしたあの日だ。けれど、そのまま、なにもなければ案外、そういえばあんな馬鹿なこともしたよね、で終わっていたかもしれない。少なくとも、友情の範囲で収まっていたような気がする。

けれど、だれにでも送る、とりとめのないメールのやりとりを繰り返して、柚希の言葉の中に謙虚さや優しさをみつけるたびに、小さな好意が積み重なった。結局、口づけや、柚希の綺麗な容姿だけで好きになつたわけではなかったのだ。

「とりあえず、明日まで写真部は休んでいいから。その充血した目であんな作業、無理だしさ」

「すみません」

「碧ちゃんは、学祭初日のカメラマンという役目があるからね。それまでに、元気になつてもらわないと困るし」

「えー？ 今年ってあたしなんですか？」

「二日目はさくらちゃんだよ。毎年二年が担当だから、頑張つて。」

資料用だから、コンパクトカメラのオートで適当に撮っても構わないし」

去年は、松浦がその役をしていた。他の部員に説明するのが面倒だから、仕事の内容を知っている、自分とさくらにその役割を回したんじゃないかと碧は疑った。大学中をくまなく歩き回らないといけないので、地味に重労働でもあるのだ。

「それから、学祭の個人写真、出品する予定で実物出してないの、碧ちゃんがラストだから、早めにね」

作品展の責任者である松浦は、すっかりくぎを刺すことも忘れなかった。

写真部の活動を免除されたので、寮に帰ろうかと思ったが、文学部の方に寄ってみることにした。今年の学祭は一、二年合同で、たこ焼きかお好み焼きの屋台を出すという話になっていた。

空き教室の809号室を、文学部が学祭まで借りているので、だれか来ていれば、そこに集まっているはずだった。

809号室はゼミで使用されるような小さな教室で、机や椅子はすべて移動できる。高校の頃を思い出すので、どこか懐かしくなる。ノックして扉を開くと、教室には亜衣と佳奈がふたりだけいた。ふたりとも、妙に難しい顔をしている。

「碧先輩、おはようございます。写真部はいいんですか？」

「おはよ、亜衣ちゃん。今日と明日は個人的に休み」

「写真部、大変ですね」

「でも、今年は亜衣ちゃんのブログのおかげで、かなり助かったよ」「ならいいんですけど……。寝不足ですか？」

「ちよつとね」

亜衣は碧の目の充血を、写真部の作業によるものだと思ったようだ。一晩中、泣いていたと思われなかったのは幸いだった。寝不足の方が、聞こえは、はるかにいい。どうやら、柚希から昨日の話が伝わっているわけではなさそうだ。

「結局、たこ焼きとお好み焼き、どっちになったの？」

「それなんですけど、どっちも難しいんじゃないかって……」

「え？　なんで？」

「ほら、学祭も今年はエコがテーマでしょ」

佳奈が頬杖を突いて、沈んだ表情をしていた。

「エコがテーマだと、なんかまずいの？」

「使い捨てのトレーや紙皿が、今年使えないんだよ。学食の食器を借りるんだけど、たこ焼きもお好み焼きも、結構食器を汚すでしょ。水や洗剤も抑えたいし、洗い物も大変だから、もうちょっと他にないかなって、話してたの」

佳奈はこの屋台の責任者だった。亜衣が副責任者だ。部屋に入っただきから、ふたりとも、どこが元氣のない様子だったが、理由がわかった。

「エコがテーマって、難しいね。粉もんいいのにな」

「そうなんだ。なんかいいアイデアない？」

「うーん……、焼きそばやもんじゃも洗い物は似たような感じだよね。そうだ、えびせんは？」

「えびせん？　なにそれ？」

「えびせんってあるでしょ。駄菓子の。エビ色の大きな楕円のせんべい。あれにお好み焼きのソースを塗って、青のりと鰹節の粉とマヨネーズかけて食べるの。半熟の卵焼いて乗せたりもするし、天かすとかネギとか色々。あれだと、ほとんど火も使わないし、食器もあんまり汚さないんじゃない？」

「すごい、それいいじゃん。亜衣ちゃんどう？　食べたことある？」

「食べたことはないけど、おいしそうだし、やってみたいです。トッピングのアレンジもできそうですね」

「うんうん。じゃあ、他とかぶってないか、わたし、いまから実行委員のとこ行って訊いてくる。ちよつと待ってて」

佳奈は慌ただしく扉から出て行った。

思いがけず、一番会いたいと思っていた人物と二人になれた。ど

うちにしても、メールで連絡を取るつもりだったから、碧はさつさと切り出すことにした。

「ねえ、亜衣ちゃん、今日ひま？」

「これが終わったら、ひまですよ」

「一緒に飲まない？」

「いいですね。佳奈さんやさくらさんも誘いましょうか？ 柚希は

…今日いないんだっけ」

「ううん、ふたりがいいの。瀬戸さんのこと訊きたいから」

「……………」

亜衣は、さつと笑みを引つ込めた。

「碧先輩、もしかして…………？」

「昨日、知ったの。瀬戸さんちでパスポート見ちゃって。亜衣ちゃんに、教えて欲しいことがいっぱいあるんだ」

「…………わかりました。じゃあ、いつそのこと、うちで飲んで泊まっていきませんか？ 寮って宿泊許可、出るんですか？」

亜衣も、マンションで一人暮らしであることは、以前一緒に飲みに行ったときに訊いていた。話す内容が内容だけに、部屋を提供してもらえるのは有難かった。

「うん、それは大丈夫」

「夕方、寮に迎えに行きますから」

「ありがとう、亜衣ちゃん。ごめんね、無理いつて」

「いえ、全然」

そのあと、佳奈が息を弾ませながら戻ってきた。えびせんが、他の学部やクラブとかぶってなかったなので、その場で申請してきたと聞いた。

「一度、試食会しないと駄目だよな」

さくらや亜衣の話に頷いていたが、昨日ほとんど寝てなかったの  
で頭がぼんやりしてきた。

買い出しや学祭二日目は店番にも参加するからと言いついて、碧は先に寮に帰った。



第四十話

テラス なにを好きになったの？（後書き）

## 第四十一話

### 亜衣の部屋 柚希は美少年でした

いざ、寮に戻ってきたが、眠れそうでも眠れなかった。

目を瞑っても、いろいろな感情が溢れてくる。頭の中の情報を、うまく整理できない。

断片的にうとうとしたが、結局あまり眠れずに起き上がった。寮長に今日宿泊することを伝えて、掃除当番をこなし、シャワーを浴びた。

バスタオルで身体を拭いていると、足の爪に目が留まった。昨日の出来事がよみがえる。

柚希は、同じ色の自分の爪を見て、思い出してくれるだろうか。それとも、思い出すこともなく、別の色のマニキュアを塗るのだろうか。

碧は、身体の、どの部分より優しく丁寧に、足の爪の水気を拭いた。わずかなかけらも失いたくなかった。

夕方、亜衣が車で迎えに来てくれた。

薄緑の軽自動車を見て、この夏休み、亜衣が免許を取りに行っていたのを思い出した。

助手席に座って、車内の様子を眺めた。女の子らしい装飾だ。

「そついえば、瀬戸さんと車で温泉行くなってブログで見たことある。行ったの？」

「あれ、読んだんですか？ 行ってませんよ。もう行かないと思います」

「そつなの？」

「自分の好きなひとが他の子と旅行に行くとか、嫌じゃないんですか？」

車が信号で止まった。停車もなめらかだった。免許取り立てにし

ては、運転がうまい。

「最初はちよっと嫌だったけど、いまは平気。あたしだってさくらや他の子と旅行に行くことだってあるだろうし」

「碧先輩がさくらさんと旅行に行くのと、私が柚希と旅行に行くのとでは、意味が違いますよ」

「うん、いまとなつてはね。昨日までは、一緒だと思ってたから……」

「柚希と温泉旅行に行こうって初めて計画したのは、中学のときなんです。二十歳になったら絶対性転換手術するって心待ちにしてたから。それで、完全に女の子になったら、お祝いがてら、一緒に温泉行こうって……」

「そうだったんだ……」

やはり、柚希はまだ、身体になにもしていなかったのだ。碧は複雑な気持ちになった。

「最近になって、手術はしないことにしたみたいですよ」  
「え？」

「碧先輩を同性愛者にしたくないって」

「……………あたし、どうせなら、手術した後に出会いたかったな……」  
そしたら、こんなに迷ったり悩まなかったと思う。心も身体も女の子だったら、男で生まれてきたひとだと知っても、異性として意識することはなかった。

柚希に、男に対する幻滅も期待も抱きたくなかった。

コンビニの駐車場で車が停まった。簡単な夕食とアルコールを買い込む。

碧はお釣りを受け取る間、煙草が並んだ棚をぼんやり眺めた。

「碧先輩、煙草吸うんですか？　うち別に大丈夫ですよ」

「うっん、違うの」

持田が愛飲していた銘柄が見あたらないなと思ったのだ。よく見たら、見つけられた。どうしてわからなかったのだろうと考えて、パッケージのデザインが変わっていたのだと気がついた。

何年も思い出さなかったのに、今頃どうしてこんなときに思い出したのか、考えた。

久しぶりに、車の助手席に乗ったからだ。

つまらないことでも、人間、完全には忘れられないものらしい。

なのに、デザインが変わっているのが皮肉だった。時間の流れとは、こういうことなのだろう。

亜衣のマンションは、柚希のマンションの近くだった。おそらく歩けば五分もかからない。建物の陰になって見えないが、土地勘のない碧でも、歩いて行き着けそう。

部屋に通されて、座布団に腰を下ろした。寮より広いが、作りは似ている。1DKといわれる部屋だ。寮と違って、キッチンスペースがちゃんと、確保されていた。

テーブルの上に購入してきた揚げ物やサラダを広げて、ビールを並べた。

しばらくは、視界に入るテレビの話題を肴にビールを飲んだ。亜衣も、本題に話を振らなかつた。けれど、寝不足と変な緊張感から、いくらか飲まないうちに、碧は酔ってきた。

「碧先輩、大丈夫ですか？ もう寝ますか？」

「寝ない。だって、話、訊きたいんだもん」

「柚希のなにを訊きたいんですか？」

「なにもかも。だってあたし、瀬戸さんのこと、なにもわかんないし……」

碧はビールの缶を見つめて呟いた。爪の先でたたくと、軽いアルミの音がする。

「そうだな、いろいろ訊きたいけど、瀬戸さんの名前……」

「柚希？」

「うん。柚希って本名なの？ 源氏名なの？」

「源氏名って、芸者じゃないんだから……。偽名かどうかってことなら、本名です」

「なんでそんな名前なの？ 太郎とか次郎って名前だったらあたしだって、どんなに女に見えても、男かなくて思ったのに」

「柚希のお母さん、女の子しか産む気がなかったらしいですよ。柚子の季節に生まれるから柚希って名前しか考えてなかったそうです」  
「じゃあ、冬の誕生日なんだ」

「いえ、夏です」

「へ？」

「柚子の花の季節なんですよ、誕生日」

「なんなの、そのややこしさは……」

碧は思わず脱力しそうになった。苦笑して肩を落とすと、ビールに口をつけた。

知り合ってから柚希はひとつ、誕生日を通り過ぎたことになる。

誕生日すら知らずに、いままでつきあってきたのだと思うと、また気が重くなった。

「亜衣ちゃんは、いつから瀬戸さんが女じゃないって知ってたの？」  
「最初から。初めて会ったとき、柚希は美少年でしたから」

以前、写真部の部室で中学からの同級生だと訊いたことがある。

六年越しらしいので、出会いは中学一年ということだ。

「……そうなんだ。好きになった？」

「ええ、好きになりました。わたし、面食いなんで」

頬杖を突いた顔は、穏やかな笑顔だった。

「好きなひとが女の子になっていくのを、見守ってたんだよね」

「見守るつもりはなかったんですが、結果的に、そうになりました」

「辛くなかった？」

「多少は。でも、柚希は柚希なんで」

「すごいね。中学のとき、そう思ってたなんて。あたしなんて、中学のときはめちゃくちゃだったよ。いまだって、瀬戸さんに、どう向き合っていいか全然わからないのに……」

「男だってわかって、ショックでした？」

「うん。目の前が真っ暗になって、頭の中が真っ白になった」

亜衣は小さく嘖き出した。

「真っ暗になって、真っ白になったって、状況わかるんだけど、面白いですね。なんか一瞬、パンダを想像しました」

「笑い事じゃないよ」

碧が頬を膨らませると、今度こそ亜衣は笑いが止まらなかった。

途中でピザのデリバリーが届いた。

柚希と一緒に食べたピザを思い出した。

あのとき、自分の発言で気まづくなっただけど、男の柚希がどんな気持ちだったかと思うと、落ち込みそうだ。あのときだけでなく、いままでに、たくさんのすれ違いを重ねてきたことになる。

「瀬戸さん、どうして亜衣ちゃんとか、つきあわなかったんだらう」  
「わたしも以前、そう思いました」

悔しいとか悲しいとかではなく、正直な疑問だった。亜衣ほど柚希を理解しているひとはいないと思う。自分のすべてを知ったうえで好きになってくれたひとを、柚希はなぜ選ばなかったのだらう。

妊婦になったらヌード写真撮らせてくれ、などと嘯み合わない要求してくる人間に、どうして心を傾けたのだらう。

「あたしは瀬戸さんが同性でも異性でもいいなんて、いえない。ずっと女だと思ってたし、同性だから愛情も純粹なんじゃないかって思えるから。まして、自分が原因で手術しないなんていわれたら、どうしていいかわかんない。受け止めきれない」

情けないけど、亜衣とは度量が違いすぎる。

それでも、柚希を忘れられるのかと問われれば、首を横に振ってしまう。

「親友にも、才能と相性があるんですよ。わたしと柚希は、恋愛じゃなくて、そっちだったんで。柚希が嫌がらなければ、どこまでもつきあいます」

「亜衣ちゃん、あたし本気で尊敬する」

「でしょ。ご遠慮なく、どんどんどうぞ」

「いまどきの若者はズーゾーしいなー」  
どこかでだれかにもいったようなことをいって、碧は呆れた顔を  
してみた。

第四十一話

亜衣の部屋

柚希は美少年でした（後書き）

## 第四十二話

### 亜衣の部屋　へき色のマニキュアと黄色い新幹線

時計は十一時を回っていた。ベッドの横に布団を敷かせてもらった。パジャマまでは持ってこなかったの、下着で寝ていいかと尋ねたら、風邪を引かれたら写真部に恨まれるからと、亜衣が部屋着を貸してくれた。少し大きかったの、袖と裾を折る。

布団の上で裾を折っていると、足の爪を見て亜衣がいった。

「あ、そのマニキュア、もしかして袖希の？」

「うん。昨日部屋に行ったとき、塗ってもらったの」

「笑えますよね」

「え？　なんで？」

「ひと月くらい前だったかな。袖希、へき色のマニキュア探してて、やっと見つけたって喜んでたんですよ」

「へき色……？」

「紺碧の碧ですよ」

「あ……あたしの名前……？」

「やることが乙女でしょ？　女の子を好きになったからって、すぐ男らしくなるわけじゃないんだろうけど」

「そうだったんだ。あたし、全然気がつかなかった……」

この爪の色に、そんな秘密があったのかと、碧は胸が温かくなつた。袖希にとつて、足の爪にマニキュアを塗ることは、珍しくなかったのだからけど、この青と緑のどっちつかずの色は、自分を思ってくれた色だったのだ。

足の爪がいつそう大切な宝物のように思えてきた。

電気を暗くしてそれぞれの布団にもぐりこんだ。

「碧先輩、寝てます？」

「ううん」

「碧先輩、まだ混乱してるのにこんな話すると、よくないかもしれないけど、柚希本人から訊くよりマシだと思っんで……」

亜衣はそこで、言い淀んだように息をついた。嫌な緊張感が漂った。

「柚希は、たとえ手術しないで男の身体のままでもいい、セックスできるかどうかは微妙なんです。長い期間、ホルモン剤を服用してきましたから」

「……ホルモン剤？ 女性ホルモン？」

「はい。わたし、柚希を強姦したっていったでしょ。あのとき、刺激しても、反応しなかったんです。いまは薬飲んでないから違う結果になるかもしれないけど、柚希とつきあうなら覚悟してください」  
「……なんか、いままであたし、瀬戸さんのなにを見てきたんだろっ……」

薬という単語に、碧は学食での柚希と亜衣の会話を思い出した。

あのときいつていた薬とは、ホルモン剤のことだったのか。あのときすでに、柚希は薬を飲むのを止めていたのだ。それはつまり、性転換手術の中断を決意していたということだろうか。

「碧先輩のせいじゃないですよ」

「なにも知らないから、教えてもらいたくて来たけど、余計に混乱してきちゃった」

「すいません。でも、碧先輩が望めば、柚希は手術に踏み切ると思っていますよ」

「そんなの、もっと無理……」

「ですよね」

寝返りを打って目を閉じた。少しずつ、睡魔が訪れてきた。

「柚希の場合、もし身体的に問題がなくても、できない可能性が高いんですよ。気持ち悪がって、一度もエロ映像とか見たことないから」

「……本当に、清らかなんだ……。女のあたしでも、彼氏の家とかで見たことあるのに……」

「清らかっていうか、やつぱり異常ですよ。ゆがんだ潔癖症で、男に嫌悪感のある性同一性障害ってことなんですかね……」

亜衣は溜め息をついた。

「冷静に考えれば、碧先輩は柚希に向いてないと思ってます。ウエルカムセックススレススってタイプじゃないだろうし。それでも柚希を見捨てないでほしいんです。結局、わたしは柚希の味方なんで、他の犠牲は二の次なんですよ。ひどいでしょ」

「うん、ひどいね。でも、あたしはそういうの…嫌いじゃないよ。わかりやすいし……」

もつとちゃんと訊きたいのに、大事な話なのに、瞼が重くなつて、碧はとうとう眠ってしまった。

夢の中で写真を撮っている夢を見た。シャッター音が聞こえた。

夢が現実はつきりしないまま、瞼は重く、開けられなかった。隣のベッドからひとの動く気配を感じた。さくらにしては、違和感がある。いつもと違う枕の感触。いまどこで寝ているのか、うつつの中で判断できなかった。

少し離れた場所から、大きさを絞った話声が聞こえてきた。

「……そっか、時差ないんだ。近いもんね。寝顔かわいいですよ。大学で、あんまり深刻そうだったから、部屋に連れてきちゃった」  
眠くて、話の内容がわからない。わからないなりに、これは現実かな、と思い始めた。

「しばらく無理なんじゃない？ ……うん、大混乱中だよ。落ち着いたら、ちゃんと話せるって。……もー、元気出してよ。うん……あ、そうだ、マニキュア、嬉しそうだったよ……」

声が聞こえてくるのに、意識が沈んでいく。碧は結局、途中で完全に眠ってしまった。

朝、目が覚めたら九時を過ぎていた。こんな時間まで寝たのは久しぶりだ。

昨夜、夢を見ていた気がするのに、まったく思い出せなかった。

部屋に亜衣の姿がない。日曜日なので大学は休みだが、大丈夫なのか心配になった。寝ていた自分のせいで予定が狂ってしまったのではないだろうか。そのために、出かけてしまったのだろうか。

とりあえず、布団をたたんでクローゼットに入れる。服を着替えて、洗面所を借りた。鍵もかけずに帰ることはできないので、碧は亜衣が部屋に戻るまで、待つしかない。

ベッドの横のカーテンを開けるとベランダだったので、置いてあったクロックスを履いて出てみた。

まだ開店してない商店や、規模の小さなスーパーが見えた。道路にはそれほど車が走っていない。少し離れたところに電車の高架が見下ろせるのは、五階の部屋の高さだからだ。

握りしめた携帯を見つめた。柚希の部屋を飛び出してから、携帯を開いてなかった。柚希からのメールが来ていても来ていなくても、動揺することがわかっているので、携帯を開くのが怖かった。けれど、ずっとこのままでいられるはずもないし、柚希のアドレスを着信拒否にすることも考えたくない。

碧は携帯を開いた。メールの受信ボックス開くと、柚希からのメールは一通だけあった。

『ずっと黙っていて、すいませんでした。けれど、碧さんに対する気持ちは、偽っていません』

読めば落ち着かない気持ちになるのはわかっていたのに、やはり胸の鼓動で息が苦しくなった。けれど、少なくとも、このメールを送ってくれたとき、柚希は自分に思いを寄せてくれていたのだ。逃げ出した自分に、愛想をつかせてなかったのだ。そのことが嬉しいと思った。だから、返信することを決意して、携帯に指を動かした。『あのときは、びっくりしてごめん。あたし、瀬戸さんのこと嫌いになったり軽蔑したりはしてない。でも、次に会ったとき、いままと同じ気持ちでいられるか、わからない。しばらく待ってて。レスはしないでください』

動揺のままのメールは、支離滅裂な文章だ。それでも、誠実な柚希に、自分がいま出来る精一杯の誠意を込めた。

亜衣に話を訊けてよかった。柚希がこれまで歩いてきた道の一部を知ることができた。

気持ちが変わっていない。

柚希をあきらめられない以上、遅かれ早かれ、自分は柚希の性別を受け入れざるを得ない。けれど、そんなことが、本当にできるのだろうか。

柚希のすべてを受け入れるほどの力が、自分にあるのだろうか。

もし、柚希を失ったらどうなるのだろうか。いつか、何年か先には、もっと好きなひとができるのだろうか。

かつて碧は、持田を好きだった。あんなに悲しかったはずなのに、愛飲していた煙草のパッケージが変わっていたことにも、気づかなかった。

時間が経てば、柚希への想いも、同じように色褪せるのだろうか。グロスを分け合うようなキスをしたことも、夏の暑さの中で肩を抱かれて告白されたことも、夕立の雨音を聞きながら抱きしめ合った抱擁も、風化してしまうのだろうか。

そして、ふとした瞬間に思い出して、そういえば……と穏やかな気分で回想するにとどまるのだろうか。

「碧先輩」

ふいに名前を呼ばれて振り返った。

「亜衣ちゃん、どっか行ってたの？」

「コンビ二に。サンドウィッチ食べますか？」

「うん、食べる」

ベランダから部屋に戻ろうとしたとき、高架を新幹線が通った。

「あの高架、新幹線のだったんだ」

「結構、うるさいでしょ。窓開けると、テレビの音も聞こえないんです。だから、家賃も安いんですけどね」

「ふーん。でも学生なら、安いほうがいいな。あ、そうだ。新幹線

の高架を上から見下ろすなんて、あんまりできないし、写真撮つところ。いい？」

「もちろんいいですけど、碧先輩って、結構つままないものでも撮るんですね」

「携帯で撮るのは、日記代わりだよ」

そういつて、碧は携帯をカメラモードにして、高架にレンズを向けた。さつきとは逆方向から、新幹線の音が聞こえてきた。どうせなら、新幹線も画面に収めたい。ボタンに指をかけてタイミングを計る。碧の携帯はシャッターのタイミングが遅れ気味だ。早目を意識して、シャッターを押した。

「あれ？ ねえ亜衣ちゃん、新幹線の高架って、他の電車も走るの？」

「いえ、わたしも電車とか詳しくないんで……。でもいまの、新幹線じゃなかったですよ」

碧はいま携帯で撮った写真を再生した。気を付けていたのに、先頭部分は切れてしまった。

「なんか派手な黄色…あ、幸せのドクターイエロー……？」

「なんですか、それ？」

「見たら幸せになれるっていう、黄色い新幹線があるんだって。佐々木くんがいつてたの。いまのそれかな。メールで送って訊いてみよう」

サンドウィッチを食べて喋っていると、佐々木からレスが来た。

『スゲー、駅で停車してんじゃなくて、走ってるドクターイエロー撮ったって、スゲーよ。一眼持ってりゃよかったのにな。惜しかったよな。なにはともあれ、おめでとう。碧ちゃんの男運の悪さは、これで終了したぞ』

「………たく、撮り鉄ってやつは……。まあいいけどさ」

頭を掻きながら佐々木のメールを亜衣に見せた。亜衣は文面を見て面白かった。

「碧さん、男運、悪いってことになってるんですか？ でも、悪い

かもしれませんね。袖希も一応、男ですし……」

「なんかそれ、いまだに抵抗ある。なんで瀬戸さんが男なわけ？」

「それを今更いわれても……」

亜衣は頭を抱えて苦笑した。碧は一緒に笑いながら、少しだけ、袖希の性別を認識しかけている自分に気がついた。

学祭まであと二週間になった。

部室に行けば、柚希に会えた。けれど、大勢で作業をしているので、意識的に距離を置けば、あいさつ程度の言葉を交わすことさえ、少なくなってしまう。

学年も学部も違うので、学祭が近づけば、それぞれの持ち場の仕事も入ってくるし、その合間に写真部の作業に来ることが増えれば、顔を見る機会も減っていく。

連絡を取り合わなければ、擦れ違いばかりになる。

夏休みのときは、二週間以上会わないこともあったのに、こんなに寂しいとは思わなかった。メールのやりとりだけで、充分愉しかった。いまは寂しくてしかたがない。

ときどき見かける柚希の姿は、いままで通り美しい。本当に、男なんだろうかと不思議に思う。それでも注意深く見つめれば、脚であったり腕の筋肉であったり、女より直線的で力強いラインを感じることが多少ある。

いままでと同じ声、同じしぐさ。なにも変わらないのに、碧はどうしても同じひととは思えなかった。

どうして柚希が男では駄目なんだろう。

理由はわからないけど、違和感がある。

寂しくて会いたくてしかたがないのに、会いたいのは同性の柚希だ。

ならば、自分は柚希が女だから恋愛感情を抱いたのだろうか。それもまた、おかしな話だ。同性愛者でもないのに。

柚希と出会ったとき、同性の後輩としか認識しなかった。交流を重ねて、好意が愛情になった。そのとき碧は、同性に対する恋慕をそれほど悩まずに受け入れた。

いま、好きになった柚希が男だとわかって、行き詰っている。柚希の性別をどう受け入れていいか、わからなくて戸惑っている。

「はあ……」

「はあ……」

溜め息が、目の前の佳奈と重なった。

809号室で、授業の空き時間を、佳奈と文学部の屋台の雑用に充てていた。

水色のコピー用紙にチケットをプリントして、オリジナルのハンコを押していく作業だ。

佳奈はコピーした紙を、カッターで切り分けている。碧は彫刻刀を手に、消しゴムと格闘していた。手先の器用さが求められるこんな作業は、あまり得意ではないが、自ら進んで引き受けた。カッターで切り分ける作業は、写真部の名画の作業と同じだったので、辟易していたのだ。

「元気ないね、佳奈」

「うーん、まあね」

尋ねると、佳奈はカッターナイフを置いて頬を机に落とした。

「どうかしたの？」

「こないだわたし、誕生日だったの」

「おめでとう。ひとつおばさんになって落ち込んでるの？」

「違うよ。彼氏とデートしたの。遊園地行って、食事して、ホテルで一泊……ってお決まりだけど、ちょっと、ときめく演出を用意してくれてたの」

会話の内容とは裏腹に、佳奈は相変わらず浮かない表情だ。

「よかったじゃん」

「その日、生理だったんだ」

「あらら」

「気まずいでしょ」

ようやく状況が読めた。誕生日のデートで生理日だったのなら、どういいつくろっても気まずさは残る。デートのファイナルがホテ

ルでお泊りなら、なおさら。

「でも、しょうがないじゃん」

悪気があるわけじゃないし、どうしようもないことだ。それは、相手も大人なんだから、理解してくれなければ困る。

「前もってわかってたら、遅らせる薬とか飲んどいたんだけど、彼氏もサプライズで準備してくれてたから……」

「薬で遅らせるの、NGだよ。高校のとき、修学旅行でそれした友達、それ以来、生理痛がきつくて、大変なんだから。体質にもよるみたいだけど、デートくらいで飲むもんじゃないよ」

「そうなんだ。じゃあ、どのみち駄目だったんだ」

「そう、運命だよ」

「碧はそういうの、いままでなかった？」

「あつたけど、最初にいつっちゃう。今日のデートで寝るつもりなら、生理中だから無理だよって」

「うわ、すごい。彼氏にドン引きされない？」

「さあ、されたかどうかわかんないけど、そういわれると男はかっこつけて『そればかりじゃないから、今日は映画に行こう』とか提案してくるかな」

「さすが、恋愛の達人は違うなあ」

「ちよつと……」

どうも最近、みんなの見解と実情がずれている気がするならない。去年ならそんな評価をつけても甘んじて受け入れたけど……。

「なんか最近、つきあうの、しんどいなあって思っちゃう。わりとまだ好きなんだけどさ……」

大きな溜め息とともに、佳奈は継るような目で碧を見つめてくる。「なんで？」

「同級生でしょ、わたしのとこ。そしたら、金銭面とか、条件同じじゃない。でも彼氏はデート代出そうとするの。それに気を遣うのが面倒だなんて」

「へえ、そっか」

「碧は彼氏、年上、多いもんね」

「うーん、そういえばそうかな……」

「それだけさせといて、シメのHもさせないってのがひどいのかな、って。でも、それじゃ、まるで援助交際と一緒にじゃない。普通に同級生とつきあってるだけなのに、なんでなんだろう」

「シメのHって、鍋の雑炊じゃないんだから……」

碧は呆れるように頭を抱えた。

「金銭的なことだけじゃなくて、なんか色々……。お化け屋敷でわたしより怖がっていると見たら、幻滅しちゃうし、重い荷物持ってたくなかったら気が利かなくて思うし。あゝあ、高校のときはよかっただけ。ときめきが全部だったもん。奢ってもらうにしたらって、ハンバーガーとかアイスクリームくらいだったしさ」

「うーん、そういわれれば、そうかもね」

「碧もこんな気持ち、あった？」

「年上だと、全面的に甘えちゃうかな。年の近いひとは長続きしなかったし、長くつきあったらどうなったのかな。荷物持ってたときは、あたしはさっさと頼んじゃうよ。お化け屋敷で怖がったら、どうだろう、がっかりするかな。ひとにもよるだろうけど、面白いとか可愛いって思うかも」

碧はふと、柚希のことを思い出した。いままで、友人とこんな風に『彼氏の話』になっても、柚希のことは、思い出さなかった。たとえば恋愛感情を抱いていても、『彼氏』の存在に位置づけるには、かけ離れていたからだ。

なのにいま、そういえば柚希は年下なんだと思い至り、柚希を思い出した自分に、ちょっと驚いた。

「碧はさばさばしてるしね」

「でも、そういう気持ち、わかるよ。女友達と一緒にいる方が気楽だし、楽しいもん」

恋愛は結構ストレスだ。

片思いのときは、ただドキドキして純粋な気持ちでいられても、

いざそのひとつきあえば、ぶつかり合うことも多い。それが、些細な原因であれば、なおさらストレスは溜まる。

「だよ。とにかく、せめて金銭面だけは割り勘にして欲しい」

「彼氏も友達に恰好つけないんじゃないかな。友達と喋ってて、デート代割り勘にしてるって、いいたくないのかも」

「面倒くさいよ、男のプライドって。女友達とつきあうみたいにな、気楽で愉しくて、自然に割り勘できて、それでもって高校のときみたいに、ときめく恋愛って、できないものかな」

「……………」

碧は思わず息を飲んだ。いまの無理難題が、柚希には全部あてはまるのでびっくりした。

柚希のそばにいるのが居心地いいのは、そんな理由もあったのだろうか。

「……………碧、その消しゴムハンコ、なに掘ってるんだっけ？」

「え？ えびせんの手ケットに押すハンコだよ。本のイラストと、文一、文二の文字。文学部一年二年の略」

「どう見ても、そうは見えないよ」

「……………努力が足りないんじゃない？」

「ありません！」

佳奈は目を吊り上げて、きっぱり言い捨てた。

第四十三話

809号教室

同じ席、

同じくぐぐぐ、

同じひひひ

(後書き)

足の爪がこんなに早く伸びてしまうものとは、碧は思ってた。た。

柚希の部屋を飛び出してからそろそろ一か月。足の爪が限界に達してしまった。

明日は学祭初日である。初日はカメラを担いで一日中、キャンパスを歩き回るので、歩きやすいスニーカーを履くしかない。しかたがないので、碧は足の爪を切った。

すでに、根元はマニキュアが姿を消していた。切った部分がなくなっただので、碧色に染まった部分は、ずいぶん小さくなった。

伸びた爪の長さの分だけ、柚希と言葉を交わしていなかった。柚希に触れていなかった。

柚希に塗られたマニキュアをすべて失ったら、元に戻せないような気がしてくる。

早く、なんとかしたかった。せめて、話だけでもしたい。柚希はまだ、自分のことを見限っていないと信じたい。けれど、一度きりかけを失うと、どうすればいいか、わからなかった。

いいかげん、往生際が悪いのは自覚している。けれど、柚希に対応できる自信は、まだなかった。

「明日、学祭で会えるよね……」

写真展。法学部の屋台。それからエントラスホール。あとはお笑い芸人のライブ……？

お笑い芸人のライブで会っても、切実な心情を告白するのは、難しい。

会いに行く勇氣はないけど、もし偶然会えたら、なにかを変えられる気がした。

(神様どうか、明日、瀬戸さんに会わせてください)

普段、信じても拝んでもない神様に祈ってみる。さくらが訊いたら、罰が当たるよ、と呆れそうだ。

碧は、落ち着かない心地で、その夜を過ごした。

学祭初日は、大変な騒ぎだった。

去年経験してるからわかっただけはいたが、今年は写真を撮らなければならぬので、スケジュール表を手放せなかった。

初日しかないお笑い芸人のライブと、夕方から同じステージで行われる軽音部のライブは、絶対にミスが許されない。本当はチケットが必要だけど、腕に写真部の腕章をつけているので、フリーパスだ。

それから、実行委員の開会のあいさつも写真に収める必要がある。こうしてスケジュール表に印を付けていくと、かなりの時間を拘束される。

「なんか、面倒くさい……」

今更ではあるけれど。写すのが動画でないのがせめてもの救いだ。

午前中は、あっという間に終わった。写真部の部室どころか、エントラスホールに行く時間もない。

昨日の夕方、名画は無事展示できた。小さな写真を貼り合わせていたときは、本当にこれが、あの有名な絵画になるのかと、不安だったが、すべてのパーツを貼り合わせ、一枚になったとき、思っていたよりクオリティーが高く感動した。

撮影に協力してくれたひとたちが、どんな反応をしているのか、早く見に行きたい。

学祭の写真は記録用だから、コンパクトカメラでいいといわれたが、去年松浦が写した写真を見てしまったので、一眼レフにした。人物は苦手なのに、重いカメラで写す意味があったかどうか疑問だった。

お昼に文学部の屋台に行ってみると、大変な盛況ぶりだった。佳

奈とさくら、それに一年の数人が持ち場の時間だったようで、奮闘していた。

「さくら、大丈夫？ 人手、足りてる？」

「人手は大丈夫。思ってた以上に数が出て、材料が足りなくなってきたの。亜衣ちゃんと男子がいま、買い物に行ってる」

「うわあ、そうなんだ。明日もなんかあったらやばいね。佳奈も明日はここばかりいられないだよ」

「うん。二日目はクラブの方に顔だすから。でも、ずっとじゃないよ。こっちも来るから」

佳奈はそうだったが、今日屋台にいるさくらのほうが、明日、初めて屋台に入る碧よりも要領がわかっている。なにかあったときに対応できる人間は、ひとりでも、少しでも長い時間、確保しておくべきだ。

「さくらが明日写す予定なので、今日もやってるの、あたし撮っとくよ」

「本当？ 助かる。あのね、屋台の様子と、ペットボトルハウスあとは……あ、理学部のお化け屋敷お願い」

「お化け屋敷って、撮影できるの？」

「看板と出入り口のお客さんでいいらしいよ。副部長がいつてたから」

「オッケー、わかった。じゃあ、昼から行ってくる」

「えびせん、食べてく？」

「うん。チケット買ってるし、いま食べる」

碧は財布からチケットを出して、さくらからえびせんを受け取った。

「試食会でいろいろしてみたけど、結局、このシンプルなのと、卵チーズを乗せたスペシャルになっちゃったね」

えびせんに噛り付きながら、こっそり辺りを見廻した。柚希の姿は見当たらない。さくらに、柚希がここに来たか訊きたかったが、やめた。またなにか、いわれるのが嫌だったからだ。

「手間と採算を考えて、無難に落ち着いたのが、ちょっと悔しかったな。エビアボカドとかパラペーニヨチキンとか、おいしい案もいっぱいあっただけに」

「来年、考えてみる？」

「そうだね」

食べ終わってからもしばらく喋っていたが、一年に呼ばれて、さくらは持ち場に戻っていった。

第四十四話

M大 学祭初日 えびせん（後書き）

夕方の軽音ライブまで時間が空いたので、お化け屋敷を撮影した。そして、学部やクラブの屋台を撮影しておこうと場所を移動する。

どこにいても、碧は視線の端で柚希を探した。他の友人や顔見知りにはいくらでも会えるのに、柚希には、なかなか会えない。昨年つきあっていた元彼の二人と出くわしてしまったのが、いっそう虚しかった。

法学部の屋台まで来たとき、碧は撮影を言い訳にして、立ち止まった。レンズ越しに探してみても、柚希の姿は見つからなかった。

「碧さん」

がっかりしていると、探していたひとの声が、背中から届いた。

「瀬戸さん……いま、屋台担当？」

振り返って見た柚希の表情は、いままで見たことがないような複雑な表情だった。ぎこちなさと、戸惑いを隠しきれないまま、無理に笑おうとしていた。碧は、自分も似たような顔をしているのだから、うな、と思った。

そして、そんな顔をさせていることが、そんな顔をしているのに声をかけてもらえたことが、嬉しかった。自分はまだ、見捨てられてないと思われた。

「あの、…お昼、食べました？」

いまは二時近い時刻だ。柚希にしては間の抜けた発言である。

「えびせん、食べたよ」

「じゃあまだ、入りますよね。カレー、食べていきませんか？」

柚希の震えそうな声からは、緊張感が伝わってくる。

「……うん、食べる」

柚希がほっとして笑みを浮かべたのが、胸についた。まともな口を効いたのは、柚希の部屋を飛び出して以来だ。

鞆から財布を取り出そうとしたら、柚希がそれを制した。

「チケットがあるので、これ、使ってください」

「いいの？ お金出すよ」

「いえ、一年は五枚購入がノルマだったんです。二日で五食カレーを食べるのは、さすがに無理なんで、手伝ってもらえると助かります」

「じゃあ、奢ってもらおう。ありがとう」

柚希はぎこちなく頷いた。

テントの中に設けられた席に座って、柚希の後姿を眺めた。ふと、この間、佳奈と交わした会話を思い出した。終始、デート割り勘説を唱え続けていた。援助交際みたいだ、と嘆いていたけれど、結局佳奈は、恋人と長くつきあっていていきたいから、あんな考えになるのだ。

大切な相手だから、デート代のために無理してバイトして欲しくないし、嫌われたくないから、デートの最後まで生理だと打ち明けられなかったのだ。

碧はいままで、そんな風に恋人に心を砕いたことがなかった。あとから不満を訴えられるのが嫌だから、体調のことはさっさと告白した。それで嫌がるなら別れてもいいと思っていた。

柚希とのつきあいは、特殊だった。

後輩の女の子だと思っていたから、奢ってあげるべきは自分の方だと思っていた。一緒に出掛けることはほとんどなかったけど、一度だけ、一緒に外食したときは、柚希が譲らなかったので割り勘にした。

柚希が最初から男だとわかっていて、それでもつきあっていたとしたら、確かに金銭面で、なにかしらの躰きはあったかもしれない。いままで同性だと思っていたから、うまくやってこられたところも、多かったのだ。

柚希がお皿に載せたカレーを運んできた。目の前の料理を見て、碧は小首を傾げた。

「これ、カレーなの？」

確かに、ご飯の上に、カレーのような汁がかかっているが、その色は碧がよく知るものではなく、白っぽくて、緑がかっていたのだ。「タイカレーです」

よく見れば、屋台の看板に大きく『タイカレー』と大きく書いてある。柚希を探すことに夢中になっていて、気づかなかつたらしい。いままで撮ってきた写真が、心配になってきた。

えびせん同様、マクロモードで食べる前のカレーを写真に収めたすべての屋台の食べ物を撮ることはできないが、自分が食べたものくらいは撮影しておきたい。

小さめの深さがある皿に盛られたカレーは、あちこちの屋台で食べ歩くことを考慮して、量は半分くらいだ。中途半端な時間に食べるには、ありがたかった。

「いただきます」

手を合わせて、碧はスプーンを手にした。柚希は、向かいの席に座った。この時間になると、テントの中の席も空いている。

「あれ？ そういえば、法学部って、インドカレーじゃなかった？」

「そうなんです。でも、インドカレーだと煮込む必要があるらしいので、途中で変更したんです。タイカレーの方が調理時間は短いので」

エコがテーマの学祭の影響は、文学部のみならず、法学部にも及んでいたらしい。

「エコでお国替えって感じだね」

「そ…うですね、たぶん…？」

碧はひと口食べて驚いた。

「あ、おいしい。こんなの初めて食べた」

いままで食べてきたカレーとは、全然違う。他のなにに似ているとも形容しがたい味だった。好き嫌いは別れるかもしれないが、碧は好きな味だった。

「よかった。辛くないですか？」

「辛いけど、なんかちよつと甘い感じもしておいしいよ」

「ココナッツミルクが入ってるんです」

「ねえ、この黄色くて細いの、これ、なに？」

「たけのこです」

「へー、カレーにたけのこ入れるんだ。本場タイ流？」

「いえ、かなりアレンジしてますよ。しめじが入ってるでしょ。本当はフクロダケってキノコを入れるらしいんです」

「そうなんだ。でも、おいしければどっちでもいいよね」

こんな風に会話を交わすのも久しぶりだ。ぎこちなさが、だんだんほぐれていく。柚希の心地よさを、思い出してきた。なんでもない時間が、大切なものだったと再認識した。

少し風が強くなった。碧は髪を押さえながら食べようとしたが、食べにくかった。撮影することを考えて、手首にシユシユを付けてきている。けれど、柚希の目の前で髪を束ねることに、躊躇した。

この期に及んで未練がましくも、子どもっぽく見られることを心配している。

「碧さん、よかったら、髪、くくりましょうか？」

「…うん、じゃあ、お願い……」

戸惑っている碧を見てどう思ったのか、柚希の方から申し出てくれたので、シユシユを手渡した。

「ポニーテールでいいですか？」

「うん」

「いま、ブラシがないんで手櫛になりますけど」

「いいよ」

柚希が背後に立って髪に手をかけた。久しぶりに触れられて、碧はやはり柚希が好きなんだと実感した。

顔を見られないのが、残念だった。少し会話をして、柚希の存在が大切なものと確信できるいまなら、たとえ混乱していても、その混乱した気持ちを伝えられそうな気がした。

「……碧さん、私、碧さんのこと、諦めてませんから」

碧の髪を指で何度も梳き上げながら、柚希は告白した。

振り返ることも、俯くこともできない体制で、碧は唇が震えた。

「……………あたしも、あきらめてないよ。まだ、前の瀬戸さんとい  
まの瀬戸さんを、繋ぎ合せられないだけだから……………」

「…この間、小畑さんと話をしたんです」

「さくらと？」

そんな話は、さくらから訊いてなかったので意外だった。

「碧さんは嘘が嫌いなんだって、教えられました。だから自分も、  
嘘をつくのが下手なんだって。私は結果的に、ずっと碧さんに嘘を  
ついてきたんで、嫌われてもしかたないと思ってました」

「…それは……………」

そうなんだろうか。柚希は嘘をついていたのだろうか。

確かに、碧が柚希を女だと思っっているのを知っていて黙っていた  
のだから、嘘をついていたことになるかもしれない。けれど、そんな  
短絡的な言葉で片付けられない複雑さが、柚希にはある。

いままで経験してきた、たとえば、持田が浮気をしてごまかして  
きたような嘘とは、性質が全く違う。

何度も柚希が送ってきたシグナルに気づけなかった自分も、非は  
同じだ。むしろ、ずっと悩み苦しんだ柚希より、碧の方が無神経だ  
った。

最初に柚希は、隠していることを伝えたら、軽蔑されるか嫌われ  
る、と心配していた。その行為は嘘をついてきたとはいえないはず  
だ。

髪から柚希の指の存在がなくなった。束ね終わった気配に、触れ  
られていた時間を惜しむ気持ちになった。もっと、時間のかかる髪  
型を願えばよかった。

話したいことはまだたくさんあるが、いまこの場所で、なにかと  
注目されやすい柚希と、これ以上込み入った話はしにくかった。

「瀬戸さん、今日はもうあちこち回ったの？」

「写真部とエントラスは行きました」

「エントラス、どうだった？」

「みんな立ち止まって見てましたよ。自分の写真を見つけて、指差して記念写真、撮ってる人の行列ができてました」

「ほんとに？ うわ、早く見に行きたいな。去年はほとんど一般のひとは参加しなかったから、作品展のついでに学生が見てるだけだったし」

「碧さんまだ、行ってないんですか？」

「うん。エントラスも、写真展も行けてない。時間が決まってるのを撮ってから、ゆっくり行こうと思って」

「写真、撮ってるんですね。なにを撮ったんですか？」

「開催のあいさつでしょ。お笑いライブでしょ。ペットボトルハウスに、あと、お化け屋敷も行ったよ」

「お化け屋敷にカメラ持って、ひとりで入ったんですか？」

「ううん、出入り口だけ。写真はそれでいいんだって。悲鳴が聞こえてきたよ。出てくるひとの中には、泣きそうになってたひともいたし」

「理学部のお化け屋敷、評判ですよね」

「瀬戸さん、お化け屋敷、得意？」

「ううん、どつちかというと、苦手かも…」

「そうなの？ 明日、一緒に行ってみる？」

「からかうような視線を送ってみる。柚希は苦笑した。

「碧さん、愉しそうですね」

「怖がつてる瀬戸さんを見てみたくて」

「趣味、悪くないですか？」

「そう？」

「はい。でも、誘ってもらったのは嬉しいです。明日、碧さんはいつ頃、自由時間なんですか？」

「明日はえびさんの当番が午前十時から十一時までと、午後は三時から四時まで。それ以外は空いてるよ。えびさんに問題が起きなければ」

「問題、起きそうなんですか？」

「思ったより数が出てるみたいで、さつき、亜衣ちゃんが買い出しに行ってたんだ。明日もそんなことになったら、どうなるかわかんないし。卵がいくつ出るか計算できないんだよね」

「ああ、なるほど……」

「ごちそうさま」

食べ終わって、ずいぶん経ってから碧は手を合わせた。この言葉をいうと、立ち去らなければならぬ気がして、なかなか、いえなかつた。けれど、そろそろ撮影に戻らなければならぬ。

「ね、明日はつきり空いてる時間わかったら、メールしていい？」

袖希は驚いたように、目を見開いた。しばらくして、ゆっくり頷いた。

「はい。…お願いします……」

碧も袖希も、お互いに相手をあきらめていなかった。けれど、気持ちに踏み込んだ行為には、まだ行き着けそうにない。

もしかしたら、このまま友人の関係になっていくのかもしれない。そしてそれが、案外、居心地のいい、正しい関係なのかもしれない。碧は袖希との距離を、まだ掴みきれずにいた。

結局その日、部室の作品展まで見には行けなかったが、エントランスの名画、青いターバンの少女を見ることはできた。

碧が行ったのは、すでに陽が傾いていた夕方だったが、多くのひとが名画を囲っていた。

名画の写真は、昨日設置したときに、佐々木がちゃんと撮っている。部員全員の集合写真もこの名画の前で撮った。碧が今日撮っておくべきものは、名画を見学するひとの様子だ。場所を変えて、何枚か撮影した。

「おかあさん、あたしの写真、この中にあるの？」

小さな女の子が、母親の腕にしがみついていた。

「ないわよ」

「ええ、なんでないの？」

「この写真はきつと、ここの大学生のお兄さんやお姉さんたちなのよ」

「だって、赤ちゃんの写真あるよ。おばあちゃんの写真もあるよ。なんであたしのはないの？」

母親が困っていたので、碧は近づいて行って説明した。来年もあるので、よかったら参加してください、とお願いしたら、親子は喜んで帰って行った。

来年までの一年を、柚希と一緒に過ごしたかった。

この企画をまた共有して、喜んだり困ったりしながら、時間を刻んでいきたい、そう思った。

## 第四十六話

### M大 学祭二日目 行き着きたい場所

翌日、碧は九時過ぎに大学に来た。学祭二日目、最終日である。

昨日、結局見ることができなかった写真部の作品展を、少しでも早く見たかった。

学祭は、十時からなので、準備に入る学生も、まだ少ない。学生課で部室の鍵を借りて中に入った。

学祭前日に、みんなで部室の大掃除をした。机や椅子をすべて撤去した部室は、こんなに広がったのかと驚いた。

余分なものを暗室に詰め込んで、壁面パネルを運び入れた。

碧はそのあと、文学部の屋台の準備に駆り出されたので、他の部員の写真作品を、ほとんど見ていなかった。

最初に目に飛び込んできたのは、松浦の写真だった。

夏休みに、スタジオで写したあの柚希の写真だ。幻想的な雰囲気、展示している写真の中でも、ひときわ存在感がある。さすがは松浦だ。柚希の綺麗な容姿だけではこれほどの写真にはならないし、松浦の腕だけでも、この作品はできなかった。

松浦の表現したかった世界観に、柚希が見事に応えた写真だった。碧にとって見覚えがある白いオーガンジーを身に着けた写真の隣に、もう一枚、対をなすように柚希を写した写真が並んでいた。

「これは……？」

背景や光の状態がそっくりなので、同じ場所で撮った写真であることは、間違いない。けれど、その写真は、碧が初めて見るものだった。なぜなら、その柚希は水色のオーガンジーに包まれているからだ。

今どきはパソコンで服の色だけ変えることもできるが、白を水色に変換すると白い壁の背景や、肌の白い部分まで色が変わってしまう。それを避ける方法もあるが、相当手間がかかるし、それに、松

浦がそんな加工技術を取り入れたことは、いままで一度もなかった。別の日にスタジオを借りて撮影したとは考えにくい。手間と費用を考えれば無駄だし、もしそうだとしたら、柚希から話くらい訊いているはずだ。

「……あ、そっか。あの日、亜衣ちゃんが先に来て、先に帰ってたんだ」

この水色のオーガンジーの柚希は、碧が来る前に、亜衣と一緒にいたときに撮られたものなのだ。

「あのとき、あたしがスタジオに着いたときには、すでに撮影が半分くらい済んでたってこと……？」

だとすると、柚希の疲労も大変なものだったはずだ。碧はあらためて柚希の体力と気力に感心した。そして、やっぱりもしかしたらちよつと、男子の体力かも、と思ってしまった。

水色のオーガンジーの柚希は、穏やかで自然な笑顔だった。まるで、自宅で家族と過ごしているような、少し子どもっぽくて、くつろいだ表情だ。

「……そっか。亜衣ちゃんと二人のときは、こんな顔もしてるんだ」  
以前松浦が、亜衣に対する気配とは全然違うと聞いていたが、訝しく思っていた。いま、写真を目の前にして、その言葉が本当だとわかった。

白いオーガンジーの柚希は、憂いを帯びた目をしていて、そして艶めいている。ときどき碧を落ち着かない気持ちにさせる、あの視線が、写真に写しだされていた。

この写真を撮った時、碧は松浦に指示されて、カメラの後ろに立っていた。あの日、かなりの数の写真を撮ったけど、この写真のことは覚えている。柚希の視線を見ているうちに、キスしたくなったからだ。

「あたし、愛されてたんだ……」

頬が緩むのを、碧は抑えられなかった。いまの状況を思えば、決して喜んでばかりもいられないが。

写真のタイトルは二枚合わせて『変化のとき』とある。

松浦の真意はわからないが、二枚の写真で柚希の表情の違いがあることは理解できた。

碧は、部室の他の作品を見ていった。

さくらの写真だけは、すでに知っていた。寮で出来上がったものを見ていたのだ。ランダムに区分けされたひとつひとつに、ほほえましいキスシーンが収められていた。自分もその中に行っているのが、どうにも居心地が悪い。目を瞑っているので、すぐに碧だとわかるひとは、それほど多くないはずだけど。

佐々木は予想通り、電車の写真だ。タイトルにも電車の名前が書いてあるが、その名前を見てもどこを走っているどんな電車か、わからなかった。先日、亜衣の部屋からドクターイエローを撮影したとき、気を付けたのに、ちゃんと撮れなかった。そのときのことを思うと、佐々木の技術の高さには、舌を巻くものがある。

他の写真を眺めながら歩き進めると、奥の壁に、喫茶店のような室内から、開いた窓の外を撮った写真があった。窓の外は夕暮れの街中で、人通りのある商店街だ。

シャッタースピードをかなり遅く設定して撮ったようだ。歩くひとの姿が、残像のように流れている。

撮影者のネームプレートは、瀬戸柚希である。

碧はその写真に、引っかかるものを感じて見入った。どこかで見ただことがある風景のような気がしたが、思い出せない。

柚希と一緒に行った場所だろうか。以前待ち合わせしたカフェや食事した店とも違う。気のせいだろうか。そういえば、京都の写真を出品するはずだったから、これは京都の写真かもしれない。だが、柚希の部屋で、この写真は見てなかった。

首を傾げながら、部室の中をさらに移動した。碧の写真も展示されていた。去年同様、街の景色を写した写真だ。碧の好みは、懐かしさを感じる風景だ。今年もそうした写真を選んだし、去年もそうだった……。

「……去年……、あ、去年の！」

碧は柚希の写真の前まで慌てて戻り、もう一度柚希の写真を凝視した。

「……これ、去年あたしが写した場所なんだ……」

『汚れたガラスの向こう側』

柚希は、そのガラスの向こう側から『こつち側』を写したのだ。

驚いた……。

あのときの、なんでもない風景写真の続きを見ることになるとは、想像したこともなかった。

碧はいままで、こんな感動的な写真を見たことがなかった。

見ているだけで、涙が溢れてきた。他のだれも、この写真で感動なんかできない。この写真は、碧に見せるためだけに、撮影されたのだ。

写真のタイトルは『行き着きたい場所』だった。

ガラスで区切られた空間を、柚希は開け放してくれたのだ。

柚希が男だったからといって、別のひとのようだなんて、どうして思ったのだろう。柚希はなにも変わっていないかったのに。

柚希であることがなにより大切で、性別が大切だったわけではなかったのに、どうしてあんなに悩んでいたのだろう。

早く、柚希に会いたかった。会って、気持ちを伝えたかった。他のだれより好きだと告げたかった。

部室の扉を開ける音がして、碧は我に返った。

「なんだ、碧ちゃんか。だれかと思った」

「副部長……もう、十時ですか？」

「十五分前だよ」

十時から屋台の当番なので、そろそろ行かなければならない。

「昨日、ここに来る時間なかった？」

「はい」

「じゃあ、ほとんど初めて見たんだ。どうだった？ とりあえず、柚希ちゃんの写真とか？」

松浦がすぐに袖希の名前をいい出したのは、碧が袖希の写真の前で、泣きそうになっているせいばかりではないのだろう。きつこの面倒見のいい上級生は、ふたりのことをずっと気にかけていたのだ。

「すごく、感動しました」

「そりゃ、よかった。袖希ちゃんが喜ぶよ」

「副部長、前に瀬戸さんのどこを好きになったか、訊きましたよね」  
「ああ、訊いた」

「あたし、瀬戸さんのどこが好きかなんて、わかんないです。でも、性別なんてどうでもいいくらい、好きみたいです」

松浦はしばらく呆然としていたが、吹き出した。

「あのさ、わかってるのかな。恋愛は男女の間でするのが普通なんだよ。碧ちゃんの言い方だと、決死の覚悟で異性の胸に飛び込んでいくように聞こえる」

「だって、あの瀬戸さんですよ」

「……まあ、あの袖希ちゃんだよ。確かに……」

松浦はある程度納得したように頷いた。

「きみが袖希ちゃんを、カタツムリや双子と一緒にくたにしてないみたいだし、安心した」

「はあ？」

「いや、なんでもない」

「副部長、副部長のこの作品、これが終わったら小さいサイズでいいんで、もらえませんか？」

「欲しいの？」

「はい。部屋に飾りたいんです」

「いいよ。これをそのままあげる。碧ちゃんがいなかったら、撮れなかった写真だから。どっちが欲しいの？」

「ありがとうございます。できれば両方」

「両方？」

「はい。いつか、こっちの写真のような顔も、あたしに向けてもら

えるように」

「欲張りだな。碧ちゃんが恋愛事で欲張りになったの、初めて見たよ」

「あたしもです。じゃあ、えびせんの当番なんで、行ってきます」

碧は、松浦をちょっといいひとかもしれないと思った。写真をもたらえるから……と正直にいったら、やっぱりあげるの止める、といわれそうな気がしたので、口を噤んだ。

碧にしては、賢明な判断だった。

## 第四十六話

M大 学祭二日目 行き着きたい場所（後書き）

この話を書くきっかけは、ニューハーフの人で女の子を好きになっ  
てしまった人ついていないのかなあ、と疑問が湧いたからなんです。  
ネットで見ても、それらしい話は出てこないし、聞かないし、小説  
も見つからないし、気になるなあ、と思ってました。で、どんな話  
になるのか、ために書いてみたのでした（笑） たぶんありえな  
いんだろうけど、もしあったら、ちょっといいな、と読んでる間だ  
けでも思ってもらえれば、嬉しいです。ために書いてみた話が、  
こんなに長くなるとは思ってませんでした。長くはなりましたが、  
話の中の時間は短くなってます。予定では、柚希の二十歳の誕生日  
が最終話でしたので。次の話も学祭2日目なので、一応、明日も  
更新する予定です。ただ、大苦戦の47話なので、読み返して修正  
に時間がかかったら、お休みにします。

## 第四十七話

### M大 学祭二日目 いままでの自分の中で、一番好き

学祭が十時開始とはいえ、ほとんどの屋台はまだ、開店休業の状態だ。一般客はまだ少ないし、来ていても、展示会や催し物の見学に行っている。

碧が文学部のテントに着くと、佳奈や亜衣、それに十時から当番の数人が、雑談していた。

「碧先輩、昨日はお疲れ様でした」

「亜衣ちゃん、おはよ。亜衣ちゃんこそ、昨日はこっちが大変だったでしょ」

「車があると、どうしても買い出し係になっちゃうので。まあ、そういうのも初めてなんで、愉しんです。えびせん自体は作るの簡単だし、好評でよかったですよ」

「それでさ、問題は卵なの」

佳奈が碧に心配顔を向けた。

「残ると困るよね」

「うん」

「昨日、いくつ出たの？ スペシャルえびせん」

「二百くらい」

「ってことは、二十パックか。今日も同じだけ買って、三時以降に卵なくなったら売り切れでいいんじゃない？」

「そうだね。足りないくらいにしないと、だれかが持って帰らないといけないし……」

どのみち、ソースやマヨネーズ、青のりなんかは残ってしまうだろうが、卵は持って帰るのが厄介だ。できれば残したくないのが、みんなの共通した思いだった。

そのあと、買い出し組が足りない材料を買いに行った。

十一時までには、屋台の準備だけで、売り上げはまったくないのか

と思っていたが、それなりに数が出ていく。食事には早いけど、おやつ代わりにちょうどいいのだ。ほかの食べ物関係の屋台がまだ準備中なので、余計に集中するのもあるのだろう。

忙しい思いをしているうちに、買い出し組が戻ってきた。

時間を見るために携帯を開くと、柚希からメールが届いていた。

喧噪のなかで、音がかき消されていたらしい。

『今日、映画研究部の上映会が一時からあるんですけど、よかったら一緒に行きませんか？ 上映時間は三十分くらいみたいです』

その時間は、ちょうど当番から外れている。昨日話した時間帯を、覚えてくれていたらしい。昨日、碧の方からメールをするといったのに、柚希から連絡してもらえて浮足立った。

『行く。瀬戸さん、いまどこにいるの？』

メールを送ると、レスはすぐに来た。

『文学部の屋台の近くです』

メールを見て、びっくりして辺りを見廻した。テントの後方の少し離れたところで、柚希がこつちを見て微笑んでいた。浮かれて携帯を操作していた姿を、眺められていたかと思うと、気恥ずかしい。「こんなところにいるなら、なんで、声かけてくんないの？」

碧が拗ねて唇を尖らせると、柚希は肩を竦めた。

「すいません。忙しそうなのに、お邪魔したらまずいと思って…」

碧は小さく息をついて、携帯を開いた。時間は十一時二十分だった。すでに交代の時間を過ぎている。当番の一年に声をかけて、碧は柚希と連れだってテントを離れた。

「碧さん、お昼まだですよね」

「うん。瀬戸さんは？」

「まだです。一緒に屋台回りしませんか？」

「いいよ。でもいいの？ 亜衣ちゃんや法学部の友達と約束してないの？」

「昨日一緒に回りましたし、今日はフリーです」

「ふうん、どこで食べる？」

「実は、あちこちからチケットをもらったり交換したりして、たくさんあるんです。できれば、一緒に食べてもらって、少しでも減らしたいんですが、いいですか？」

「いいけど、ひとりで食べきれないくらい、チケット余ってるの？」

「はい。あまり知らない上級生からもいただいたので、テントに行かないと申し訳なくて……」

ああ、そういうことかと、碧は納得した。

要するに、柚希がモテて貢がれたのだ。本人がそのことに気がつかずに、親切にされたと思って恐縮しているのだろう。

「ねえ、チケットと一緒に、チラシかなにか、もらわなかった？」

「もらいました。いろいろ」

柚希が鞆の中からチラシを出して、碧に手渡した。そのチラシを見て、碧は自分の予想が間違ってたことを知った。催し物のチラシにクラブの勧誘もある。すでに写真部員なのに。

それにしても、いままで柚希のことは、水面下で評判にはなっていたが、それほどあからさまな行動に出てくる学生はいなかった。急にどうしたのだろう。学祭の解放感からだろうか。

碧が首を傾げていると、中学生くらいの女の子が三人、躊躇いがちに近づいてきた。

「あの、写真展で展示されてる『変化のとき』のモデルさんですよね？」

遠慮しながらも、柚希に尋ねる。

「はい……」

柚希が頷くと、中学生たちがきゃー、と飛びはねた。興奮した様子で携帯を手に押し迫ってくる。

「一緒に、写真、撮ってもらえませんか？」

「え……、でも……」

柚希が困って後ずさりしていたので、碧が声をかけた。

「いいじゃん。写真くらい。あたしが撮ってあげる」

「碧さん」

「ありがとうございます。この携帯でお願いします」

「オツケー、並んで」

柚希は嫌そうにしていたが、結局、諦めて写真におさまった。中学生に感謝されて、碧は笑顔で手を振った。

「副部長の写真のせいだったんだね」

「なにがですか？」

「その貢物のチケット。あの写真で、一気にファンが増えたんだよ」「ええ、困ります。目立ちたくないのに……」

「ここまで来たら、もうしょうがないって。あんまり逃げ回っても余計に追いかけられるし、適当に相手してあげればいいんじゃない？」

「そうなんですか？」

「さあ？」

「さあつて、碧さん……」

「だって、あたしファンに追いかけられたことなんかないんだもん。わかんないよ」

「碧さんらしい。すごく、適当……」

ふたりは顔を見合わせて笑った。こんなふうに、うちとけて笑い合うのも久しぶりだった。

「……写真、ありがとう」

歩きながら、碧はぼそりと呟いた。

「え？」

「写真展の。瀬戸さんの写真、去年あたしが写した写真の反対側から撮ったんですよ」

「はい。碧さんから訊いた駅を歩いてたら、偶然あの場所にたどり着けたんです」

「あのガラスの向こう側を見るなんて、思ってもみなかった」

「去年、亜衣と、この学祭に来て、いろんなものを見たはずなのに、碧さんの写真のことばかり、何度も思い出しました。どうしてこんなに気になるのか不思議でした。写真ってなんだろうって、それを

知りたくて、写真部に入部して、碧さんに出会えて……」

柚希の言葉が途切れた。

「大げさかもしれないけど、孤独から解放されたみたいでした。どんなひとと、どんなに親しくなっても、こんなに近くに他人の存在を感じたことなんか、なかったから」

柚希は碧に微笑みかけた。寂しそうな笑顔だった。柚希からの告白を、碧は初めて男らしい言葉だと思った。素直な言葉が、とても潔かった。

「あたし、ほんとに瀬戸さんのこと、なにも知らなかったんだ。ごめんね。でもさ、訊かなきゃわかんないよ。あたしって、鈍いらしいし。これからはもっと、教えてくれる？」

「はい、もちろん……」

柚希の持っていたチケツトで、唐揚げとたこ焼き、それからおでんを交換した。どのテントからもここで食べていってくれと懇願されたが、ちょうど昼時なので空席もなかった。お盆に乗せてもらって、キャンパスの隅のベンチで食べることにした。

屋台の食べ物は何れも、学食のプラスチックやセラミックの食器なので、お盆を運んで移動するのは面倒だったが、屋台から離れた場所で落ち着くと、喧噪から少し解放された気分になった。

本部から聞こえてくる音楽や案内の放送が、遠くなって心地よかった。

「ねえ、瀬戸さん、今日、大学に泊まる？」

「こんなにやくを齧りながら、柚希に尋ねた。」

「大学に泊まるひとなんて、いるんですか？」

「運動部の男子は多いかな。一晩中、屋台で飲んでるんだよ、夜は寒いのに。次の日、片付けに大学に着くと、死体みたいな学生が、あちこちに転がってて面白いよ」

「……面白いんですか、それ？」

「うん、わりと。佳奈も去年泊まったよ。そのときロマンスがあったて、いまも、そのときの彼氏とつきあってるの」

「碧さんは、泊まったんですか？」

「……うん。泊まったよ」

佳奈の話をしなければよかった。こんなことをいえば、当然自分のことも訊かれるとわかりそうなものなのに。去年は二時間以上かかる実家から通いだっただ。屋台で飲んでいるうちに最終に乗り遅れて、徹夜で飲んで騒いだ。

「ロマンス、ありました？」

「……ちよつとだけ。すぐ別れちゃったけど」

事実だけど、あまり柚希に訊かせたくない話だ。気まずくて必死に咀嚼を繰り返す。

「今年は泊まるんですか？」

「瀬戸さんが泊まるなら、泊まろうかなって」

「私は帰ります。なんか碧さんに大学で泊まってほしくないし。私が帰ったら、碧さんも寮に帰ってくれるんですよね？」

「今日は帰らないって、寮長さんについて出てきちゃった」

「碧さん……」

柚希は眉をひそめた。咎めるような視線を送ってくる。

「お願いしたいことがあるんだけど」

「……なんですか？」

柚希は訝しげな表情だった。

「今日帰るなら、瀬戸さんの部屋に行つていい？ ちゃんと話したいことがあるから」

柚希が大学で泊まるなら、というか徹夜で飲むなら、それに付き合うつもりだったが、マンションに帰るなら、むしろ落ち着いてちゃんと話をしてみたい。いままでのことも、これからのことも踏み込んだ話をするなら、内容は柚希の性同一性障害にかかわる話になるので、訊かれていい会話ではなかった。松浦の写真のせいで、いままで以上に目立っているなら、なおさら、どこでだれが聞き耳を立てているかわからない場所では話せない。

本当は少しでも早く、気持ちを伝えたくった。そして、まだ知ら

ないことを、教えてもらいたかった。

柚希とは、好きなだけではつきあえない。亜衣に、覚悟してくれといわれた意味を、碧はいま、噛みしめていた。

「……わかりました。じゃあ、一緒に帰ればいいですか？」

「うん。ごめんね、わがままいって」

柚希が、いえ、と首を振った。

食べ終わった食器を重ねてお盆に並べた。学食に持って行って、水洗いをし、返却すると、食器一枚で五円返金されるシステムだ。

学食で食器を返却し、運営委員から小銭を受け取った柚希が、少し困っていた。もともとチケットがもらい物だったので、わずかといえお金を受け取るのに、抵抗があるようだ。すぐ横に募金箱があったので、ほっとした様子で、そこに戻ってきた小銭を入れた。

「碧さん……、期待してもいいのか悪いのかだけ、教えてください」  
歩き出して、柚希が尋ねた。辺りにひとがいなかったので、碧は話し始めた。

「……あたし、瀬戸さんのこと、好きだよ。でもこないだ、瀬戸さんと別れたら、どうなるんだろうって想像してみた。何年か経ったら記憶も薄れて、他に好きなひとができるのかなって……」

「……」  
柚希が表情をなくした。碧は柚希がよくない方に考えていることがわかったが、淡々と言葉を続けた。

「きつとそうなると思う。時間の力って偉大だから。そのときは、このひとより好きなひとなんて、絶対現れないって思っていて、きたぶんそんなことない。時間が過ぎて新しいひとに出会ったら、きつと変わってしまう。でもあたしは……」

碧は柚希の手を握った。

「瀬戸さんを好きな自分が、いままでの自分の中で、一番好き。この気持ちを消したくないの。これからも、大事にしていきたいの。変わってしまいたくないの」

柚希は、弾かれたように目を睜った。そして、碧の手を強く握り

返した。

「だけど、期待していいかって訊かれたら、正直よくわかんない。

瀬戸さんからしたら、別れた方がマシって思うかもしれないし……」

「……………碧さんと別れたほうがいいなんて、なにがあっても思い

ませんよ

「うん……………」

覚悟はある。けれど、不安もある。

どこかですべてを、吐き出さなければならぬ。

碧が覚悟や不安を吐き出しても、柚希は拒絶しないのか、心配でしかたがなかった。

## 第四十七話

M大 学祭二日目

いままでの自分の中で、一番好き（後書き

以前どこかで、49話が最後と書いた気がするんですが、50話で最終話になります。長い話もあるし、短い話もありますが、そのままいきます。全50話の中で、一番止まって動かなかった47話。投稿できて、ほっとします。残りはまだ殴り書きのような部分が多く残ってますので、明日はお休みします。

## 第四十八話

### 柚希の部屋 男でも受け入れてもらえるまで

「怖かった。なんなの、あれ？」

理学部のお化け屋敷から出てきた碧は、心臓がバクバクいつていた。

不覚だった。

柚希が怖がっているのを見たかったのに、それどころじゃなかった。

「碧さん、大丈夫ですか？」

「…あんまり、大丈夫じゃない。瀬戸さん、怖くなかった？」

「怖かったですよ」

……そうだった。このひとは、あまり感情が出ないのだった。

「怖かったんですけど、興味深くて、意識がそちに行っていました」「なにが興味深かったの？」

「少ない予算と限られた空間の中で、素人がどうやって恐怖心を引き出すのかと思ってたんです。色とか音とか、あとは温度もそうだし、すごく工夫してるんだなあ……」

「……瀬戸さんって、心理学得意？」

「はい。得意っていうか、好きです」

「さくらと気が合いそうだよ……」

柚希はさくらのような鋭さはない。むしろ鈍い印象があるのに、共通する部分があったのは、少し意外だった。

昼食を終えたあと映画研究部の上映会を見るために、視聴覚室に行ったのだが、時間ぎりぎりだったので満席だった。何度か上映すると訊き、夕方にまた来ることにした。

時間が余ったので、昨日冗談交じりで誘ったお化け屋敷に行ってみたら、このていたらくである。

「可愛いとか面白いって、思ってみたかったのに……」

「は？」

「なんでもない」

そのあと、いったん、それぞれ持ち場に戻った。文学部の屋台は、おおむね好評のまま、問題も起きなかった。法学部のタイカレーは、三時前に完売してしまい、そのまま片付けまで済んだ。

夕方、碧の当番が終わったあと、メールで待ち合わせた。法学部の先輩が部長をしているという映画研究部に行つて、昼間、見られなかった映画鑑賞をした。

大学はイベントがすべて終了し、一般客が帰ると、学生の飲み会と化する。写真部の部室も同様で、碧と柚希もしばらくはその場にとどまり、写真部員やその友人たちと飲んだり食べたりした。

八時を回つて、柚希が立ち上がった。

碧も他の部員に別れを告げて、柚希のあとを追いかけた。

柚希の部屋に着くと、あの日の出来事がよみがえった。

初めてここに来たとき、柚希のことを同性だと思っていた。この部屋で、同性の柚希に恋をしていた。部屋から出ていくとき、柚希が異性だと知つて、失恋したような失望感を味わった。

ついひと月ほど前のことなのに、ずいぶん前のことのように思えた。

前に来たときに見たフォトフレームが、同じ場所にあった。

「これ、見ていい？」

「どうぞ」

前回、京都の写真が最後だったページの続きに、韓国で撮った写真が追加されていた。

碧が見たいといつていた、唐辛子やキムチが山積みになって売っている、市場の風景が何枚もあった。

「韓国、愉しかった？」

「いえ、あのときは碧さんに振られて、落ち込んでましたから」

「振ってないよ。びっくりしたただだから」

「あの日の夜中に、亜衣から写メールが届いたんです」

「え？ 韓国に？」

「はい。碧さんの寝顔の写メール」

「……………？」

碧は記憶を手繰り寄せた。柚希が韓国に行った日、碧は亜衣の部屋に泊まった。寝顔を撮られたというなら、そうかもしれない。亜衣がどうしてそんなことをしたのかは、よくわからないが。

「亜衣や小畑さんが羨ましかったです。同性の友人なら、そばにいられるし、ずっと懇意でいることができるんだと思って。私はどちらも選べたけど、ちゃんと形にする前に、碧さんに嫌われたんじゃないかって思って、後悔しました」

碧はフォトフレームを元の場所に戻して、ソファーに腰を下ろした。前に来たときと同じ場所に座ったのに、気持ちはまるで違う。

それは、隣に座る、柚希も同じだろう。

「……………あたし、なんで瀬戸さんが男じゃ嫌なのか、自分でもずっと不思議だったの。色々あるのはあるんだけど、一番の原因は、水着かもって思ったんだ」

「水着？」

「うん。夏休みにさくらが、海合コン行こうって誘ってきたことがあったの。そのとき、瀬戸さんも行かないかなって話になって……………」

「小畑さんって本当、心臓に悪いですね。だいたい、なんでそんなしょっちゅう、合コンになるんですか？」

柚希は、自分も誘われかけたことより、碧がいつ合コンに行ってしまうか、心、穏やかではいられないようだ。その合コンに連れ出してしまおう張本人のさくらに対して憤慨している。

「さくらは合コンの雰囲気が好きなのもあるんだけど、そうじゃなくて、そんなのどうでもよくて、あたしそのとき、瀬戸さんの水着姿、可愛いだろうなって想像したの」

「……………」

「そのときイメージが固まっちゃって、瀬戸さんの身体が男だって、

どうしても考えられなかったみたい。勝手に変な想像して、切り替えができなかっただけかも。怒る？」

「怒りません。私の場合、そんな程度じゃありませんから」

「瀬戸さんが？」

「想像できないですか？」

「うん」

「私、碧さんとキスしたら、勃ってましたし」

「！ 本当に？」

「初めてキスしたときは、よくわからなかったんです。違和感はありませんですけど。はつきりわかったのは、大学の図書館で偶然会ったあと、部室でキスしたときです」

「夕立、降ったときだよね」

「はい。あのときは、自分でもはつきり自覚できたんです」

あの日のことは、全部、覚えている。柚希が『私、碧さんじゃないと、駄目みたいですよ』と喋ってくれたから。

それまでだれも、そんな風に自分を特別扱いしなかったから、忘れられなかった。

その場の雰囲気、軽く出た言葉には聞こえなかった。心の奥から絞り出したかのような、真摯な響きがあった。

あの言葉には、そんな事情が隠されていたのか。

「幻滅しました？」

「ううん。ちょっとびっくりしたけど、嬉しい」

「嬉しいんですか？」

「嬉しい。亜衣ちゃんから、瀬戸さんがずっと性転換を愉しみにしてたって訊いたから、あたしを同性愛者にしないために諦めたって訊いたから、どうしていいか、わからなくなってたの」

「碧さん……」

柚希は、困惑したような顔をした。

「正直に答えて。あたしは瀬戸さんの夢を、奪っちゃったの？ 瀬戸さんはあたしのために、犠牲になるの？」

「違います。諦めたとか、犠牲とか、そんなんじゃないんです」  
柚希はかぶりを振った。

「ずっと、自分のことがよくわからなかったんです。どうして性同一性障害なのに、男に恋愛感情を持ってないのか。どうして碧さんだけが、こんなに……こんなに……特別なのか……」

柚希はおそろおそろ、碧の肩を抱き寄せた。壊れ物に触れるようなくさだった。柚希の首元に鼻先を寄せると、柑橘系の匂いがした。

その匂いで、柚希に恋焦がれていた自分を思い出した。

恋は、いくつも経験してきた。

激しかったり穏やかだったり、さまざまだったけど、いまほど優しく、切ない気持ちになったことはなかった。

以前碧は、柚希に対する切なさを、同性だからだと思っていた。

けれどいま、男とわかつているのに、やっぱり切ない。いままでよりずっと、愛しくて切ない。

同性だからじゃない。柚希だからだ。柚希に出会えて、よかった。

「碧さんのおかげなんです。生まれてきた性別に、意味があつて嬉しかったんです」

「あたし、瀬戸さんがこれから、どんな選択をしても、そばにいたい。離れたくない」

碧は柚希の首に腕をからませた。俯いて、額を柚希の肩に乗せた。「だから、あたしのは考えなくて、自分の気持ちだけで考えてもしあたしが、手術して女の子になって欲しいっていったら、するの？」

目を見ては訊けなかったから、俯いたまま尋ねた。矛盾した質問だけど、きつと柚希は、自分の質問の意味をわかってくれる。そう、信じた。

「……しません。碧さんに男でも受け入れてもらえるまで、時間がかかっても粘ります」

「そっか。よかった……」

それが柚希の選択なら、柚希の本心なら、碧は安心できた。

「前に、ここに来たとき、脱がせて写して、脅迫していいかって、訊いたよね」

「あ、あれは……」

「してもいいよ」

「碧さん！」

「それとも、キス以上は無理？ 裸、見るのも気持ち悪い？」

「え？ なんですか、それ？」

「セックスに嫌悪感あるんでしょ？ いままでHなDVDも見たことないんでしょ？」

「……ああ、亜衣から訊いたんですか？」

「うん。違うの？」

「まあ、以前はそうでした。自分の身体も気持ち悪いと思ってましたから、他人のそういう行為を見るなんて、とても考えられませんでした。いまでもできれば避けたいですけど、必要があれば、見れなくはない気がしてます」

「必要って……？」

「知識として必要なら。あんまり、なにもわかってなかったら、碧さん困りませんか？」

「え？ え？ 瀬戸さん、そういうこと、できないんじゃないの？」

「……キスしたら勃ってたって、いいませんでした？」

「いった……けど、でも……」

多少、生理的に身体が反応すると、セックスへの興味は違うと思っていた。

「碧さん、セックスできない覚悟で、好きになってくれてたんですか？」

「……うん」

「セックス依存症なの？」

「うー…ん、だって……」

自分でも不思議だった。恋人ができれば、すぐに性行為に結び付

けていた。セックスがしたかったのか、恋愛がしたかったのか、よくわからなくなっていた。でも、柚希を好きになってから、そうした不安定で情動的な欲求は収まっていた。

持田から電話がかかってきたときも、動揺はしたけど、碧はちゃんと柚希を選んでいた。

「碧さん、嬉しくて、おかしくなりそうです」

柚希が抱きしめてくれた。

碧は柚希の背中に腕を回した。唇を重ねると、途端に官能的な心地になった。

「碧さん、してもいいですか？」

「うん……」

「でも、ひとから少し話を訊いた程度で、やり方とか、よくわかってないんです。嫌な思いをさせるかもしれないよ」

「いいよ。もし、途中でできなくなっても気にしないから……」

碧はいままで経験したことがない、弱気を口にした。

「もし、あたしとして、瀬戸さんが気持ち悪くなくても、二度とセックスは嫌だと思ってもいいから、だから、嫌いにならないって約束して」

セックスでこんな心配をしたのは初めてだった。でも、柚希と普通に事が済むとは思えなかった。いざ、異性の裸を目の当たりにして、どれほどの嫌悪感が柚希を襲うのか、想像ができない。

もしかしたら、これから行う情交があまりにも不快で、やっぱり性転換したいと言い出すかもしれない。

それでも、いま柚希が『したい』なら、したっていいと思ってる。碧はただ、なにがあっても、柚希と別れたくないだけだった。もし、性転換するなら、その未来も含めて受けとめたい。

「碧さん……どうしてあなたは、そんなに……」

柚希の震える声は、途中でかすれて、そして、互いの吐息に飲み込まれた。



## 第四十八話

### 柚希の部屋

男でも受け入れてもらえるまで（後書き）

これで終わってもいいような気がするんですが、まだちょっと続きます。あと二話は柚希視点で投稿します。一応、明日、明後日、更新予定です。この48話も含めて、いろいろ触り倒してるんですが、私の能力的限界もあるので、時間をかければ良くなるものでもない気がしますので。

## 第四十九話

### 柚希の部屋 恋のすべて

柚希が目を覚ますと、隣で碧が寝息を立てていた。

恋のすべてを教えられた。

そのひとが、すぐ隣で眠っている。夢をみているような気分だった。

愛しくて、愛しくて、しかたがない。

この可愛い寝顔を、先日、亜衣は見たのだと思うと、的外れな嫉妬心を抱きそうになる。このひとのこれからを、独占したいと切望した。

視線に気づいたのか、碧のまぶたが動き出した。

「…………おはよ…」

「おはようございます」

「…………なんか、自己嫌悪だな…」

「え？」

幸せな気持ちが一気に冷めた。昨夜、夢中で行為に及んでしまったけど、碧は後悔しているのかもしれない。不慣れなあまり、嫌なことを強要していたのだろうか。

「碧さん、昨夜のこと、嫌でした？」

心配顔で尋ねると、碧は首を振った。

「違うの。最初に瀬戸さんと出会ったなっと思って思ったの。あたしとつきあうの、嫌じゃない？」

心配していたことはまるで違う言葉が返ってきたので、柚希は安堵した。最初は碧の身体を気遣っていたと思う。なにをしても、壊してしまいそうで怖かった。途中からは、夢中になりすぎて、わけがわからなくなった。

柚希にとってこれ以上ない快樂であっても、碧にとってはおそらく不快なものだったはずだ。手順も、友人から訊いたのがイメージ

のすべてだった。ずいぶん、間違っていたと思う。

それでも碧は咎めもせず、自分の過去を申し訳なく思ってくれているのだ。

「碧さんがなにを気にしてるのか、なんとなくわかります。でも、碧さんのことで、嫌なことなんてありません」

碧が過去に愛した男たちへ、嫉妬する気持ちは正直ある。性行為の技術も、肉体的な魅力も、そのひとたちから自分は、遠く及ばないだろう。そんな袖希にすべてを与えてくれた碧を、不満に思うことなど、なにもなかった。

「でも……」

「初めて出会った日のこと、覚えてます？」

碧の髪を指先で梳いた。どういえば、気持ちが伝わるのだろうかと思案する。

「新歓コンパでしょ」

「あの日、碧さん、彼氏の話、してたんですよ」

「あれ？ そうだったっけ？」

「サッカーの試合を見に行くとか行かないとか……」

「ああ、そういえば……」

「初めてキスしたときも、そのひとから電話かかってきたし、そのあと碧さん、自分が不感症でセックス依存症だって告白したじゃないですか」

「え、ええっと……そう……だったけど……」

目を泳がせて、恥ずかしそうに顔を赤らめるのが可愛かった。まぶたにキスすると、上目使いに袖希の顔を窺ってくる。そんなしぐさのすべてに恋をしそうだった。

「でも、そんなの全然かまわず、好きになっちゃいましたから」

幸せにするとか、守ってあげるとか、普通の男が当たり前に見えることが、袖希はなにもいえなかった。ただ好きだとかいええないのが、情けなかった。

「……うん、ありがとう」

「碧さんの強さも弱さも、全部、好きなんです」

碧は泣きそうに顔を歪めた。縋りつくように腕を伸ばして、柚希の首に巻きつけた。素肌が密着して、柚希は戸惑った。

「碧さん、この恰好でくっつかれると、ちょっと……」

胸のふくらみに興奮するとはいえずに困っていると、碧が首を傾げた。

「嫌なの？」

「嫌とかじゃなくて……」

「もっかい、したくなっちゃう？」

「……………」

「していいよ」

「でも……………」

「まだ、学祭の片づけに行く時間には、間があるよ」

「でもいま、朝ですよ。こんなこととして、大丈夫なんですか？」

いままで友人から訊いた話では、性行為の時間帯は夜に限られていた。朝、セックスする話は、訊いたことがない。

カーテンを閉めていても、部屋は明るい。明るい場所で行為に及ぶのが嫌じゃない女の子は、いないはずだ。碧も、昨夜は電気を全部消してくれと願い出たし。

「朝だと、なんかまずい？」

「…朝でも、こんなことするひと、いるんですか？」

「……………」

碧が不思議そうな顔をしていた。けれどすぐに、上半身を浮かせてキスしてくる。音をたてるキスをして、柚希の手を自分の胸に導いた。

「抱いて。嫌じゃなかったら」

やわらかな膨らみを手のひらに感じて、柚希は身体を沈めた。嫌はずがない。舌を伸ばすと、碧がすぐに応えた。キスを深めながら、柚希はベッドサイドの避妊具に手を伸ばした。

「瀬戸さん、それ、今度買うとき、もうひとつ、大きいサイズにし

の方がいいんじゃない？」

「こんなのに、サイズなんかあるんですか？」

「うん。なんか昨日つけにくそうだったし、合っていないんじゃないかな」

柚希は箱のパッケージを裏返して、考え込んだ。

「それ、自分で買ったの？」

「いえ、松浦さんからもらったんです。モデルのお礼だって」

「… 副部長って、本当になに考えてんの……？」

男でいるうちに、もしかしたら一度くらいは使うかもしれないよ、  
とって笑いながら手渡した松浦の顔を思い出す。捨てずにベッド  
サイドに置いていたのは、碧との情交を、ひそかに思い描いていた  
からだ。本当に使うことになるとは、考えたことがなかったので、  
いまだに夢見心地だ。

柚希は箱の裏を見つめる。Mサイズと明記してあった。

服はメンズだとSサイズでも肩幅が余ることが多いのに、避妊具  
のサイズはまた別なのだろうか。つけにくいとは思ったけど、初心  
者だからだと思っていた。

「……瀬戸さん、大好き……」

碧の腕が背中に回された。昼前には大学に行かなければならない  
のに、間に合うのだろうか、柚希は心配になってきた。

第四十九話

柚希の部屋 恋のすべて（後書き）

一緒に大学まで来たが、碧は一度寮に戻って着替えてくるといったので、正門の前で別れた。

部室に行くと、松浦と佐々木のふたりしかいなかった。ふたりとも疲れ果てた顔で、髪も服もくたびれていた。

部室の隅に、ビニール袋に入ったアルコールの缶が大量にまとめられてある。昨日、柚希と碧が帰ったあと、ここでなにがあったか、容易に想像できた。

松浦と佐々木は、徹夜で飲んでいたのでだろう。空き缶の量からかなりの人数がここで夜を明かしたようだ。碧をここに残して帰らなくて、本当によかった。

「おはようございます」

「そんなに早くはないけど、おはよう」

部室はほとんど片付いていた。個人写真がわずかしか見当たらない。写真部の部員がすでにここに来て、持って帰ったのだろう。やはり来るのが遅かったようだ。

「すいません。片付けに参加できなくて」

「準備よりはずっと楽だったからいいよ。昨日、徹夜で飲んでたし、そのままここで寝てたやつが片付けたって感じだから。でも珍しいね、柚希ちゃんがこの手のことに遅刻するなんて。そういえば、碧ちゃんも来てないな。文学部のほうかな」

松浦の疑問に柚希が答える。

「いえ、碧さん、もうすぐこっちに来ます。いま寮に戻ってるんです」

「なんで知ってるの……って訊くだけ野暮だった？」

「野暮ですね。でも、心配してもらってたんで、報告がてら、ぶっちゃけますと、昨日、碧さんを部屋に連れ込んで、青春してました」

「……………そうだったんだ。えっと…」

松浦は佐々木の存在を気にするように、目を泳がせた。どんなときでも、細やかな気遣いのできる松浦に、柚希はまたぞろ好感を持つた。

「佐々木さんには、全部、カミングアウト済みです」

「そうなんだ？」

「最初、訊いたときは、思いつきしびりましたよ。ふたりだけで話したいことがあるって呼び出されて、告白でもされんのかと思ったら……………」

名画の片づけをしていた佐々木が、手を止めて肩を竦めた。

「だろうね。気持ちはわかるよ。でもなんで、佐々木に話したの？」

松浦はそのときの佐々木の心情を思うと、面白くてしかたないといった様子で、肩を震わせていた。

「佐々木さんって、碧さんのこと好きなんじゃないかなって思ったものですから、なんとか諦めてもらいたくて。でも全部説明するのが面倒だったんで、カミングアウトしたんです。レズだと思われるより、説得力があるかなって」

「説得力とか通り越して、爆弾だろ、そりゃ。だいたい、俺が碧ちゃんを好きだとか、えらい誤解だし」

「そうですか？　なんとなく小学生が、好きな女の子にかまわれたくて、ちょっかい出してるようにも見えたんですけど」

「俺、大学生だし。どっちにしても、俺の手に負えるような女じゃねえよ、あの生き物は。柚希ちゃんの勇気に感動したわ」

いまの言葉を、喜ぶべきか、悲しむべきか悩んでいると、松浦は愉しそうな笑い声をたてた。

「ま、碧ちゃんはちょっと破天荒なところがあるからね」

「ちょっとどころじゃねえし……………」

佐々木がまだ、ぶつくさいっている。まあ、勘違いなら有難かつた。珍妙なところもあるが、佐々木の優秀さは碧も認めていたので、ちよつと不安だったのだ。どうしたって『男の魅力』ではかなわな

い。

「松浦さん、そういえば、カラオケ行ったとき、ウィーン少年合唱団にたえたり、時間がないとか、いったじゃないですか」

「ああ、いったよ」

「あれって、私が碧さんに恋愛感情持ったら、表情が変化するって意味だったんですか？」

松浦が撮った自分の二枚の写真の意味を、柚希はまだはつきり理解していなかった。亜衣と碧に、時間をずらして来るように仕掛けたのは、表情の違いを撮りたかったのだろうとは思っけど。

「まあね。本当は、男に戻りかけてる表情を撮るつもりだったんだけど、あんまり、そんな感じにはならなかったな。妙に色気のある写真は撮れたけど」

「いまは、どうですか？」

「どうって？」

「男に見えますか？」

「全然、見えないよ」

松浦は、柚希を上から下まで眺めて、不思議そうに首を傾げた。

「うーん、男としての青春を通過したのに、残念ですね」

「ちよつと待って」

松浦が、慌てて身を乗り出した。

「あのさ、碧ちゃんを連れ込んで青春したっていったけど、それってつまり、その…そういうような感じの、そういう行為……？」

松浦にしては歯切れの悪い言葉である。内容が内容だけに、無理はないが。

「寝たかどうかと訊かれてるなら、寝ました」

「！でも、柚希ちゃん、きみは確か……」

「ああ、そうか。松浦さんとカラオケ行ったときは、まだ自分でも不能だと思ってたんですね。たぶんいまでも、碧さん以外には、勃たないんじゃないかな」

「……………」

松浦は絶句して、固まってしまった。

「袖希ちゃん、カミングアウトされたけど、見た目、思いつきし美少女だし、勃つの勃たないのといわれると、すげー、抵抗あんだけど……」

佐々木が悲愴な声で不満を口にしてくるが、正直、このひとはどうでもいい。

「そんなこといわれても……。だいたい松浦さん、マスの掻き方、教えてくれるっていったじゃないですか」

「あんなの、冗談だよ。性転換しないことに決めたのに、先に進めなくて悩んでたから、冗談半分でいっただけだし……」

「うわー、やめてくれー。夢が壊れるー」

佐々木が頭を抱えて悶えていた。面白いので、放っておくことにした。

袖希にとつて、男同士で下ネタを語り合つのは初めての経験なので、新鮮だし、かなり愉しかった。

ガールズトークに混ぜられることは少なくないが、女の子の話の方が、よほど過激だ。法学部の同級生に恋愛上級者の女の子がいて、袖希がカミングアウトしたら、面白がつて、自らの武勇伝や失敗談を無理やり訊かせてくれた。

前戯が手抜きだったとか、終わったあと、さっさと抜かないから、避妊具が身体の中に残って大変だったとか。

佐々木がこんな程度の会話で、赤くなったり青くなったりしているのが、心配になるほどだ。

まあそれでも、そんな生々しい話も訊いておいてよかった。なにもしらなければ、碧にもっと迷惑をかけただろうし、場合によっては、愛想を尽かされていたかもしれない。亜衣がこの手の話をほとんどしないので、過激な言動の友人でもいてくれないと、袖希としては、困るのだ。

女の子側からのNGを知っていたので、最低限のマナーは守れたと思う。……たぶん。

「……で、青春はどうだった？」

「どうなんでしょう？ 私はともかく、碧さんは嫌だったのかもしれないし……。初心者なんで、下手さ加減もわからないです。写真みたいに、見てもらって、教えてもらうこともできないし、みんな、どうしてるんですか？」

「……………」

松浦は、頬を引きつらせて、こめかみを押さえた。いつもこんな態度に出られる度に思うのだが、松浦は少し、変わっている。なにを考えているかわからない、と碧がよくいうが、頷けるものがある。「瀬戸さんにそういうこと、あんまり詳しく、訊かない方がいいですよ」

声に振り向くと、開けっ放しの部室の扉から、碧が入ってきた。

この思い出深い場所で、こんなに穏やかな気分で、碧に相對するのは久しぶりだ。思わず、破顔しそうになる。

「へえ、碧ちゃんもついに、恥じらいの感情が目覚めた？」

「ひとを恥知らずみたいに、いわないでください。そうじゃなくて、男のプライドが木端微塵になるから、詳しく訊かない方がいいって、いつてるんです」

「そうなの？」

「マジで？」

「そうなんですか？」

「……………なんで、瀬戸さんまで、疑問符つきなのよ？」

「自分じゃよくわからなくて……………」

実際のところ、碧の言葉の意味は、はっきりとはわからない。けれど、少なくとも昨夜と今朝の交歓を、碧が極端に嫌がっているわけではなさそうなので、安心した。

「すげー。なんかめっちゃくちゃ興味あんなー。柚希ちゃん、ツレシ

ヨン行かねー？」

「絶対、駄目！」

間髪入れずに、碧が佐々木を睨みつけて、がなりとばした。

「お前、カレシのトイレにまで、口、出すなよ」

「なんていわれても、嫌なものは嫌なの」

「柚希ちゃん、碧ちゃんのこの態度、どう思う？ このままじゃ尻に敷かれるぜ？ 別れんなら今のうちじゃねーの？」

佐々木の言葉に、碧は黙り込んだ。視線を送ると、少し、不安そうなおな表情をしていた。

「……可愛いと思うんですけど」

途端に、碧は顔をほころばせた。

そんな様子も、抱きしめたくなくなるくらい、可愛かった。

「うわ、やっぱ、幸せのドクターイエローか」

佐々木が頭を抱え込んだ。

そういえば、以前部室で、そんな話を聞いたことがある。なんでも電車がらみなところが、撮り鉄の面白さだろつか。佐々木の説に従えば、自分たちは幸せの黄色い新幹線が祝福したカップルというわけだ。

亜衣から、碧が亜衣の部屋から、黄色い新幹線を見たことは訊いていた。

「だいたい、瀬戸さんのこの姿で男子トイレになんか、入れるわけないじゃない。馬鹿じゃないの？」

「そういえば、スカート履いてるの、久しぶりに見た気がするな」

松浦の指摘に、柚希は頷いた。

「はい。今日は碧さんのリクエストで……」

「そうなんだ。どうして？」

「これが終わったら、買い物につきあってもらう予定なんです」

「買い物？ なんの？」

「靴とランジェリー」

「……………」

「お前、やっぱ、おっかねーわ。カレシを下着売り場にまで連れて行く気がよ」

今朝、碧に買い物のお同行を頼まれたときは、とくに抵抗を感じな

かった。けれど、松浦や佐々木の反応から、自分たちの行動は、多少、常軌を逸しているのかもしれない。

柚希の方は恋愛自体が初めてなわけだけど、碧は何度もつきあった経験があるのに、こんな指摘をされるのは少し腑に落ちない。同性だと認識していたときの感覚が、まだ、残っているのだろうか。

今朝、『つきあってる相手が女装してるって、嫌じゃないですか』と訊いたら、逆に『なんで?』と訊き返された。

せっかく可愛いのに、無理して男装するなんて、もったいないよ、と続いた言葉には、妙に救われた。そのうち、似合わなくなつて、女装に自分で違和感を覚えてから、考えればいい。

少なくともいまの碧には、柚希が男の服を着ることが『男装』なのだから。

そんな時間を、当たり前のように与えてくれる碧は、心の強者だと柚希は思う。

「どうせなら、好みを訊いて買いたいじゃない。可愛い乙女心だもん」

「ぜってー、違うぞ」

「……まあ、俺ら男も、見習うべきところがあるかもね」

「松浦さん、人間、見習って出来ることと、出来ないことがありますって」

「確かに……。柚希ちゃんは、ある意味、最強ってことだな。あ、そうだ、碧ちゃん、これ、約束してたやつ。中身だけでいいんだよね」

松浦が、大きな茶封筒を碧に手渡した。

「ありがとうございます。嬉しい〜。一生、大事にします」

顔をほころばせ、大切そうに封筒を抱きしめる。くしゃくしゃにならないように、気を遣っている様子が伺えて、中身がよほど大切なものだと知れた。

「碧さん、それ、なんですか?」

「内緒」

「ええ？ 教えてくれないんですか？」

「だって、恥ずかしいもん」

「お前、それが恥ずかしいなら、いままでの恥知らずな会話はなんなんだよ」

佐々木がまた、碧に突っかかっっていく。ふたりが角を突き合わせているのを眺めてから、柚希は松浦に縋るような視線を送ってみた。

松浦は肩を竦めて苦笑した。

「あげた時点であれば碧ちゃんのものだから、俺が教えるのはルー達反だろっ？」

そういわれる気がしていたので、柚希は松浦から訊きだすのを諦めた。

そのあと、暗室の中に詰め込んだ荷物を出して、机を元通りに並べたり拭いたりして、残っていた片づけを終わらせた。

碧とふたりで先に部屋を出ようとして、松浦に呼び止められた。

「きみら、自分の作品を忘れてるよ」

そういえば、作品展に出品した写真を持って帰らなければならぬのだった。碧の手に、茶封筒がしっかり握られていたのを見て、柚希は気がついた。

自分の作品を忘れている、と松浦はいった。碧の持つ封筒には、松浦の写真が、自分を写した写真が入っているのだ。碧は、自分の写真を欲しがってくれたのだ。柚希は、にやけそうになったけど、気づかない振りをした。

碧が一生大事にするといった言葉が、嬉しくてしかたがない。

できれば被写体本体にも、同じ気持ちになって欲しいものだ。

キャンパスを歩きながら、隣を歩く碧の横顔をこっそり覗き見た。初めて会った日も、こうして並んで歩いた。もうあのときから、碧に夢中になっていた気がする。

これからふたりが歩く道は、決して平坦ではないだろう。自分は案外嫉妬深く、心配性のようだ。それでも、碧がそばにいたいと

いつてくれたから、こうしていつまでも、並んで歩いていきたい。  
袖希は澄み切った空を見上げて祈った。

このひとに、恋を感じるときが、ずっとずっと、続きますように  
……。

## 最終話

### 部室 恋を感じるとき（後書き）

最後まで読んでいただいて、ありがとうございました。このふたりはこれからも、普通のカップルではなんでもないこと、大騒ぎになったりしそうですね。色々書き足りないところも、書きすぎたところもありましたが、楽しんでいただけたなら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5436u/>

---

恋を感じるとき

2011年9月26日03時15分発行